

JICA中部
2019年度

教師海外研修 報告書

パラグアイ



7/27(土)~8/9(金)

14日間(現地10日間)



■ 主催：独立行政法人国際協力機構 中部センター（JICA中部）

■ 後援：外務省、文部科学省

愛知県教育委員会、岐阜県教育委員会、三重県教育委員会、静岡県教育委員会、
名古屋市教育委員会、静岡市教育委員会、浜松市教育委員会

■ 運営委託先：特定非営利活動法人 NIED・国際理解教育センター

2019年度 教師海外研修報告書

目 次

現地研修で印象に残った2枚の写真

I. 教師海外研修の概要

- 1 ● 目的とねらい
- 2 ● 派遣国と訪問先
- 4 ● 募集と研修受講者
- 5 ● 研修全体のスケジュール

II. 出発前後の国内研修・説明会等

- 7 ● 事前研修
- 10 ● 臨時ミーティング
- 11 ● 事後研修

III. 現地研修の様子と受講者の学び

- 13 ● ①JICA パラグアイ事務所ブリーフィング+懇親会
- 13 ● ②レヒオン・デ・ラ・プエナ・ボルンタ協会/青年海外協力隊活動 (青少年活動)
- 13 ● ③パラグアイ・日本人造りセンター/青年海外協力隊活動 (体操競技)
- 14 ● ④Palo Santo 製品工房 +夕食懇親会
- 14 ● ⑤国立植物・種子品質・防疫機構 (SENAVE) 研究所/小規模農家の輸出農作物安全性向上プロジェクト
- 14 ● ⑥青年海外協力隊 (小学校教育) 2名との意見交換
- 15 ● ⑦白沢商工株式会社
- 15 ● ⑧第 15328 サン・エンリケ・デ・オソ小学校/青年海外協力隊活動 (小学校教育)
- 16 ● ⑩カテウラ音楽団/カテウラ地区
- 16 ● ⑪ヌエストラ・セニョラ・デ・カアクペ中等学校/青年海外協力隊活動 (体育)
- 16 ● ⑫ヤシレタダム湖隣接地域総合開発調査プロジェクト/ダム取水口
- 17 ● ⑬ピラポ入植 59 周年記念慰霊祭、祝賀会+⑭ピラポ日本人会、移住史料館、日系スーパー/ピラポ移住地
- 17 ● ⑮ピラポ幼稚園+⑯ピラポ日本語学校/日系社会青年海外協力隊活動 (青少年活動)
- 17 ● ⑰日系農家ホームビジット
- 18 ● ⑱ビジャリカ市内見学・教材収集
- 18 ● ⑲ロマ・ヒンド保健パスト/青年海外協力隊活動 (看護師)

- 18 ● ⑳プロフェソル・ペドロ・アギレラ第 47 小学校/青年海外協力隊活動 (小学校教育)
- 19 ● ㉑ニヤンドウティ(伝統工芸) 見学/作家ホームビジット
- 19 ● ㉒カテウラ地区見学+サンタ・ロサ・デ・リマ小学校/JuvenSur(現地NGO)&ミタイ・ミタクニヤ子ども基金
- 20 ● ㉓JICA パラグアイ事務所報告会+JICA 事務所関係者・専門家・JICA 海外協力隊との懇親会
- 20 ● ㉔㉕アスンシオン市内見学、教材収集

IV. 帰国後の報告

- 21 ● 現地研修報告書
- 21 ● 1. 現地研修に対する各自の目的とその達成度
- 22 ● 2. 柱1「訪問国に肯定的に出会う」観点から学んだこと
- 24 ● 3. 柱2「日本と訪問国とのつながりや同一性を理解する」観点から学んだこと
- 26 ● 4. 柱3「共通の課題について共に考え・共に越える」観点から学んだこと
- 28 ● 国内研修・実践報告フォーラム 2020 での報告

V. 実践報告書

- 29 ● 実践報告書の内容一覧
- 30 ● 青山将太郎：残さず食べよう〜ぼく・わたしができること〜
- 35 ● 金尾亜生子：日本も世界もみんなアミーゴ
- 41 ● 狩山智美：世界を見よう。知ろう。考えよう！
- 46 ● 佐々木恵：みんなが住みたい！と思う世界に
- 51 ● 柴田英子：We are all one!!~SDGs への取り組みを通して~
- 57 ● 長谷川義洋：世界の国々について知ろう
- 62 ● 宮嶋いずみ：世界のこと、みんなで一緒に考えよう！
- 68 ● 村瀬泰広：結集せよ！~日本の未来を支える頭脳~
- 73 ● 湯浅郁也：遠そうで近いパラグアイ
- 78 ● 横井美月：世界のつながり、ありがとう！

VI. 研修全体のふりかえり・評価

- 83 ● 研修受講者のアンケート結果から
- 83 ● 1. 研修の満足度について
- 83 ● 2. 開発教育・国際理解教育の実践について
- 84 ● 3. 学習者のより良い変化について
- 85 ● 4. 研修内容への評価
- 87 ● 5. 教師海外研修の良かったこと、より良くするための提案



● 青山 将太郎



「ピラボ日本語学校の2年生」

たった 45 分だったけど、楽しく授業をすることができた。「先生、先生。」と寄ってくる姿は日本の子どもたちと変わらず、可愛いなと感じた。



「広大な穀倉地帯へ・・・」

ヤシレタダムから、40 kmほど水路を伸ばして穀倉地帯を作るプロジェクトが進められていた。生態系と社会発展のバランスを考えながら、慎重に開発を進める人たちの壮大な夢と不断の努力を感じた。

○ 金尾 亜生子



「本当の豊かさとは」

日系人の中古味さん一家との集合写真。自給自足の生活、家族や友達と共にごす生活。ゆったりと流れる時間。豊かさとは何かを考えさせられた。



「私の夢」

カテウラ地区のサンタ・ロサ・デ・リマ小学校。学校は毎年水没し、違う場所に避難して勉強をしているという。そんな中、通訳のエリカさんに恥ずかしそうに夢を語ってくれた。

● 狩山 智美



「ピラボで集合！」

ピラボの日本語学校幼稚園では、体育の授業に参加した。一緒に走ったり、ボールを転がしたりして、とても楽しかった。遠い地で生きる私たち。それでも、日本人としての絆を感じた。



「自然の恵みを感じて」

外でパラグアイ料理を。チキンを食べつつふと目に留まったのが、放し飼いでいたニワトリ。聞くと、やはり絞めて調理したとのこと。当たり前だと忘れていた。私たちはいつも命をいただいている。



● 佐々木 恵



「こんなに大きく育ったよ」

日本人移住地の一つ、ピラボで生活する兄弟。「こんなにも大きなヘチマができたんだよ。」と満面の笑みで教えてくれた。自然体験が減ってしまっている日本の子どもたちともまた、授業を通して自然の素晴らしさとありがたさについて考えていきたいと思った。



「豊かな生活」

「パニャールソール」と呼ばれる場所に住んでいる人の家。すぐ隣には、近隣から集められたごみが山のように積み、その一帯にごみの臭いが充満している。そんな中、音楽をかけたり、植物を育てたりと人生を楽しむ工夫をしていた。どんな境遇でも、心の余裕を作ろうとする強さに憧れた。

○ 柴田 英子



「雄大な自然」

小麦畑が辺り一面に広がりとても気持ち良い景色だった。この景色の背景には、次世代のために土地がやせないように守っていく農家の方の様々な思いが込められている。本当の豊かさとは何か考えるきっかけとなった。



「人らしい生活」

カテウラ地区に次々と運び込まれるごみの量やおいに圧倒された。NGO JuvensSurの方が、「ここでの暮らしが人らしい生活どうかを考えてください。」と言った言葉が頭から離れない。



● 長谷川 義洋



「一緒に踊ったバナナダンス」

授業の休憩中に子どもたちと共に売店へ。お菓子を買おうとする子どもにもバナナをすすめたが、全く買おうとしなかった。バナナ～バナナ～。いつしか子どもと一緒にバナナのダンスを踊っていた。

● 宮嶋 いずみ



「白沢社長」

白沢商工株式会社前での集合写真。白沢社長の熱い思いを聞き、心打たれた。帰りには辺りは暗くなっていたが、バスが出発するまでずっと玄関先で見送りをしてくれ、白沢社長と社員さんの温かさを感じた。

○ 村瀬 泰広



「未来のソリスト」

道路は冠水し、あちこちの建物が損傷した貧しい地区で活動するカテウラ音楽団。そんな中で、生き生きとした笑顔で音楽を楽しみ、廃材でつくられたバイオリンに奏でる一人の少年の姿に、一瞬で心を奪われた。



「忘れられないワークショップ」

今回一緒にの研修に参加したメンバーで何時間も語り合ったワークショップ。見て、聞いて、食べて、感じたことを話し合いながら、自分の考えを深めた。



「万国共通の笑顔」

プロフェッソル・ペドロ・アギレラ第47小学校での交流で、大縄跳びをした。初めて跳ぶようだったが、こつを掴み、上手に跳べていた。初めての大縄に戸惑いながらも、跳べた時の笑顔は、万国共通、輝いていた。



「自然保護と開発の行方」

ヤシレタダムの水を使った灌漑施設の建設予定地。この風景は大きく変わることになる可能性がある。パラグアイの人々が自然保護と開発という課題にどのような結論を出すのか、再び訪れてその結論を見たいと思った。



● 湯浅 郁也



「サンタ・ロサ・デ・リマ小学校」

子どもたちの笑顔が印象的なカテウラ地区にある小学校での1枚。訪問時は洪水の影響で学校として機能していないため他の場所を借りているとのこと。地域によっては十分な教育が受けられない状況もあるようだ。



「Via Chile ?!」

パラグアイで走る日本車の一例。日本車(中古車)の多くがVia Chileと呼ばれるチリを経由し左ハンドルに改造されるとのこと。写真の車は新車でVia Chileではない。

● 横井 美月



「想いの刺繍」

パラグアイの民芸品ニャンドゥティも日本の伝統工芸品と同様、継承が難しくなっている。特に、作成に時間がかかる細い糸の作品を作る人は少ない。「その国らしさ」である文化をお互いに残していきたいと強く感じた。



「パラグアイの日本」

日本語学校の生徒に日本の高校生の弁当の写真を見せると、生徒たちのものと大体同じだという。一人の生徒が「中身は茶色の食べ物ばかり」と言い、全員で笑い合った時間はお互いのつながりを感じる温かいものだった。



集合写真

上：Palo Santo（香木）製品工房
& JICA パラグアイ事務所
懇親会



中：ヤシレタダム湖隣接地域総合
開発調査プロジェクト



下：カテウラ地区
JuvenSur（現地 NGO）&
ミタイ・ミタクニヤ子
ども基金

I. 教師海外研修の概要

● 目的とねらい

「持続可能な社会の創り手の育成」への貢献をねらいとし、次の2点を本研修の目的としている。

- (1) 開発教育/国際理解教育の実践と裾野拡大に貢献する意欲のある教員が、開発途上国訪問や事前・事後の研修を通じ、開発途上国の現状・課題、日本との関係、国際協力の現場、さらには開発教育/国際理解教育の意義について理解を深めること
- (2) 参加者が、研修成果を活かした学校での授業実践を通じ、「持続可能な社会の創り手」としての児童・生徒の育成を行うこと、また、汎用性のある学習指導案の作成などの取り組みを通じて他の教員等と共に開発教育/国際理解教育の普及に寄与すること



この事業の目的を踏まえた教師海外研修の目的を次のとおり設定している。

海外研修のテーマを「持続可能な開発」とし、教師の皆さんが、パラグアイの暮らしや社会、JICAの協力活動等の体感を通じて、人類の多様性、心の同一性、問題点、課題を解決するために必要なことなどを調べ考え、その経験を共通の教材にし、日本の児童・生徒への開発教育・国際理解教育に活かしてもらうことを目的とする。

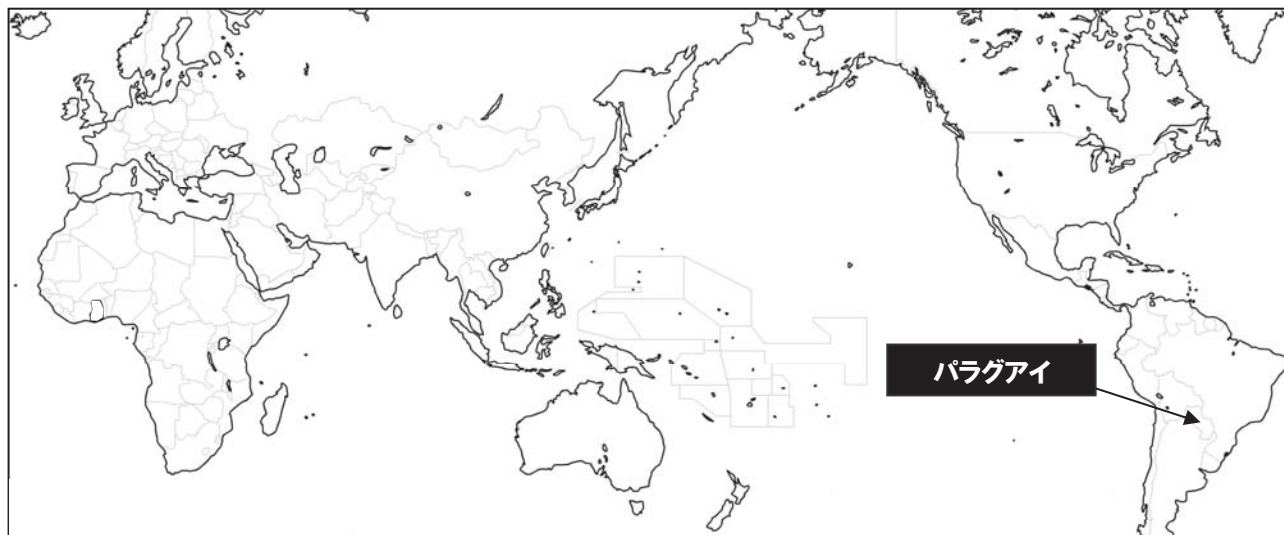
パラグアイ現地研修の学びの視点

1. 訪問国に肯定的に出会う	<ul style="list-style-type: none"> ◇ 世界の多様性を知り、多様な人やものと出会うこと・交流することの楽しさを伝える。 ◇ 多角的に肯定的に相手国と出会い、人の顔が見え、つながりを感じられるようになる。
2. 日本と訪問国とのつながりや同一性を理解する	<ul style="list-style-type: none"> ◇ 地球規模で進むグローバル化の恩恵と課題を理解し、日本とパラグアイとのつながりに気づき、つながりを築く。 ◇ 国や人の多様性だけではなく、共通するものがあること(同一性)を理解する。
3. 共に考え・共に越える共通の課題の解決をめざす	<ul style="list-style-type: none"> ◇ 相手を知ることで自国(自分)をふりかえり、互いの誇りや課題を確認する。 ◇ 共に学びあい、知り、考え、気づき、よりよい未来を共に築く入り口を提供する。

● 訪問国と訪問先

(1) 訪問国

本年度の訪問国はパラグアイ 1 カ国である。



(2) 現地研修における訪問先

現地研修における現地スケジュールと訪問主要都市地図を P.3~4 に示した。

訪問先の選定にあたっては、JICA、運営委託先である NIED・国際理解教育センター、現地研修同行ファシリテーターを交えて検討を行った。

手順としては、現地研修の学びの視点を満たす主要テーマを設定し、各国の概要、過年度の研修の訪問実績および現在の JICA の活動を踏まえ、在外事務所と調整しながら、最終的な主要テーマを下表のとおり設定し、それに沿った訪問先に決定した。

学びの視点ごとの主要テーマ

学びの視点	主要テーマ
1. 訪問国に肯定的に出会う 2. 日本と訪問国の同一性に気づく	A 衣食住 B 衣食住以外の暮らし・文化 C 人々の気持ちや考え D 学校・子どもの生活
2. 日本と訪問国とのつながりを理解する	E 日本とのつながり（貿易など） F 日本とのつながり（移民、JICA の協力）
3. 共通の課題について共に考え・共に越える	G 教育・職業訓練（格差是正の一手段） H 格差是正（社会サービス・基盤の充実、貧困層の生活向上）・持続的経済開発

現地研修の訪問スケジュール

期日	訪問先	研修場所
7/27 (土)	15:30 名古屋駅太閤通口発 (連絡バスEK7031/3h20m) →18:50 関西国際空港着 (乗継4h55m) →23:45発 (EK317/10h05m) →	機内
28 (日)	04:50 ドバイ着 (乗継4h15m) →09:05発 (EK261/14h55m) → 17:00 サンパウロ着 (乗継5h35m) →22:35発 (LA1300/2h10m) →23:45 アスンシオン着 →ホテル泊	機内 アスンシオン
29 (月)	① JICA/パラグアイ事務所ブリーフィング →両替 ② レヒオン・デ・ラ・ブエナ・ボルンタ協会 (NGO) 貧困層幼児対象の保育施設/青年海外協力隊 (青少年活動) ③ パラグアイ・日本人造りセンター (体育館) / 青年海外協力隊 (体操競技) ④ Palo Santo (香木) 製品工房 (パラグアイ移住日本人経営) + 夕食懇親会	アスンシオン
30 (火)	⑤ 国立植物・種子品質・防疫機構 (SENAVE) 研究所 / 小規模農家の輸出農作物安全性向上プロジェクト ⑥ 青年海外協力隊 (小学校教育) 2名との意見交換 / JICA/パラグアイ事務所 ⑦ 白沢商工株式会社 (日系人ゴマ商品生産者)	サンロレンツォ ↓ アスンシオン ↓ リンピオ
31 (水)	⑧ 第15328サン・エンリケ・デ・オソ小学校 / 青年海外協力隊 (小学校教育) ⑨ アスンシオン市内見学・教材収集 (文房具店・本屋・スーパー) ⑩ カテウラ音楽団 / カテウラ地区	サンロレンツォ ↓ アスンシオン ↓ ランバレ
8/1 (木)	・陸路 (アスンシオン→イタプア県サンペドロ・デル・パラナ 5h) ⑪ ヌエストラ・セニョラ・デ・カアクペ中等学校 / 青年海外協力隊 (体育) ⑫ ヤシレタダム湖隣接地域総合開発調査プロジェクトサイト (ダム取水口) ・陸路 (サン・コスメ・イ・ダミアン→イタプア県ベジャビスタ 2h)	サンペドロ デル・パラナ ↓ サン・コスメ イ・ダミアン
2 (金)	⑬ ピラポ入植59周年記念慰霊祭、祝賀会 / ピラポ移住地 ⑭ ピラポ日本人会、移住史料館、日系スーパー	ピラポ
3 (土)	⑮ ピラポ幼稚園 / 日系社会青年海外協力隊 (青少年活動) ⑯ ピラポ日本語学校 / 日系社会青年海外協力隊 (青少年活動) ⑰ 日系農家ホームビジット ・陸路 (ピラポ→グアイラ県ビジャリカ 4.5h)	ピラポ
4 (日)	★ふりかえりミーティング (休養日) ⑱ ビジャリカ市内見学・教材収集 (まち歩き、屋台・スーパー)	ビジャリカ
5 (月)	・陸路 (ビジャリカ→テビクアリ 1h) ⑲ ロマ・ピンド保健ポスト / 青年海外協力隊 (看護師) ・陸路 (テビクアリ→コルディリェラ県イタクルビ 1h) ⑳ プロフェッソル・ペドロ・アギレラ第47小学校 / 青年海外協力隊 (小学校教育) ・陸路 (イタクルビ→イタウグア 1h)	テビクアリ ↓ イタクルビ
6 (火)	㉑ ニヤンドウティ見学 / 作家のホームビジット ・陸路 (イタアグア→ランバレ 1.5h) ㉒ アスンシオン市内教材収集 (マーケット) ㉓ カテウラ地区見学、サンタ・ロサ・デ・リマ小学校 / JuvenSur (現地NGO) & ミタイ・ミタクニヤイ子ども基金 ㉔ JICA/パラグアイ事務所報告会 / JICA/パラグアイ事務所 + JICA事務所関係者・専門家・JICA海外協力隊との懇親会 / アルパ・ロガ	イタアグア ↓ ランバレ ↓ アスンシオン
7 (水)	㉕ アスンシオン市内教材収集 (民族衣装店、Tシャツ店、民芸品店) 13:35アスンシオン発 (EK3732(G3)/2h00m) →16:35サンパウロ着 (乗継8h50m) →	アスンシオン ランバレ
8 (木)	01:25サンパウロ発 (EK262/14h30m) → 22:55 ドバイ着 (乗継4h05m) →	機内、空港内
9 (金)	03:00ドバイ発 (EK316/9h15) →17:15 関西国際空港着 (乗継1h40m) →19:30発 (連絡バスEK7032/3h20m) →22:50名古屋駅太閤通口着 (解散)	機内

現地研修の訪問先主要都市



Map No. 3760 Rev. 3 UNITED NATIONS
June 2004

Department of Peacekeeping Operations
Cartographic Section

※ 地図出典：UN(国際連合)ウェブサイト内 <http://www.un.org/Depts/Cartographic/map/profile/paraguay.pdf>

● 研修の受講者

(1) 受講者

同行者を除く 10 名の研修受講者の属性及び同行者を含む名簿は以下のとおりである。

性別：女性 6 名、男性 4 名
年代：20 代 3 名、30 代 6 名、40 代 1 名
地域：愛知県 9 名、三重県 1 名
校種：小学校 8 名、中・高等学校 1 名、高等学校 1 名

教師海外研修受講者および同行者名簿

No.	名前	所属先・教科・学年	県名
1	あおやましようたろう 青山将太郎	岡崎市立六ツ美中部小学校 算数、2年	愛知県
2	かなおあいこ 金尾亜生子	愛知教育大学附属名古屋小学校 外国語、4年	愛知県
3	かりやまともみ 狩山智美	名古屋市立烏羽見小学校 全科、6年	愛知県
4	ささきめぐみ 佐々木恵	桑名市立星見ヶ丘小学校 全科、4年	三重県
5	しばたえいこ 柴田英子	一宮市立起小学校 全科、6年	愛知県
6	はせがわよしひろ 長谷川義洋	名古屋市立山田小学校 特別支援学級	愛知県
7	みやしまいずみ 宮嶋いずみ	名古屋市立稲葉地小学校 全科、6年	愛知県
8	むらせやすひろ 村瀬泰広	蟹江町立舟入小学校 全科、6年	愛知県
9	ゆあさいくや 湯浅郁也	名古屋大学附属中・高等学校 英語、中学3年、高校3年	愛知県
10	よこいみつき 横井美月	愛知県立熱田高等学校 英語、1年	愛知県
11	ほりかわえみ 堀川絵美	NIED・国際理解教育センター 同行ファンリテーター	愛知県
12	えぐちゆきこ 江口由希子	JICA中部 同行者	愛知県

(2) 応募資格等

【応募資格】 次の要件をすべて満たす方

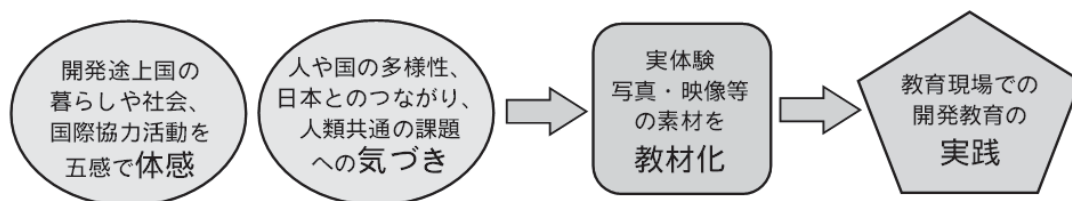
- ① 愛知県、岐阜県、三重県、静岡県の国公立、私立の小学校、中学校、義務教育学校、高等学校、中等教育学校、特別支援学校、高等専門学校の教員（児童・生徒に開発教育・国際理解教育を継続的に実践できる立場にある教員）で、所属する学校の校長の推薦があること。
- ② 原則、JICA が実施している教師海外研修、JICA 海外協力隊、専門家、国際協力レポーター（ODA 民間モニター）等 JICA から海外に派遣された経験がないこと。

【参加条件】 次の条件を満たす方

- ① 教師海外研修の趣旨・目的を十分理解し、同研修の実施および以後 JICA が実施する開発教育支援事業に協力可能であること。
- ② 2019 年度中に授業やクラブ活動で、教師海外研修の経験を活かした開発教育・国際理解教育を実践できること。
- ③ 国内で実施される研修・説明会および現地研修の全行程に参加可能であること。
- ④ 派遣国の事情（道路状況や衛生環境等）を勘案した上で、全研修行程に参加するに耐えうる健康状態であること。
- ⑤ 帰国後、所属長の承認を得たうえで、1) 海外研修に関する報告書を提出すること、2) 所属校における授業実践内容についての実践報告書を提出すること、3) 実践報告フォーラムで実践内容を発表すること、4) これら提出物を報告書冊子や JICA ウェブサイトなどで一般公開されることに同意すること。
- ⑥ 本研修に関わる連絡・情報共有のため、Eメールでの連絡が可能な方。
- ⑦ 受講者・スタッフ間のメーリングリストなどでの情報共有に賛同いただけること。

● 研修全体のスケジュール

教師海外研修の各研修等は、以下のような年間を通した日程で行った。



回	日時	内容（予定）
事前研修	6月29日（土）11：00～17：00 6月30日（日）10：00～16：00	<ul style="list-style-type: none"> ● 本研修の概要、派遣国・訪問先の説明 ● 海外渡航手続き、健康・安全管理等の留意事項の説明 ● 研修目標の共有、情報収集・交流の準備、役割分担
パラグアイ 現地研修	7月27日（土）～8月9日（金） (14日間/現地10日間)	<ul style="list-style-type: none"> ● 開発途上国の現場体験、教材の素材収集 ● 気づきの共有、受講者同士の学び合い
事後研修①	8月31日（土）10：00～18：00	<ul style="list-style-type: none"> ● 現地研修の気づきや素材の教材化 ● 上記教材を使った学習者主体の授業案の作成
<p>9月～1月：各自、学校の授業などで実践！ 10月、12月の2日間（休日）：実践のフォローアップ（自由参加）</p>		
事後研修②	2月15日（土）10：00～18：00	<ul style="list-style-type: none"> ● 実践の内容、成果と課題の共有 ● フォーラムでの報告の準備
実践報告 フォーラム	2月16日（日）10：00～17：00	<ul style="list-style-type: none"> ● 実践の報告（ポスターセッション） ● 有志チームによる開発教育体験ワークショップ ● 海外研修の報告 ● 実践者つながりワークショップ

※ 事後研修②と実践報告フォーラムは、開発教育指導者研修（実践編）受講者と共同で行う。

● 事前研修

6月29日(土)11:00~17:00、30日(日)10:00~16:00

<ねらい>

- ◇ 教師海外研修の目的・内容を理解し、自分たちの言葉でミッションを立てる。
- ◇ 訪問国の JICA 事業および訪問先の情報を共有する。
- ◇ 海外研修の経験を授業につなげるための教材の収集方法を検討する。
- ◇ 現地で行うチームの役割分担、役割係ごとの内容を検討する。
- ◇ 海外研修の準備・留意事項（フライト、持ち物、健康・安全対策など）を確認する。

<プログラム>

■ 1日目：6月29日（土）

時刻	内容	講師等
11:00 (8分)	1. 開会 (1) 主催者あいさつ (2) スタッフ、同行者の紹介	JICA 江口
11:08 (7分)	2. 教師海外研修の目的・内容 (1) 研修の全体概要と受講者への期待	NIED 川合
11:15 (45分)	3. 共通基盤づくり (1) アイスブレイキング・自己紹介～お互いのことを知り合おう～ (2) 海外で学んでくる私たちが担うミッションとは？	NIED 堀川
12:00	休憩 (60分)	
13:00 (50分)	4. 海外研修の訪問国・訪問先情報の共有 (1) パラグアイの概要 (2) JICA 事業の枠組み・JICA パラグアイの重点分野 (3) 現地行程（案）・訪問での活動予定→聞きながら自分の関心事をメモ (4) 質疑応答	NIED 川合
13:50 (30分)	5. 海外研修を生かした教材化の視点の確認 (1) 学習者の学びの3本柱とねらい (2) 教材づくりのポイントの説明	NIED 伊沢
14:20 (40分)	6. 海外体験を授業につなげるための計画①/個人作業 (1) 「事前ー現地ー事後」研修のパッケージのねらいの確認 (2) 「現地で何を見て、聞いて、調べてきたいのか？」洗い出し (3) 訪問先で分類・整理→教材収集シート化	NIED 久世 堀川、伊沢
15:00	休憩 (15分)	
15:15 (95分)	7. 海外体験を授業につなげるための計画②/チーム作業 (1) 教材チーム&担当訪問先区分決め (2) 担当訪問先区分の教材収集シート10人分を分類・整理 (3) 教材のねらい「〇〇のために△△を集める」の確認 (4) 全体で発表・共有→付け足し (5) 教材収集の事前準備の必要や収集方法の工夫の検討	NIED 久世 堀川、伊沢
16:50	8. 事務連絡 (10分) (1) 海外保険加入手続き (2) その他、質疑応答	JICA 江口 NIED 川合

■ 2日目：6月30日（日）

時刻	内容	講師等
10：00 (20分)	9. 朝のアイスブレイキング	NIED 堀川
10：20 (80分)	10. 海外体験を授業につなげるための計画③／チーム作業 (1) 前日の続き作業+重点化（これだけは絶対集める！に印を付ける） (2) 各チーム作業の成果を全体で発表＆提案会 (3) 提案・リクエストを受けてチームで最終とりまとめ	NIED 久世 堀川、伊沢
11：40	お昼休憩（60分）	
12：40 (60分)	11. 子どもたちとの交流&チームでの役割の検討 (1) 子どもたちとの交流についての検討（出し物、グループ活動） (2) チームとして行う各活動の内容把握と役割分担	NIED 堀川
13：40 (30分)	12. 現地での1日の流れの確認 (1) 1日の標準的な活動や役割・留意事項の確認	NIED 堀川
14：10	休憩（15分）	
14：25 (75分)	13. 参加の準備や注意事項 (1) 出発～帰国までのフライトなどの情報 (2) パラグアイ現地研修中の留意事項（安全、健康、ルールなど） (3) 持ち物・準備事項、その他留意事項 (4) 質疑応答	NIED 川合 JICA 江口
15：40 (20分)	14. 最終調整、事務連絡 (1) 臨時ミーティングの案内 (2) その他連絡事項（たびレジ、安全対策ビデオなど）	NIED 川合 JICA 江口

<開催の様子>



▲共通基盤づくり～私たちが担うミッション～



▲チームでの役割検討



▲参加の準備や注意事項

<成果物>

■ 海外で学んでくる私たちが担っている役割

- | | |
|--------------------------|------------------|
| 1) みんなで楽しむ | 5) 12人みんな仲良くする！ |
| 2) 本物にたくさん触れる | 6) 子どもと世界をつなげる！ |
| 3) 深い学び…子どもへ・私たち自身 | 7) 衣食住を知り、伝える！ |
| 4) 多様な価値観に触れ、自己の価値観を振り返る | 8) 同僚と世界をつなげる！ |
| | 9) 自分自身の価値観を広げる！ |

■ 教材テーマとねらい

訪問先区分	該当する主な訪問先		担当チーム
A. 教育系	③パ・日人造りセンター ⑧デ・オソ小学校 ⑩ペドロ・アギレラ小学校	⑥小学校教育隊員と意見交換 ⑪デ・カアクペ中等学校	レインボー (しょーたろー、えこ、 あいこ、ヒロ、みつきー)
B. 日系社会系	⑦白沢商工株式会社 ⑭ピラポ日本人会・史料館 ⑯ピラポ日本語学校	⑬ピラポ入植慰霊祭・祝賀会 ⑮ピラポ幼稚園 ⑰日系農家ホームビジット	ラーメン (IKE、ともみ、 いずみ、めっち、一休)
C. その他 格差是正系	②ブエナ・ボルンタ協会 ⑩カテウラ音楽団 ⑱ロマ・ピンド保健ポスト	⑤SENAVE 研究所 ⑫ヤシレタダム湖隣接地開発 ⑲サンタ・ロサ小学校	レインボー (しょーたろー、えこ、 あいこ、ヒロ、みつきー)
D. 生活・文化 全体通して系	①JICA ブリーフィング ⑨アスンシオン見学教材収集 ⑲JICA 報告会・懇親会 出会ったパラグアイの人々	④Palo Santo 製品工房 ⑲ニヤンドウティ工房 見聞きする暮らし・文化 街中・お店などでの発見	ラーメン (IKE、ともみ、 いずみ、めっち、一休)

■ 作成した教材収集シート例

教材収集シート A. 教育系

レインボーチーム

● ねらい … ○○のために、△△する。 ※ カッコ内は☆印が付いた数

パラグアイの子どもの生活を知るために、1日の表を書いてもらう。[3]

日本の子どもが多文化を理解するために、パラグアイの子どもの生活を知る。(思い込みに気づく) [1]

パラグアイと日本を比較し、相違に気づくために、学校の様子を聞き、知る。

パラグアイの身近に感じるために、パラグアイの子どもの遊びを聞き、一緒に遊ぶ。

日本の子ども達が日本を見つめ直すために、現地の子どもたちに日本のイメージを聞く。

● 具体的な収集物・情報 ※「写真」は共通のため、主な方面には記載していない。

柱	カテゴリー	収集内容	主な方法
① 肯定的な出会い	学校の様子	<input type="checkbox"/> 現地の子どもの学校生活 <input type="checkbox"/> 学校の写真 (建物、授業、持ち物) <input type="checkbox"/> 給食の写真 <input type="checkbox"/> 2年生の子の写真 <input type="checkbox"/> 学校行事 <input type="checkbox"/> 教科書 (ある?全員が持っている?無償?) <input type="checkbox"/> 季節・伝統の行事	インタビュー
	遊び	<input type="checkbox"/> どんな遊びをしている? <input type="checkbox"/> 遊んでいる子どもの写真 <input type="checkbox"/> おもちゃの写真・現物 <input type="checkbox"/> 休みの日の過ごし方	ムービー 実演
	質問	<input type="checkbox"/> 子どもたちの将来の夢 <input type="checkbox"/> 今一番欲しいもの <input type="checkbox"/> 現地の子どもの日本のイメージ <input type="checkbox"/> 学校で楽しみなこと <input type="checkbox"/> 生活していて楽しいとき	アンケート (日本でも)
	教育方法	<input type="checkbox"/> ドリル練習 (くり返し) 知識獲得 <input type="checkbox"/> 外国語教育	インタビュー
	交流	<input type="checkbox"/> 日本の子どもと現地の子どもをつなげる交流 (動画・手紙)	ムービー
	保育	<input type="checkbox"/> 保育の充実 (何時～何時まで預かる?)	インタビュー
② つながりと同ー性	学校	<input type="checkbox"/> 学校の共通点と相違点 <input type="checkbox"/> 学校施設 (空欄、プール、運動場) <input type="checkbox"/> 1クラスの人数 <input type="checkbox"/> 小学校での遊び方・レクリエーション <input type="checkbox"/> 子どもにとって楽しいこと、好きな遊び (一緒にやってみる)	日本のも
	教育論	<input type="checkbox"/> 子ども理解の方法 <input type="checkbox"/> 家族、学校、勉強などの考え方 <input type="checkbox"/> 子ども達を教育する上で大切にしていること	インタビュー
	学習方法	<input type="checkbox"/> 授業の方法 <input type="checkbox"/> 探究学習 <input type="checkbox"/> 授業の内容 <input type="checkbox"/> 算数指導に力を入れているのはなぜ? (協力隊の方の聞く)	インタビュー ムービー 体験
	夢	<input type="checkbox"/> 現地の子どもの将来の夢 <input type="checkbox"/> 教員を目指す若者はいる?	アンケート
	子どもの生活	<input type="checkbox"/> パラグアイの子どもの1日	アンケート インタビュー
	教員	<input type="checkbox"/> 教員のワークライフバランス	インタビュー

● 臨時ミーティング

7月21日(日)15:30~16:30、7月28日(日)

<ねらい>

- ◇ 海外研修における安全対策を確認する。
- ◇ 訪問先および行程の最新情報を共有し、お土産・情報収集などの最終調整を行う。
- ◇ 現地交流内容の確認、相談をし、現地研修の充実を図るとともに不安を解消する。
- ◇ 気持ちよく豊かに学び合うための約束・心がけを決め、結団し、現地へ向かう。

<プログラム>

■ 7月21日(日)

時刻	内容	講師等
15:30	1. JICA 安全対策ビデオ視聴 (30分)	JICA 江口
16:00	2. 現地最新情報共有 (5分)	NIED 川合
16:05	3. お土産仕分け (20分)	NIED 堀川
16:25	4. 交流内容進捗確認・相談 (30分)	NIED 堀川
16:55	5. 事務連絡 (30分)	JICA 江口 NIED 川合

■ 7月28日(日)(ドバイ空港)

<成果物>

■ 気持ちよく豊かに学び合うための約束・心がけ

- 1) 学びをシェアする
- 2) 人とのつながりをもつ (人・行動)
- 3) 何を学びたかったのかをはっきりする (資料をしっかりと読んで一人ひとりの意識を高く)
- 4) 自分で学びをふりかえることも大切
- 5) ふりかえりの視点を持つことも大切 (最初にイメージを持ってそれと比べながら)
- 6) 日本の子どもたちに伝えたいこと (日本の子どもたちに提供できることを意識して)
- 7) 参加者同士で遠慮はしない (学びがつながるように)

<開催の様子>



▲JICA 安全対策ビデオ視聴



▲交流内容進捗確認・相談



▲出発時の記念撮影

● 事後研修

8月31日(土)10:00~18:00

<ねらい>

- ◇ 教師海外研修で学んだこと・得たことを基にした個人の授業実践プログラムを作成し、評価指標の活用、相互提案などを通してより実践的な内容に深める。

<プログラム>

時刻	内容	講師等
10:00	1. 開催挨拶 (2分)	JICA 江口
10:02	2. アイスブレイキング (13分)	NIED 堀川
10:15	3. 現地研修のふりかえり (35分) (1) 現地研修報告「2. 訪問国から学んだこと(気づいたこと、わかったこと、大切に思ったことなど)」の共有 (2) 学びの3つの柱ごとに教材化の視点出し	NIED 堀川、伊沢、久世
10:50	4-1. 授業実践プログラム作り①(ねらいの設定) (70分) (1) 各自の実践テーマの発表、共有 (2) プログラムづくりの5つのステップの再確認 (3) 実践時間・対象に応じた「ねらい」の検討 (4) ねらい・実践時間に沿ったプログラムの流れづくり	NIED 堀川、伊沢、久世
12:00	休憩 (60分)	
13:00	4-2. 授業実践プログラム作り②(プログラムの試作) (35分) (1) プログラムへのアクティビティの当てはめ、学習者への「問いかけ」の検討	NIED 堀川、伊沢、久世
13:35	5. 指標による授業実践プログラムの相互提案 (45分) (1) 6つの指標による相互提案	NIED 堀川、伊沢、久世
14:20	6. 授業実践プログラムのとりまとめ (60分) (1) プログラムの作成、個別相談 (2) 全体発表用模造紙への記入・プログラム完成	NIED 堀川、伊沢、久世
15:20	休憩 (15分)	
15:40	7. 授業実践プログラムの展覧会 (10分)	NIED 堀川、伊沢、久世、川合
15:50	8. 授業実践プログラムの発表&提案会 (45分) (1) 発表者：プレゼンテーション×5人 (5分) (2) 聞き手：よかった点/よりよくするための提案 (3分) ※対象学年ごとに2グループに分かれて実施	NIED 堀川、伊沢 NIED 久世、川合
16:35	9. 授業実践プログラム改善 (45分) (1) よかった点/提案をふまえてプログラムの改善、個別相談	NIED 堀川、伊沢、久世、川合
17:20	10. 実践に向けての私宣言! & エール (20分)	NIED 堀川
17:40	11. 実践報告フォーラム2020での報告検討 (15分)	NIED 堀川
17:55	12. 事務連絡 (5分)	JICA 江口、NIED 川合

■ 授業実践プログラムの6つの評価指標

● 開発教育・国際理解教育における「学習者の学びの3つの柱」に関する指標

- 指標① 柱1：学習者が、「訪問国に肯定的に出会う」学びがあるか。
- 指標② 柱2：学習者が、「日本と訪問国とのつながりや同一性に気づく」学びがあるか。
- 指標③ 柱3：学習者が、「共通の課題について共に考え・共に越える」学びがあるか。

● 学習者主体の参加型、収集教材の活用に関する指標

- 指標④ プログラムに流れがあり、気づきから行動へとつながるものとなっているか。
- 指標⑤ 学習者が、主体的に考え、学習者同士が学び合えるような問いかけや手法となっているか。
- 指標⑥ 現地で収集・整理した教材が効果的に活用されているか。

<成果物>

■ 授業実践プログラム例

タイトル	「いただきます!は誰に言う?」		名前	ともみ
ねらい	<ul style="list-style-type: none"> ・食におよび、日本と外国は相互依存の関係にあることに気づく。 ・日本と外国、それぞれに課題があることに気づき、その原因を考える。 ・原因に自分が関わっている事、国際協力の事例を知り、国際協力は日本(自分)の為に必要になっていることに気づく。 			
対象	小学校6年生	所要時間	8時間	
回時間	流れ			
	起	ALL MADE IN JAPANの食卓 みんなの願いは?		
	承	食糧問題には何が原因? ~日本・世界~ その原因は?		
	転	このままいくとどうなる? 世界と日本!		
	結	今、私にできることは? 一歩を踏み出す!		
回時間	流れ	問いかけ		
1	(食に対するみんなの願いは? (食、食、食) パラグアイの食卓紹介、MADE IN JAPANのものがないのはなぜ? 日本へ輸入してよせ!	写真		
2,3	日本の食卓に関する課題を知る、その原因を考える(自然、人、環境)	ストーリー・クイズ		
4,5	世界の (食、食、食、食、食)			
6,7	このまま課題が放置されるのはどうなる? 命の関わりを学ぶ。	派生図		
8	課題解決のために自分でできること、日本の国際協力の事例(食問題)を知り、自分の関わりを学ぶ。知りたことも協力の一つ。	KJ法 SENAVE、動画 白紙紙		

タイトル	みんなよくばらてみんなはいい!!		休憩	1時間
ねらい	<ul style="list-style-type: none"> ・世界について知り、つながりに気づくことができる。 ・異なる文化を考え、良き課題に気づくことができる。 ・SDGsについて知り、自分ができることを見つける。 			
対象	特別支援学級(2年2人・3年2人・4年1人・6年1人)			
起	世界の国々について知る。(位置・国旗・言語・食文化)			
承	世界の国とのつながりを感じる。(食文化・習慣)			
転	パラグアイについて知り、良き課題に気づく。			
結	SDGsについて知り、自分ができることを見つける。			
	プログラムの流れ			
1	世界の国について知る *笑顔でいて、多岐あり!!			
4h	<ul style="list-style-type: none"> ① 知っている国をあげる。→ ポストカード方式 ② 好きな国を選び、→ 重ならないように!! 一生懸命に! ③ 国旗を1つずつはしり絵で表現する。 ④ 国について調べ発表する。(位置・言語・習慣) 			
10h	<ul style="list-style-type: none"> 2 世界のつながりを感じる。 ① 食文化の参加国 → 経験体験?! ② スピリットで行って外国産のものを味わう。→ 新聞広告 ③ JICAからの写真・動画を見せる。 			
3h	<ul style="list-style-type: none"> 3 パラグアイについて知る。 ① 日本写真の写真を分ける。→ 日本側からの写真 ② マテ茶、ごまおにぎりを食べる。→ ごま油に慣れる。 			
4h	<ul style="list-style-type: none"> 4 SDGsのマテリアルを作る。 ① SDGsについて知る。→ 世界におおむね100データ! 種類 ② マテリアルを作ると、行きたい国と書く。クラスで考える。 			

<開催の様子>



▲教材化の視点出し



▲授業実践プログラムの発表



▲実践に向けての私宣言&エール

III. 現地研修の様子と受講者の学び

※ 現地研修の「研修報告書」を一部編集して掲載した。
 なお、訪問先の番号は、4 ページの現地行程表の番号と一致させている。

[7/29 (月)]

① JICA パラグアイ事務所ブリーフィング＋懇親会

JICA パラグアイ事務所の近藤次長と村上所員から、パラグアイの基本的な生活習慣や JICA の取り組みについて話をしてもらった。パラグアイは、最も離れた国の一つだが、親日の方が多い。それは、日本人移民の方や JICA の方たちが農地を開拓したり技術開発に協力したりするなど、パラグアイの経済発展に大きく貢献し、勤勉さで様々な困難を克服していったため日本や日本人をよく思ってくれているそうだ。また、この研修はたくさんの人たちが「より良い研修」となるよう、研修の直前まで話し合って計画を立ててくださったそうだ。この話を聞き、まだ出会ったこともない人たちが、自分たちのために尽力してくれているんだと分かり、感謝の気持ちとパラグアイでの学びを日本の子どもたちに還元しなければ、という使命感を覚えた。(青山将太郎)



[7/29 (月)]

② レヒオン・デ・ラ・ブエナ・ボルンタ協会 (NGO) 貧困層幼児対象の 保育施設／青年海外協力隊活動 (青少年活動)

レヒオン・デ・ラ・ブエナ・ボルンタ協会では、市民社会団体の支援を受けて寄付金で運営している施設である。男女 100 名ほどの園児が通い生活をしているが、需要が多く、入りたくても入れない子どももいるようだ。園児は明るく元気に過ごしており、交流したときも楽しそうに活動していた。ここで美術を教えている青年海外協力隊の諏澤さんは、リサイクルアートに取り組み、ペットボトルやトイレットペーパーの芯などを使って工作をしていた。まだ物が使えるのに使わなかったり、リサイクルがしっかりされてなかったりするのでも、環境教育に力を入れていた。また、衛生活動も行っており、園児たちが健康に過ごせるように手洗いや掃除のプロジェクトを行っていた。ゴミへの意識が低く、その影響で衛生的な環境が整っていないようだ。その意識をもたせるためには、教育が必要であり、それは親にももってほしい意識だと諏澤さんは話してくれた。日本でも同じことが言えるのではないかと感じた。(金尾亜生子)



[7/29 (月)]

③ パラグアイ・日本人造りセンター (体育館) ／青年海外協力隊活動 (体操競技)

「人を造る」という名前に、どのような活動がされているのか訪問前から大変興味があった。語学、ダンス、音楽、情報処理、スポーツと、様々な分野の講座が開催されていて、受講すれば資格を取ることもでき、職業訓練としての要素もあるそうだ。バイオリンを指導していた講師の方から「スズキ・メソード」という、日本人によって始められた指導法を取り入れているという話を聞いた。施設だけでなく、指導法という形でも日本



の技術が役立っていることを知り、誇らしい気持ちになった。体操指導をしている青年海外協力隊の岸本鷹斗さんからは、恵まれない環境の子どもたちに指導がしたかったという思いや、文化が違うパラグアイの子どもたちへの指導の難しさを聞いた。海外で活動する意思の強さ、行動力、熱意に大変刺激を受けた。「ここは日本が作ってくれたセンターだから、あなたたちのものでもあります。いつでもまた遊びに来てください」という所長の温かい言葉に、日本とパラグアイのつながりを感じた。(狩山智美)

[7/29 (月)]

④Palo Santo (香木) 製品工房 (パラグアイ移住日本人経営) + 夕食懇親会

立川夫妻に出会い、10人全員で驚いたのは二人の「若さ」であった。芸術の大学を出て、自分の特技を活かした仕事をするためにパラグアイへ。見知らぬ土地でビジネスをするには、「アミーゴを増やすことが大切。」と話した立川さん。立川さんの人柄も関係していると思うが、本当に様々な人と繋がって生き生きと仕事をしており、かっこよかった。職場にはパラグアイ人の方を4人、日系の方を2人雇っており、それぞれの性格をよく理解しながら共に働く姿があり、立川さんは「その土地・その人たちに合った仕事をするよう心がけている。」と話していた。また、一つの仕事に縛られず季節に合わせた働き方も魅力的であった。夫婦ともに自分の強みをよく理解しており、周りにはその強みを理解してくれる人がたくさんいる。立川夫妻の周りに人が集まるのは、二人が相手を受け入れる温かい雰囲気を持っているからだと感じた。自分がやりたいことを実現させるために行動を起こすかっこよさを、ぜひ子どもたちに伝えたい。(佐々木恵)



[7/30 (火)]

⑤国立植物・種子品質・防疫機構 (SENAVE) 研究所 / 小規模農家の輸出農作物安全性向上プロジェクト



SENAVE 研究所を訪れた際に農作物の安全性を高めることが、貧困を解決する非常に重要な国際協力事業であるということ学んだ。技術協力専門家の滝本さんの話を聞き、残留農薬が日本の基準値を上回ると輸出したゴマが受け入れてもらえず、かなりの損失になり農家が困っているという現状を知った。そして、残留農薬のごまの基準値のデータがないために一律の厳しい基準となっており、新たな基準を定めるためのデータを取る活動をしているそうだ。輸入側である日本にとっては、食の安全が保たれ、輸出側にとっては、安定した収入となり、貧困の解決に繋がる。小規模農家だけでは、設備もノウハウも無く現状を打開することは難しいので、この研究所の果たす役割は大きいと思った。パラグアイで課題解決のために活躍している滝本さんのような人たちのおかげで、あたたかい歓迎を受けることができたのだと実感した。このことも日本の児童に伝え、日本人としての誇りを育てていきたい。(柴田英子)

[7/30 (火)]

⑥青年海外協力隊 (小学校教育) 2名との意見交換

サン・エンリケ・デ・オソ小学校に派遣されている青年海外協力隊の片桐さんと第163プロフェソールアドルフオマリモンヘス小学校に派遣されている青年海外協力隊の藤城さんに JICA パラグアイ事務所にて活動の様子を伝えてもらった。写真を投影しながら、活動の様子を説明してくれたので、とても分かりやすかった。当日は、パラグアイ全土で「友情の日」ということだった。片桐さんと藤城さんの学校では、子ども同士がブプレゼントの交換をしたということだった。写真を通じて、全体に説明した後に、2つのグループに分かれて意見交換をした。基本的には、①内容を黒板に書く、②内容について説明する、③板書をノートに写させる、という流れで学習が進んでいくことが分かった。教師も子どもも授業では、ノートを書かないといけないと思っているということだった。机と椅子がくっついていて、グループ学習がやりにくいということだった。両親が送り迎えをする関係で、雨の日や寒い日などは、欠席が多いということが分かった。(長谷川義洋)



[7/30 (火)]

⑦白沢商工株式会社

白沢社長は、中学生の時に家族でパラグアイに移住されたという。今、日本で出回っているごまのほとんどが輸入品であり、パラグアイからの輸入も多くを占める。白沢社長は、パラグアイの貧困を撲滅するためにごまの栽培を小農家の方に広め、26歳の時に今の会社を設立した。異国の地で、会社を立ち上げるのは大変なことだと、容易に想像できる。白沢社長は、「あきらめない。3%でも可能性があればチャレンジする。」「障害があるのは当たり前。それが楽しみになる。」と言われていた。今の成功があるのも、そのバイタリティ溢れる性格だからなのだと思う。日本の子ども達へ伝えたいことをお聞きすると、「外から日本を見ることが大切。たくましく育てるように。」ということを言われた。白沢社長の言葉は、一つ一つに重みがあり、心に響いた。また、人と人とのつながりを大切にされる、温かい方なのだと、お話から伝わってきた。白沢社長の言葉が自分の心に響いたように、子ども達の心にも響くよう伝えたいと思った。(宮嶋いずみ)



[7/31 (水)]

⑧第15328 サン・エンリケ・デ・オソ小学校／青年海外協力隊活動 (小学校教育)



最初の歓迎セレモニーでは、現地の子どもたちが一生懸命に歌を歌ったり、訪問者である我々のたどたどしい自己紹介を興味深そうに聞いたりする姿があり、それは日本の子どもたちと変わらないように感じた。その後、この学校で活動する青年海外協力隊の片桐さんの授業を見学した。練習問題を解く場面では、机間指導に参加した。指を使ったり、片言のスペイン語で話しかけたりと、悪戦苦闘しながらも子どもたちとコミュニケーションをとることができた。言葉の壁があっても、伝えたいという思いが大切

であることを感じる瞬間になった。児童机や教科書・ノート、各教室の設備など日本に比べるとまだまだ整っていない部分が多く見られた。そんな中でも、身近なものを利用して教具をつくったり、子どもたちの能力を伸ばすためにできることを考えたりと、片桐さんが現地の先生と同じ方向を向いて活動していることが印象的だった。(村瀬泰広)

[7/31 (水)]

⑩カテウラ音楽団／カテウラ地区



学校に入ると、子どもたちが奏でる楽器の音が聞こえてきた。カテウラ地区はパラグアイ最大のゴミ集積地である。子どもたちが手に持っている楽器は、ペンキ缶や水道管、フォークやおたまなど、カテウラに集まってくるゴミから作られたものだ。ここにいる子どもたちは様々な背景を持っている。楽団の一人の青年は、入団前、家族のために3時間の睡眠時間で働いていたという。しかし、楽団に入ってから公演などによって集まるお金で支給される奨学金で大学にも通え、今は楽器を作るという夢を持っていた。訪問の最後

に「世界に一つだけの花」を受講者で歌った。その後、私たちの持っていた楽譜を見て音楽団の方々が演奏してくれ、その場にいる全員で一つの音楽を作ることができた。音楽は言葉を介さず、お互いの心を結びつけてくれた。格差是正には時間が必要だが、目の前の問題を先送りにせず少しずつ解決し、全ての子どもたちが安全に夢を持って生活できる環境を作っていきたいと強く思った。(横井美月)

[8/1 (木)]

⑪ヌエストラ・セニョラ・デ・カアクペ中等学校／青年海外協力隊活動(体育)

訪問先は生徒数およそ200名のカトリック系中等学校である。にこやかな表情の校長に出迎えられ学校訪問をはじめたが、正午近くの訪問であったため生徒は多くなかった。パラグアイの中等学校の多くは午前午後の2部制をとっており、午前と午後で生徒が入れ替わるようだ。校内のあちらこちらに陸上競技大会の受賞メダルなどが飾られており、陸上競技に力をいれていることが青年海外協力隊の小田さんによる学校概要の説明でわかった。ちなみに同校での小田さんの役割は日本式の保健体育の教授法の指導であるようだが、体育倉庫に整然と収められている用器具の様子はまさに日本の学校のそれと同じであり、授業のみでなく環境整備にいたるまで“日本式”が行き届いていることが伺えた。また、同校では地域の子どもを対象にしたスポーツ教室を実施しており、在籍生徒以外の子どもへの支援という役割も担っているため、小田さんを中心に様々な競技の指導を他の教員と行っているようだ。(湯浅郁也)



[8/1 (木)]

⑫ヤシレタダム湖隣接地域総合開発調査プロジェクト／ダム取水口

ヤシレタダムに着くと、ダムとは思えない広さの湖が広がっていた。ここでやっているプロジェクトは、ダム湖の水資源を活用した総合的な農業開発計画への調査プロジェクトだった。このプロジェクトには、膨大な時間がかかっており、計画的に進める難しさを感じた。ダムの建設では、当初から灌漑計画を見越して水門も作られていたが、その活用に至るまでには多くの時間を費やしていた。この計画が実行されることでパラグアイの経済が発展し、電力の使い方や土地の利用方法が変わってくることは良いことだと思った。しかし、それに伴って、環境の問題も共に考えていかなければならないことも学んだ。土地を開拓するというこ



とは、そこに住む生態系が崩れてしまうことも考えられる。経済と環境のバランスを考えることが必要だ。日本でも同様なことは考えられる。持続可能な開発について考えるきっかけとなり、さまざまな視点をもって物事に取り組むことの大切さを学んだ。(金尾亜生子)

[8/2 (金)]

● ⑬ピラポ入植 59 周年記念慰霊祭、祝賀会+⑭ピラポ日本人会、移住史料館、日系スーパー／ピラポ移住地

慰霊祭の追悼の言葉を聞きながら、移住の歴史に触れることができた。虫除けのために顔に石油を塗り、不眠不休で原生林を開拓する毎日、農業生産が軌道に乗るまでの苦しい資金繰り、劇的な環境の変化を乗り越えた先人の精神力に、ただただ畏敬の念を抱くばかりだった。移住史料館では、移住してからの人々の生活を知ることができた。盆踊りやすもう大会、運動会などの地域行事が盛んに行われており、日本の文化の継承に力を入れている様子が見られた。現在日本では、地域の力が弱まり、地域行事も縮小傾向にあるが、ピラポでは日本以上に日本の文化や日本人同士のつながりが大切にされているように思えた。日系スーパーは、日本の調味料や日系農家の方が作った米、手作りの豆腐、漬け物など、日本のスーパーと変わらない品揃え。雑誌も数ヶ月前のものが売られていた。パラグアイに、このようなしっかりとした日系社会が形成されていることに驚かされると同時に、移住者の方の日本人としての誇りや思いを感じた。(狩山智美)



[8/3 (土)]

● ⑮ピラポ幼稚園+⑯ピラポ日本語学校／日系社会青年海外協力隊活動 (青少年活動)

ピラポ移住地に入ると、日本語の看板がついたスーパーがあったり、日本食を扱う飲食店があったりと街の雰囲気ガラリと変わった。幼稚園では、園児たちが朝の会で日本語の歌を歌ったり、日本でも人気のある「パプリカ」のダンスをしたりと、日本語学校では、授業のあいさつがあったり、運動会などの行事があったりと、今の日本の学校と似ているところが多かった。ここには、「日本の伝統を残したい。」というピラポの方たちの思いが感じられた。教員不足の中、「人が変わっても子どもたちに同じ教育を受けさせられるように。」と青年



海外協力隊の澤田さんのもと、指導計画を立てることや、パラグアイ全土で日本語のスピーチコンテストを開催し、子どもたちの日本語技術を高めることなど様々な工夫がされていた。日本語学校の子どもたちは、よく日本について知っており、私たちの授業を、目を輝かせて受けていた。私が「またね。」と言うと一人の男の子が「先生、今度はぼくが日本に行くよ。」と嬉しそうに答えていた。彼らが日本に来てがっかりしないよう、日本を誇らしく思える人を増やしていきたいと思った。(佐々木恵)

[8/3 (土)]

● ⑰日系農家ホームビジット

日系農家を訪れるにあたり、「幸せ」や「豊かさ」という私自身の価値観が揺さぶられた。穏やかな時間が流れていた。見渡す限り一面に広がる小麦や菜花の畑に驚いた。ご自宅を訪れると、庭には多種多様な果物や野菜がなり、にわとりもいて日本では想像もつかない広さであった。そこでのびのびと遊びまわっている子ど

もたちを見て、幸せの原点を見たような気持ちになった。自分の担任している児童は、ゲームや動画鑑賞、夜遅くまでスマートフォンで電話をしている。早くから大人と似た環境に置かれ、本来の子どもらしさが失われているように感じた。電子機器でいつでも友達と簡単に話すことができるようになり、人と簡単に繋がることのできるようになった社会では、実際に人と会って話すなど直接的な体験をする機会をより大切にしていかないと本来の人との関わりが薄れてしまうと学んだ。身のまわりの自然を使って自分たちで遊び方を考える子どもたちの楽しそうな笑顔が忘れられない。(柴田英子)



[8/4 (日)]

● ⑱ ビジャリカ市内見学・教材収集 (まち歩き、屋台・スーパー)



ビジャリカ市内見学において印象的であったのは、市役所やバスターミナル、小規模だがサッカースタジアムまでもあるにもかかわらず、どこかゆったりとした時間が流れる場所であることだ。それは訪問したのがちょうど日曜(安息日)であったからかもしれない。このビジャリカだが、市場でテレレに使う薬草を売る屋台やスーパーマーケットもあちらこちらにあり、小規模ながら都市としての機能を十分に備えている印象を受けた。スーパーマーケットで教材収集を試みたが、実際に売られているものの多くが中国やブラジルからの輸入品のようなだった。街中では荷物を運ぶ小さな馬車がちらほらみられ、ここでも日本における街のイメージとは異なるのどかな風景が広がっていた。また、昼食で訪れたレストランでは、ドイツ系の観光客らしき団体と遭遇した。ここビジャリカはドイツの開発がはいつているとのことだが、様々な国からの開発援助を受けるパラグアイを垣間見る事のできた市内見学であった。(湯浅郁也)

[8/5 (月)]

● ⑲ ロマ・ピンド保健ポスト／青年海外協力隊活動 (看護師)

ロマ・ピンド保健ポストは、日雇い労働者が多い周辺地域の約2,500人にとって簡単に通えるポスト(病院)をつくるという目的で約10年前に建設された。ポスト内は青年海外協力隊として活動する宮原さんがつくったかわいい掲示物やたくさんの資料が貼られており、あたたかい雰囲気を感じられた。また、電子カルテが導入され、乳幼児の栄養を補うミルクが備蓄されるなど、医療環境が向上しつつある。一方で、治療や診察に必要な薬や機材は十分とはいえず、患者に薬を渡すことができないこともあると聞き、途上国における医療の現状を知ることができた。宮原さんが行う予防医療の啓発活動の一環としての学校での栄養指導の授業や、患者の家庭を訪問した。小学校での栄養指導では、児童が1日の食事でパスタやマンジョオカといった炭水化物を多く摂取し、野菜をほとんど食べていないことを知り、驚いた。家庭訪問先では、宮原さんが患者さんと楽しそうに話をしており、地域ととけこんで活動していることが伝わってきた。(村瀬泰広)



[8/5 (月)]

● ⑳ プロフェソル・ペドロ・アギレラ第47小学校／青年海外協力隊活動 (小学校教育)

プロフェッソル・ペドロ・アギレラ第 47 小学校では、青年海外協力隊の比良友美さんに現地での活動の様子を聞いた後に、4年生と6年生の2クラスに分かれて授業見学・交流を行った。比良さんは、主に算数科の指導のサポートをしていて、日本で使用している指導書の代わりとなる MaPara と呼ばれる指導書の活用・作成、改定を行っていた。この小学校にとっては、5人目の青年海外協力隊ということもあり、算数の学習の進め方は、非常に日本のやり方に近いものがあった。算数科の学習を行う上で MaPara がとても効果的だと感じた。4年生のクラスでは、始めに割り算の復習を1人ずつ行い、次に3人1組のグループとなって、割り算の問題を考え、考え方をグループの代表が発表していた。授業の途中で、ミルクタイムといって、クラスの子どもにミルクを支給する時間があった。売店に行き、お菓子を買う子どもたちもいた。売店には、バナナやりんごといった果物が安く売っていたが子どもたちには、人気がないらしい。日本にはない楽しいひと時だった。
(長谷川義洋)



[8/6 (火)]

⑳ニヤンドゥティ (伝統工芸) 見学/作家のホームビジット



ニヤンドゥティとは、パラグアイの先住民族の言葉で「蜘蛛の巣」を意味している。カラフルな糸を手で編んで刺繍をしていく。研修では、クリスティーナさん宅にある、地域の方が作られたニヤンドゥティが集められた工房にお邪魔した。クリスティーナさんのお母さんは現在 80 歳で、細い糸でニヤンドゥティを作る唯一の方だという。ニヤンドゥティの作り方は、パラグアイの人達に受け継がれているが、細い糸で作るのは難しく、時間もかかるため、後継者がいないという。クリスティーナさんのお母さんが作

るところを見せてくれたが、細い糸に細い糸を掛けながら縫い進められていた。とても細かい作業だった。パラグアイの学校訪問では、中学生がニヤンドゥティを編んでいる様子を見た。細い糸ではないが、伝統工芸が大切にされ、受け継がれていることを知った。日本の伝統工芸も、担い手がいないとよく聞く。自分ができることは何かと考えた。身近なところでは、工芸ではないが、折り紙で鶴を折ったり、日本の昔の遊びをしたりして子ども達に伝えていくことが、日本の文化を伝え、守るということではできないか、と思った。
(宮嶋いずみ)

[8/6 (火)]

㉓カテウラ地区見学+サンタ・ロサ・デ・リマ小学校/JuvenSur (現地 NGO) & ミタイ・ミタクニヤ子ども基金

「今の現状を見て、胸に受け止めてほしい。」サンタ・ロサ・デ・リマ小学校の校長先生のこの言葉とカテウラの景色が今も心に残っている。パラグアイ中のごみが運ばれてくるカテウラ地区には、遠くから見てもわかる大きなごみ山がある。埋立地で暮らす人たちの家は、屋根が鉄でできており、「昼は暑くて夜は寒い。ここで暮らす人たちは心が休まるときがないため、日中だけでも休もうと努めている。」とアテンド案内してくれた NIHON GAKKO の先生が言っていた。この地域のために自分に何ができるのか、と考えれば考えるほど、僕は無力感を覚えた。ここで暮らす子どもたちが通うサンタ・ロサ・デ・リマ小学校は、4月に 1 m50 cm



程まで浸水したため今は休学中であった。公立の学校でありながら、国の支援を受けておらず、外部やNGOなどの組織から支援を受けているようだ。校長先生は、「劣悪な環境だからこそ、子どもたちに優しく平等に愛をもって接することにより、笑顔を引き出していきたい。」と強く語っていた。(青山将太郎)

[8/6 (火)]

● ⑭ JICA パラグアイ事務所報告会＋JICA 事務所関係者・専門家・JICA 海外協力隊との懇親会／アルパ・ロガ



JICA パラグアイ事務所にて報告会を行った。この研修において自分の価値観に変化を与えたものや、研修を今後どのように活用するのかについて10人の受講者それぞれの思いを述べた。パラグアイ事務所の米崎所長は「国際社会では、国それぞれが持っている強みと弱みの相互補完が大切だ」と話した。例えば、日系3世の人は日本人とパラグアイ人の両方の良いアイデンティティを持った人材であり、国際的な人材として活躍するヒントになるのではないかとのことだ。世界にあるたくさんの国々が協力し合え

る未来を創る一歩として、私は教育によって子どもたちに国際協力や多文化共生の種を蒔いていきたいと改めて感じた。懇親会ではJICA パラグアイ事務所の方々をはじめ、SENAVEの専門家の方々、青年海外協力隊の方々と共にアサードなどのパラグアイ料理を食べながら有意義な時間を過ごした。パラグアイの地で得た経験と新しいつながりに感謝し、今後は日本の児童、生徒たちと時間をかけて共有していきたい。(横井美月)

[7/31 (水) ・ 8/6 (火) ・ 8/7 (水)]

● アスンシオン市内見学・教材収集 (⑨文房具店・本屋・スーパー、⑳マーケット、㉕民族衣装店・Tシャツ店・民芸品店)



アスンシオン市内にあるショッピングモールの文房具店・本屋で面白い物をした。文具店では、表と裏でデザインが異なるパラグアイの国旗、世界地図、パラグアイ全土の地図、ぬりえ、現地で使用されているワークなどをそれぞれが購入した。日本が中心に描かれていない世界地図が新鮮だった。本屋では、英語で訳された日本の漫画、絵本などを購入した。スーパーマーケットでは、お菓子を中心に土産・教材を買った。また、パラグアイ人が好むテレレやマテの元素となる茶葉を購入した。スーパーマーケット内では、写真撮影がNGだったため、もの珍しい商品や物の値段、気付いたことをマナビノートにメモした。8月6日のマルシェでは、チアシードやナッツ類を購入し、マルシェ内で昼食をとった。ホットドックとやきとりのような串物を各自で購入して食べた。8月7日の民芸衣装店では、パラグアイの民族衣装といわれるアオポイを各自それぞれ購入した。デザインも多種多様だったので、各自お気に入りの服を楽しそうに探していた。(長谷川義洋)

IV. 帰国後の報告

● 現地研修報告書

※現地研修の「研修報告書」を一部編集して掲載した。

1. 現地研修に対する各自の目的とその達成度

● 青山 将太郎

僕は、「慣れ親しんだ児童たちから離れ、意識の高い同年代の仲間たちと共に生活し活動をする中で、児童との接し方や教材の開発をもう一度学び直したい」と考え、この研修を希望した。現地研修を共にした仲間やパラグアイで活躍する日本人・日系人の方、そして現地で出会った子どもたちや先生たちとの出会いから、教育に対し様々な考えを感じ、学ぶことができた。多種多様な立場や考えで教育を捉えようとする中で、改めて「人とのつながり」の大切さに気付くことができたようにも思える。授業実践では、パラグアイの小学校の先生とのつながりを通して、パラグアイと日本の子どもたちをつなぎ、世界とのつながりを実感できるようにしていきたい。また、僕が現地で見たと感じたことを子どもたちや同僚、地域の方々に伝えられるようにしていきたい。この研修での出会いや学びは、僕にとって一生忘れることができない財産となった。

● 金尾 亜生子

現地の様子、状況を知りたい、そこに住む人々の生の声を聞きたい、生活を感じたい。これがこの研修に参加した私の一番の目的だった。国際理解教育に携わる機会が多かった私は、今まで子どもたちと共に世界の現状について考えてきた。しかし、現場を見たことのない私には、限界も感じていた。今回この研修に参加したことで、現地で体験することでしか得られない学び、自分の価値観の変化を感じることができた。今回の研修で、パラグアイと日本のつながりやパラグアイで活躍する日本人、価値観の違い、豊かさとは何かなど、多くの学びを得た。日本人移住地を訪れることで、日本人として大切にすべきことは何かを考えさせられた。パラグアイに行くことで、日本を外から見ることができ、日本のよさや課題についても考えることができた。この学びを、これから授業を通して子どもたちに伝えていきたい。また、人と人とのつながりの大切さも子どもたちに伝えていきたい。

● 狩山 智美

昨年度、子どもから出された「なぜ不景気な日本が税金を使って国際協力をするのか」という質問。知識として「同じ地球に生きるものとして支え合う」などと言いつつも、教師である自分自身に納得のいく答えがない事に気付かされた。そこで、実際に開発途上国を訪問し、その現状や国際協力の現場、日本との関係について見聞し、自分自身の理解や考えを深めたいと考え、本研修に参加した。研修を通して、私は、国際協力の現

場で活躍する方たちの生の声を聞くことができた。また、パラグアイの人、文化、歴史、社会に触れ、日本という国と世界を改めて見つめ直すことができた。さらに、これまでの自分の考えが、無意識のうちに日本を基準にした視野の狭いものであったことにも気付かされた。「世界の中に日本がある」という考えが、自分の中で実感を伴って確立されたことは大きな成果である。この考えを基に、授業実践に取り組み、人類共通の課題について、子どもと共に考えていきたい。

● 佐々木 恵

私の現地研修での目的は、本物を見て自分が感じ考えたことを、職場の仲間や子どもたちに伝え、還元していくことであった。今までの授業の中で、様々な日本の人が世界で活躍していることや日本から世界へ色々なものを輸出したり、世界各国からたくさんのもを輸入したりしていることなど、日本と世界とのつながりについて取り上げてきた。しかし子どもたちに上手く伝えられず、どこか他人事のような内容で終わってしまうことが多かった。今回の現地研修では、実際に青年海外協力隊の方などの話を聞いたり、活動する様子を見たりして、具体的にどのように活躍しているのかだけではなく、どんな思いで活動しているのか、また日本人の活動に対して現地の人はどんな気持ちでいるのかを知ることができた。教科書や本などから得ることは難しい「生」の声を知ることができたのは大きな収穫であった。職場には教材共有や授業提案を行い、子どもたちには学年に合う内容を精選し、授業を行っていきたい。

● 柴田 英子

この研修に参加した目的は、日本に生まれたことに感謝し誇りを持ち、自国のみならず、他国のために何かができるかを考え、実践する児童を育てるための手がかりを得ることである。その達成度は、100%以上であり日本では決して手に入れることができない期待以上のものを得ることができた。貧困を解決しようと活躍する日本人や現地の人の子どもの笑顔を守りたいというあつい思い、自分の強みを最大限に活かして諦めずに取り組む姿は、日本の児童の心を揺さぶることであろう。この研修に参加したことで、日本の児童にパラグアイで出会った人の生の声を届けることができる。また、今までの青年海外協力隊の活躍や、JICAの長年に渡る誠実な取り組みで得た信頼、先代の努力や苦勞の賜物があるからこそ、見ず知らずの私たちでも踊りや手紙など盛大に歓迎してもらえた。私も同じ日本人としてその信頼を決して崩してはならないという強い思いにかられると同時に、パラグアイの人たちから日本人のよさを学ぶことができた。このように自分自身が学んだことを手がかりとして授業実践に取り組んでいきたい。

● 長谷川 義洋

世界は広い。私たちが住む地球には、幾つもの国があり、多種多様な人々が生活している。これからの未来、多様な価値観を認め合い、人と人がつながり、国と国がつながっていくことが必要不可欠である。日本で生まれ、日本で暮らす子どもたちは、家があること、学校に行くこと、おいしい食べ物を食べることなど、今生活しているこの状況が当たり前だと思っている。海を渡れば、環境・文化・考え方・生き方が異なる様々な人がいることを伝えたい。そして、自分を見つめ、他者を見つめ、誰もが楽しく生活できる方法を考えていきたい。自ら地球の反対側に位置するパラグアイに行き、青年海外協力隊の方が活躍する現地の学校やピラポ移住地、カテウラ地区を訪れたことで、パラグアイで暮らす人々の様子や日本とのつながりを具体的に知ることができた。実際にパラグアイで2週間過ごしたからこそ、様々な視点からパラグアイの良さや日本の良さに気付くことができ、大変有意義な研修となった。

● 宮嶋 いずみ

現地海外研修に参加した目的は、海外に行くことにより、自分の視野を広げ、価値観を見直すこと。そして、その経験を生かして国際理解の授業を行い、児童に世界に興味をもつきっかけをつくりたいと考えたからだ。研修での10日間は、毎日学び、考えることが多く、とても充実した毎日だった。研修で学んだことは、世界には、多くの日本人が活躍しているということ。そして、世界と日本はつながり、共生しているということ。世界と日本はつながっていることを児童は知っていると思うが、目で見て学び、感じたからこそ伝えることができることが多くある。共に考えたいことが、たくさんある。また、研修で話を伺った方々は、とてもパワフルで、やりたいことのために邁進し、生き生きしていた。やりたいことを見付け、ワクワクしながら生きることができる子どもを教育でどう育てていけるか、考えさせられた。この研修を通して、自分自身の教育観について見直すことができた。研修で得たこと、感じたことを形にし、子ども達に伝えていきたい。

● 村瀬 泰広

日本の食料自給率は約40%と、他の国の力なしに今の日本の暮らしは成り立たない。それは食に関するだけでなく、高齢化や人口減少が進むなかで、さまざまな分野で外国人が労働力となり、日本を支えている方が増えてきている点でもいえる。そんな外国とのかかわりを避けては通れない時代だからこそ、自分とは異なる見方、考え方、価値観に触れたいと思った。パラグアイでは、たくさんの気づきや発見がをすることができた。そして、現地で活動されている技術協力プロジェクトの専門家の滝本さんの「外国に来るといことは、自分がマイノリティーになる。その立場になって気付くこともある。日本（自分）が標準ではない。」という言葉は心に残るとともに、国際理解教育を進める上で自分にとって大切にしたい言葉となった。また、たくさんの魅力的な人に出会えたことは、とてもよい刺激となった。今後、この研修を通して得たものを目の前の子どもたちに還元すべく国際理解教育を進めていきたい。

● 湯浅 郁也

本研修において自身が持つ目的は、生徒と共に多文化共生について考えることのできる教材の開発である。この目的を達成するにあたり、現地で収集した資料をもとにした“問い”からはじまる授業実践を行う。具体的には、多文化共生を題材とする非定型の“問い”に対して、生徒が他者と異なる考えや共通する考えに触れることをねらいとする。本授業実践での“問い”に対する答えはひとつではなく、それゆえに生徒は互いの多様な考えに触れることとなる。そして、生徒は両国が共通して持つ諸問題について協同的に考えることで多文化共生についての理解を深めていく。題材は現地で収集した人々の暮らしに関する視覚資料に加えて、日系の人々の活躍についても扱う。本研修の経験を活かした授業実践を通して、生徒が互いに持つ多様な考えに触れ、内発的な問題意識を喚起するきっかけとなる授業実践の検討は、国際理解教育の推進に貢献できると考える。

● 横井 美月

日本や世界が抱えている問題を「自分のこと」として自分自身が捉えられるようになること、そして生徒たちもそう捉えられる働きかけができるようになることが私の目標である。テレビやインターネットから様々な情報が手に入るが、それが自分も関わっている問題だと考えているとは私自身言い難い。しかし、人は社会に所属して、その社会は多くの社会と関わっている。例えば、国際社会との関係が途絶えてしまったら、資源や食べ物を他国に頼っている私たちの生活は困難なものになるだろう。では、そうならないためにはどんな社会が良いだろうか。研修では、多角的にパラグアイを知ることができ、お互いに向き合うべき課題や日本が学ぶべき視点に気付くことができた。生徒にとって、知っている人が見た世界は身近なものとなる。世界の今を、日本の今を、じっくりと生徒たちと共有し、「自分たちのこと」として考えたい。また、パラグアイで意志を持って活躍している方々と生徒たちを繋ぎ、自分のキャリアとも向き合えるような授業実践も行いたい。

2. 柱1「訪問国に肯定的に出会う」観点から学んだこと



● 青山 将太郎

「肯定的に出会うことが大切だ」ということは、事前研修や開発教育指導者研修でもずっと言われ続けてきた。だから当然

できると思っていたが、これがなかなか初めは難しかった。未知の食べ物や日本にはない風習・文化と出会うと躊躇してしまう自分がいた。しかし、2週間の滞在を経て、人や自然とのつながりを大切にすパラグアイの生活がとても魅力的に感じるようになった。家族や地域の方と笑顔で交流し、テレレを飲みながら談笑する。世の中でいちばん大切なものは友達だと考える。自然は雄大で、さらにパラグアイは時間がゆったりと流れているようにも感じた。子どもも大人もみんなのびのびとしている。それらから、日本には無い豊かさをパラグアイで感じることができた。これらの文化がパラグアイ人の温かさにつながっているのではないかと思う。身をもって肯定的に出会うことの難しさと楽しさを知った研修となった。

● 金尾 亜生子

パラグアイの人は私たちに対して、いつも笑顔で迎え入れてくれた。それが、異国の地で慣れない私にとっては安心感につながった。パラグアイの人の穏やかさ、温かさ、愛を大切にしたい人柄に癒やされ、大切にすべきものは何かということを考えさせられた。人とのつながりを大切にすること、愛をもって接することをパラグアイの人から教わった。また、訪問した諸学校では、教育制度の違いを目の当たりにした。日本の教育のよさも再確認できた。だからといって日本の教育そのものをパラグアイの学校に導入するのは違う。青年海外協力隊の方々も相手の立場に立ち、パラグアイの人たちが自立して教育を行うにはどうしたらいいかという立場で活動されていたのが印象的だった。その土地にあった方法を考えることの重要性を知った。この研修では、多くの人との出会いがあった。この出会いに感謝するとともに、人と人とのつながりを大切にしていきたいと感じた。

● 狩山 智美

パラグアイと日本では時間の捉え方や仕事に対する考え方が違った。「パラグアイ時間」という言葉があるように、パラグアイではとにかく時間が穏やかに流れていたように思う。訪問した学校では、どこも時計がずれたり止まったりしていたが、おそらく必要ないのだろう。それでも終わりの時間はきっちり守り、先生たちも残業は一切しない。仕事よりも家族との時間を大事にする。ふと、自分の仕事での時間の使い方を振り返ってみた。丁寧さとスピードを追求する毎日で、いかに無駄なく仕事をこなすかを考えている。完成度を上げるためには残業もする。その働き方にやりがいも感じるが、子どもとゆっくり語り合ったり、遊んだりする時間はほとんどもっていない。パラグアイで暮らす人たちが、人との関わりや人と過ごす時間を大切に、温かい言葉を掛け合う様子を見て、豊かな人間関係を築くには穏やかなゆとりある時間も必要なのではないかと感じた。

● 佐々木 恵

どの訪問先でも、「来てくれて、ありがとう！」と盛大な歓迎を受け、とても嬉しかったことが一番印象に残っている。中でも、「オラ！」という挨拶は魔法の言葉であった。パラグアイの人たちは、初めて会った瞬間にとっても眩しい笑顔で「オラ！」と声をかけてくれ、私も自然と笑顔になり心が温かくなった。初日はなかなか自分から「オラ！」と声をかけるこ

とができなかったが、段々と自分から言いたくなり声をかけられるようになった。すると挨拶だけではなく、自分のことを話してくれたり、得意なものを見せてくれたりと言葉が通じなくても、なんとか私と意思疎通をしようと努力してくれる人が増えた。私が肯定的に出会うというより、パラグアイの人たちが私に肯定的に出会ってくれたように感じ嬉しかった。「相手を知りたい。」という気持ちを行動として表すことが肯定的に出会うということなんだと改めて感じ、これからは私も相手を知りたいという気持ちを大切に、子どもたちにもこの大切さを共有していきたい。

● 柴田 英子

肯定的に出会うことの大切さに気づかされた。開発途上国に行く前は、偏見は持たないようにしようとしても、心の片隅に教育や生活において日本の体制の方がよいのではないかという気持ちがあった。しかし、この研修を通してどちらの国の方がよいという考え方が、それぞれの国にそれぞれの良さがあるのだという考え方に変わった。そして、物事を考えるときに自分の中でどちらがより優れているか、優劣をつけるくせがあることに気づかされた。どちらの方が良いかではなく、それぞれのどこが良いかという考え方が重要であると学んだ。それぞれの国の違いを見つけ、肯定的に捉えることで新たな道が開くことができるのだと実感した。今回、パラグアイと日本の小学校の違いの1つに、「日本は評価される機会が多いので自分ではできないと自覚する機会が多く、自己肯定感が低い」という話を聞いた。日本の児童の自己肯定感を上げるために、評価した後のフォローがいかに大切かを学んだ。

● 長谷川 義洋

正直、パラグアイという国の位置さえ知らないという恥ずかしい状況からのスタートだった。そこからパラグアイの概要（位置・国旗・人口・言語・国土・食生活）を知った。ピラボ移住地を訪れ、日系1世の人たちから話を聞いた。59年前に日本からパラグアイに移住して、原生林を切り倒し、家を作り、学校を作り、今の生活を築きあげたとのことだった。ピラボを訪れ、建物を目の当たりにしてもその過程が信じられなかったと同時に、日本人を心から誇りに思った。パラグアイのカテウラ地区には大きなごみ集積場がある。ごみ集積場の近くで生活する人々がいる。少し滞りただけでも気持ちが悪くなるような腐敗臭が漂っているが、そこに多くの人々が暮らしている。日本と違い、目に見えて貧富の差を感じさせられた瞬間だ。研修中は、「肯定的に出会う」ということを強く意識していたのだが、唯一心がモヤモヤとした。自分には、一体何ができるのだろうか。草の根レベルでもいいから、何か行動していくことが大切だなと思った。

● 宮嶋 いずみ

パラグアイでは、日本と違うことが様々にあった。そのどれもが、自分にとって新鮮な発見であったし、日本の標準が当たり前でないことを再認識させてくれた。特に印象的だったことは、学校の教材や施設にあるものの多くがリサイクルしたもので作られているということ。何でもお金で買うということではなく、身近な物を利用することにパラグアイのよさを感じた。自分にはリサイクルしたもので教材を作るというアイデアは

乏しかった。日本でも、身の回りにあるものをもっと有効活用しようと思った。そして、子ども達にパラグアイでは、学校の教材がリサイクルでできていること、物を大切に使うことについて伝えたいと思った。パラグアイに行くことで、パラグアイのよさをたくさん発見できたし、日本の良さも改めて知ることができた。外国に行かなければ、そのような発見はできない。自分の価値観を改めて考えさせてくれたパラグアイ、そして、この研修には感謝の思いでいっぱいだ。

● 村瀬 泰広

パラグアイと聞いてイメージしていたのは、日本よりも開発が遅れている、ラテン系で社交的な人が多いといったことだった。しかし、実際にパラグアイを訪れてパラグアイの人たちは、ラテン系の陽気さをあまり感じず、むしろ控えめな印象を受け、そして人として内面的な豊かさがあり、家族や仲間を大切にしているようだった。いろいろな場所でパラグアイのよさを聞くと、優しさや人とのつながりといった答えが返ってきて、パラグアイの人々もそうだったことを誇りにしているように感じた。モノが豊富にあり、便利であることを無意識に重要視していた自分には新鮮な価値観だった。研修を通して、いろいろなものに肯定的に出会うということ大切にしていたことで、パラグアイという国のよさをたくさん感じ、体験することができたように思う。今回の研修を通して、世界にはさまざまな考え方や価値観があり、それらに肯定的に出会うことの大切さを学ぶことができた。

● 湯浅 郁也

本研修を通して、訪問国との肯定的な出会いは、自国との共通点の模索であることを学んだ。また、文化的な相違点が自身の持つ価値観に変化を与え、新たな価値観となることで自身が肯定的な捉えができることを経験した。具体的には、2週間の滞在において「暮らしにおける豊かさ」について考える機会が多くあった。とりわけ印象的であったのが、現地実施の質問紙調査：質問項目「あなたの1日の過ごし方を教えてください」の回答において「テレレの時間」（お茶を嗜む時間）を訪問国の人々が毎日の暮らしに取り入れていることである。この“お茶の時間”は、人々の生活を豊かにするひと時であり、同様の風習は日本においてもみられる。しかし、現地で実際にテレレを嗜む人の周りには家族や友人などがいる場合が多い。つまり、お茶とともに会話を楽しんでいるのである。このように現地での人々の暮らしぶりは、生活を“豊か”にする要因となる価値観についての検討とともに、他国の文化との肯定的な出会いの一例であると考えられる。

● 横井 美月

現地の方々へ一日の生活についてアンケートをしたところ、「テレレ」という時間があった。テレレとは冷たいマテ茶のことだが、パラグアイでは周りの人とお茶の回し飲みをする文化がある。要するに、テレレの時間とは、家族や友人と集い、ゆっくりと話しながらかお茶を楽しむ「団欒の時間」ということだ。家族との時間を大切にしているパラグアイの方々へ、初めて会う私たちのことも、家族や友人のように接してくれ、肯定的に受け入れてくれた。まさに団欒の時間のような温かい雰囲気の中、仕事や生活のことを話してくれ、私たちも様々なことを肯

定的に受け取ることができたと感じる。パラグアイの方々との時間を思い出しながら、日本での生活を振り返ってみた。家族や友人とゆっくり過ごす時間を持っているのだろうか。初めて出会う人やものを温かく受け入れているのだろうか。私たちに肯定的に出会ってくれたパラグアイの方々から、本当に大切にすべきものを改めて教えてもらった。

3. 柱2「日本と訪問国とのつながりや同一性を理解する」観点から学んだこと



● 青山 将太郎

本研修でたくさんの学校に訪問させてもらい、多くの子どもたちと接することができた。サン・エリンケ・デ・オソ小学校の歓迎セレモニーで僕たちを見る子ども達の緊張と喜びに溢れた顔。算数の引き算の方法が納得できた時のハッとした顔。ピラボ日本語学校で、大縄跳びが跳べた時の嬉しそうな顔。日本でもパラグアイでも、学校での子ども達の表情は変わらないと感じた。パラグアイのように、子どもたちが学校を生き生きと楽しむためにも教師の働きが大事になると考える。子どもたちの「知りたい・やってみたい」という知的好奇心を刺激し、学ぶ楽しさを見出すことができるような発問の工夫・教材の開発。1人1人の細かな表情の変化を察知し、傍に寄り添い、支える支援。パラグアイ研修を経て、未来を担う子どもたちを預かる責任感とやりがいを再確認することができた。目の前の子どもたちを幸せにできるよう、真摯に子どもたちに接していきたい。

● 金尾 亜生子

ピラボ移住地を訪問したことで、日本から遠く離れたパラグアイという土地に日本人が移住したことを知った。そこでは、パラグアイのことを大切につつ、日本人としての誇りや礼儀・マナーも大切にしていることを学んだ。二世、三世の人たちにも日本の言葉や文化を継承していきたいという思いが伝わってきた。今日本に住んでいる日本人は日本人のよさをどれくらい自覚しているだろうか。日本を外から見ることで、私自身改めて日本人として大切にしていけることは何かを考えさせられた。また、パラグアイで活躍する日本人との出会いを通して、パラグアイと日本のつながりを感じ、どの人も両国にとってよいことは何かを考えて活動している姿が印象的だった。学校訪問では、多くの先生方と話す機会を与えてもらったが、愛をもって子どもたちに接すること、社会に出て活躍する子どもになって欲しいという願いなど、子

もに対する思いには共通するものを感じた。

● 狩山 智美

パラグアイにいながら、日本人の勤勉さ、日本の技術の高さを感じることが多かった。パラグアイにおける日本人の経済的影響力は高い。日本からの移住者が過酷な環境下で原生林を開拓し、豊かな穀倉地帯を拓いたという実績から、「日本人は真面目で勤勉である」と大きな信用を得ている。また、移住者が始めた大豆栽培やゴマ栽培が、今のパラグアイの農業を支え、それまで野菜を摂取しなかったパラグアイ人の食生活の改善にも貢献している。日本人のアイデンティティや実績が、パラグアイという場所で時間を経ても存在していること、パラグアイ社会に根付き、影響を与えているということに、日本とのつながりを感じた。ただ、国際協力において日本は「与えている」という意識をもちがちであるが、日本も他国に依存しているということは忘れてはならないし、支援することで日本の評価を上げているという点も子どもにもきちんと伝えていきたいと思う。

● 佐々木 恵

パラグアイを始めとする、様々な国で栽培される食物に日本の食卓が大きく助けられているということについて改めて考えさせられた。一方的にパラグアイに日本が頼っているのではなく、日本は農業技術を提供したり、共にゴマの研究を行ったりして、お互いに助け合っていることを知った。得意なこと・不得意なことを出し合い助け合う姿は、学級の中と同じようにも感じた。教育については、日本の規律が評価され、日本を目指したいと思われていることに誇りを感じた。しかし、今までのパラグアイで培われてきた教育習慣を変えることは簡単なことではない。これは、日本の教育でも同じことが言える。変えるという行動には、大きな労力と時間が必要である。それでも「変えたい」と思い行動する背景には、先生たちの「子どもたちに、よりよい教育を」という大きな気持ちがあった。私自身、日々の業務に追われることが多く、今までの授業のやり方を見直す時間がなかなか取れないこともある。今回の研修を受け、もう一度「子どもたちのために」という原点に戻って授業をしていきたいと思った。

● 柴田 英子

パラグアイと日本のつながりを強く感じたのは、日本の低い食料自給率とパラグアイの高い自給率を知り、互いに支えあっていることを学んだときだ。日本が世界とのつながりが無くなってしまったら、今の食の豊かさを保つことはできない。そして、SENAVE 研究所に派遣されている専門家の滝本さんや白沢商工株式会社の白沢社長からの話を聞き、その取り組みがパラグアイのごまの輸出を通して貧困の解決につながっていると学んだ。そして、白沢社長の「難しいと思うから挑戦する、3%の可能性があれば十分だ」というチャレンジ精神や粘り強く取り組む姿勢は、誰にとっても手本となると思った。また、ピラポ日本語学校では、児童の日本語力に驚いた。日系2世、3世へと時が流れても日本語をはじめとする日本文化が受け継がれているのは、現地の先生方の活躍のおかげである。初めて訪れた土地で日本文化を見ることができたのは、非常に嬉しく思うと同時に、核家族化が進む日本でも同じように日本文化の継

承には努力が必要である。その上で他国の文化に肯定的に出会えるよう児童に働きかけていきたい。

● 長谷川 義洋

日本とパラグアイ。飛行機を乗り継いで、片道2日。こんなに遠いのに、こんなに心と心の距離が近い国は、あるのだろうか。パラグアイに魅力を感じる部分の1つだ。青年海外協力隊の片桐さんのサン・エンリケ・デ・オソ小学校において熱烈的な歓迎を受けた。日本人というだけで、パラグアイの人々は、心を開いてくれるような気がした。パラグアイの子どもたちは、基本的にシャイな子が多い。初めての日本人に対して照れながらも握手を求めに来る子どもたちがいた。日本の子どもと似ている部分がたくさんあった。白沢商工株式会社を訪ねて、ゴマ生産工場を見学した。小規模農業に適しているゴマの栽培。そこに注目してゴマの生産に尽力する白沢社長と話をした。ゴマの栽培は、貧困対策の面でも欠かせないものとなっている。ゴマの安全性を保持するために、技術協力をしている SENAVE 研究所に派遣されている専門家の滝本さんは、日本とパラグアイを密接につないでいる。日本で売られているゴマに対してのイメージが180度変わった。

● 宮嶋 いずみ

パラグアイへ行って感じたことは、人の温かさである。どの訪問先へ行っても、パラグアイの人は、温かく迎え入れてくれ、惜しみなく訪問先のことについて教えてくれたり、施設を見せてくれたりした。日本でも、お客様が来たら、温かく迎え入れ、おもてなしをする。習慣や文化が違って、もっている感情は同じだから、言葉が違ったとしても気持ちを想像することができるし、通じ合うことができる。そんなところに、人と人との同一性を感じた。また、パラグアイには、多くの JICA の職員の方や隊員の方が使命をもって活動している。どの方もパラグアイでやりたいことへの思いは熱く、話に引き込まれた。そんな話をされる JICA の方は、輝いて見えた。遠く離れたパラグアイで、日本人がパラグアイの人と共に努力される姿に、日本とパラグアイのつながりを感じた。

● 村瀬 泰広

まず、パラグアイと日本のつながりを感じたのは、日本人移住地のピラポを訪問し、日本とパラグアイの両方の国にルーツをもつ日系人の方に、日本へどんな思いや考えをもっていいのか伺ったときである。日本から遠く離れたパラグアイに、日本という国や日本人の血が流れているということに誇りを感じ、大切にしている人がいるということに胸が熱くなった。そうした日系人の方によって、パラグアイにおける日本や日本人のイメージが向上し、今日の良好な関係が築かれているのだと感じた。また、学校現場では、日本の指導法やシステムのよいところを取り入れている学校が広がっている。パラグアイの先生たちが、目の前の子どもたちのことを思い、よりよい教育が行えるようにと考えていた。その姿は、日本の先生たちと同じだと思う。この研修で得たり、感じたりしたことを子どもたちに伝え広めることで、両国の関係がさらに深まってほしいと思う。

● 湯浅 郁也

現地での訪問を通し、両国とのつながり及び同一性の理解という観点において、“人と人とのつながり”について考える機会を得た。ここでの“つながり”は南米でいうところの“アミーゴ（仲間）”の意味も含めた人間関係全般である。具体的にはパラグアイで活躍する人々の多くが両国間を超えた“人と人とのつながり”を強く意識していることである。JICAの専門家として現地で活動する人々も“自分と他人”という区別なく他者の問題を自らの問題と捉えることの重要性をうたえていた。それゆえに、それらの取り組みは人と人との“つながり”の中で、現地の人々に受け入れられ、後世に受け継がれようとしていることが理解できた。また、日本人ならではの心配りや、感性に支えられるこれらの日本の行う支援について次世代を担う子どもたちにも伝える必要性を感じた。

● 横井 美月

私たちに見慣れたもので溢れるピラゴ移住地では、日本とのつながりや同一性を他の土地よりも強く感じた。そして同時に、それは多くの日系人の方々の努力の賜物であることが伝わってきた。移住当時の様子を知ることができる移住史料館や、国語を学ぶことができる日本語学校は、日本に行ったことのない日系人の子どもたちにとって、自分自身のルーツを知ることができる貴重な場所であり、日本とのつながりを実感できるものだろう。また、パラグアイを訪れた私にとっては、日本と離れた場所ではあるものの、日本の歴史を改めて学び、考えるきっかけをくれた場所となった。日本に住んでいても、日本は外国の文化や習慣に溢れていて、日本らしさはあまり感じられなくなってきているように思う。パラグアイで大切に引き継がれている日本文化を日本でも同じように一層大切にしていきたい。

4. 柱3「共通の課題について共に考え・共に越える」観点から学んだこと



● 青山 将太郎

多くの訪問先で課題に挙がったのが「ごみ問題」であった。パラグアイでは、分別の文化もなく、街中でもごみが落ちていたのを何度も見かけた。青年海外協力隊の諏澤さんもペットボトルやトレイ、トイレトペーパーの芯の回収をし、リサイクルに取り組んでいた。カテウラ地区では、処理しきれない量のごみの山があり、たくさんの方がそこで生活していた。このようにパラグアイで、特に問題化されるごみ問題だが、ごみ処理システムが整っている日本でも同じ問題があ

ると考える。名古屋市の街中でさえ、脇道に入ると、ペットボトルやたばこの吸い殻などがポイ捨てされているのを見かけるからだ。ごみ処理システムが整っていても、ごみを捨てる自分たちがルールを守らなくてはいけない。また、1人当たりのごみの排出量が最も多い日本がこの問題に積極的に取り組まなければならないだろう。身の回りに目を向け、少しでもごみを出さない・正しく捨てることのできるよう、心がけていきたい。

● 金尾 亜生子

SENAVE 研究所の見学で知ったゴマの残留農薬による日本への輸出規制の問題、ロマ・ピントド保健ポストの見学で知った地域医療の現状、カテウラ地区の見学で知った貧困の現状など、パラグアイにはまだまだ解決すべき課題がたくさんあることを知った。そこで感じたのは、教育の重要性だ。SENAVE 研究所でも、ロマ・ピントド保健ポストでも、現地の人々が知らないという状況が現状をよくしていないのではないかと思う場面がいくつかあった。現地の人に知らせること、教育を受けることで変わることも多いのではないかと感じた。そこには多くの日本人が活躍していたが、どの方も日本の考え方をそのまま取り入れるのではなく、パラグアイの人の立場を考えて、パラグアイならではの方法で活動に取り組んでいたのが印象的だった。相手の立場に立って考えること、これほどの課題でも共通に大切なことだと思う。これから子どもたちと考える中でも、この思いを忘れずに取り組んでいきたい。

● 狩山 智美

貧困・教育・医療・環境・都市計画・日系社会と、訪問先では様々な課題が見えた。特に印象的だったのは、ゴミ問題。パラグアイでは道路のあちこちにゴミが落ちていて、ゴミ箱のゴミも分別されていなかった。カテウラ地区ではゴミがどんどん運び込まれ、埋め立てられ、ゴミ山となっていた。一方、日本では分別はされているものの、焼却処分のために二酸化炭素が大量に排出されていたり、プラスチックの流出による海洋プラスチック問題も起きていたりしている。私たちの生活が、見えないうところで、環境を破壊しているという現実。内容は違っても、パラグアイも日本も課題を抱えている。持続可能な社会にしていけるために、私たちは今後どのように生活し、生きていくべきなのだろうか。課題にしっかりと目を向け、子どもたちと考え、行動していきたいと思う。

● 佐々木 恵

「ゴミがたくさん落ちていて、子どもたちも大人もゴミの分別ができない。」と青年海外協力隊の人たちが口を揃えて言っていた。確かに道端にはたくさんのごみが落ちており、公園などのごみ箱には分別がされないまま、ペットボトルなどが捨てられていた。中でも、衝撃的だったのはカテウラ地区の様子だ。山のようにゴミが積まれそのまま土に埋められ、土が痩せていき植物が育たなくなっていた。自然が失われていく様子を間近で見て、言葉が出なかった。しかし、このごみ問題はパラグアイだけではなく、世界共通の課題である。日本でも毎日たくさんのごみが出し膨大な食品ロスがあり、あと数年で埋め立て地がいっぱいになると言われている。見えない所でごみ処理をしていると、この問題に目を背けがち

になってしまう。もう一度、私たちの生活に無駄なものがないか、またゴミを減らす工夫をもっとすることはできないか、子どもたちと改めて考えたいと思った。

● 柴田 英子

共通の課題について共に考え・共に越えるという観点から、今回の訪問を通して学んだことは、人とのつながりを大切にすることで「一人の百歩より百人の一步」ということに実感を持てたことだ。青年海外協力隊の比良さんの学校では、比良さんが現地の先生方と一緒に教材を作ったり、話し合ったりして算数の授業を考えていた。意欲的に授業の改善をしていく先生方のサポートをしており、自分の任期が終わった後も続けられる体制作りを力を入れているとのことだった。「関心が無い人にも共通の課題として解決すべき問題だと思わせることが大事だ」という話が特に心に残った。他国や立場が異なる状況で様々な課題に取り組もうとしたとき、多くの人々がその課題に向き合えば、それだけ解決に近づくことができるだろう。共に考え・共に越えるために、周りの人々と一緒に取り組んでいきたい。そして、パラグアイであろうと日本であろうと、国際協力に取り組んでいる全てが現場であるという言葉をおぼれずに、自分の場所で共通の課題に取り組んでいきたい。

● 長谷川 義洋

パラグアイは、日本に比べて不便である。地下鉄はないし、移動手段の鉄道もない。舗装された道も少なく、自転車で走るのは難しい。日本では、どこでも見かけるコンビニや自動販売機だってない。学校も半日で終わり、給食だってない。病院だって少ない。こんなに不便なはずなのに、魅力を感じてしまうのはなぜだろう。それは、雄大な自然がある、家族と共に過ごすゆったりとした時間がある、自分の国で育てた食べ物がある、からではないだろうか。日本とパラグアイお互いの良さや課題を見つめ直し、「豊かさ」について10人の教員で考え、思いを共有した。便利な日本だからこそ生まれる問題や課題。不便なパラグアイだからこそ生まれる良さ。最低限の衣食住・家族との時間・最低限のお金。これだけあれば、十分に豊かだと言えるのではないだろうか。パラグアイを訪れたからこそ、見えてきた日本の良さや課題があった。

● 宮嶋 いずみ

訪問先で話を聞くと、パラグアイには貧困、教育、医療、環境など、様々な課題があることを知った。とても大きな問題で、国全体が危機感をもって動かないと難しい問題がたくさんあるように思った。SENAVE に派遣されている専門家の方々は、日本に輸出されるパラグアイのごまの残留農薬の問題を知り、パラグアイに渡り、農薬の基準を作ったり、残留農薬を調べるための仕組みをつくられたりしている。「自分がいなくなっても、現地の人ができる仕組みをつくるのが大切。」と言われていた。日本のもつ技術や知識を現場で伝え、仕組みをつくること、これが日本のできる国際協力なのだとの研修を通して知ることができた。同じ地球に住む人間として、世界の問題は自分達の問題でもあると考えていきたい。そのために自分ができることは小さなことだが、教育をよくしたい、環境をよくしたい、そんな思いや行動が人を

繋げ、よい循環を作っていけるのではないかと思う。

● 村瀬 泰広

多くの車が行き交い、ビルやショッピングモールなど、発展を感じさせる首都のアスンシオンから車で1時間かからない場所にある、ゴミ収集車が行き交い、廃材で作られた家が建ち並び悪臭が漂う劣悪な環境で多くの人が暮らすカテウラ地区。モノにあふれ、それが当たり前となっている私たちがいる一方で、本当に過酷な環境で生活し、1日1日を生きていくことに必死な人が大勢いる。貧困という問題の現実を前に、本当に自分は無力だということを痛感した。そんな中で自分ができることは、しっかりと自分の見た現実を理解し、それを伝え、広めることだと思う。それは、課題の解決には継続的な支援が求められ、それにはより多くの人の力が必要となるからだ。そして、より多くの力で課題の解決に向けて歩いていけるような社会になるために、「周りを引きつける力」「他に関心をもち共感する力」などの人間力を高めるとともに、子どもたちがそうした力をつけていける教育をしていきたい。

● 湯浅 郁也

滞在中に訪問国で出会った人々が共通して持つ問題意識として、異なる価値観を持つ人々との共生がある。ここでの“共生”には訪問国における日系人と非日系人の融合などといったものも含まれると考える。この多文化共生という課題の解決にあたっては、互いに持つ価値観の尊重が重要である。本研修で我々が訪問国で出会った事物の多くも自国で自身が経験してきたものとは異なり、それゆえ異なる価値観との遭遇でもあった。しかし、これらの異なる価値観は自身の新たな価値観とも成り得る。それは、現地での経験を「共通の課題について共に考える」という視座に立った教育活動に当てはめた場合、異なる文化や価値観を体験的に学ぶこととなるのではないだろうか。つまり、生徒の持つ価値観と異なるものとの出会いに対して、生徒自身がどのようにそれらの相違と向き合うかという学びの場を設けることである。これらの体験的な学びを通し、生徒は多文化共生についての理解を深められると考える。

● 横井 美月

今回訪問したカテウラ地区では貧困について様々な視点で考えさせられた。ゴミ集積地で暮らす人々の姿があった。洪水によって避難生活を強いられ、木の簡単な仮設住宅で暮らす人々の姿があった。一方で、カテウラ音楽団には、貧困を抜け出した青年の姿があった。研修中に会った青年海外協力隊の方々や専門家の方々が「方法を教えること、仕組みを作ることの大切さ」を語っていたことが思い出される。貧困は、簡単に解決できない様々な問題が混在しているが、教育や仕事を通して抜け出す方法や仕組みが少しずつ浸透すれば、音楽団の青年のように新しい未来を切り拓いていくことができる人々は増えていこう。日本でも格差正は大きな課題であるが、これもまた同様だろう。本当に困っている人は孤独で、どうしたらいいのか分からない闇をさまよっている。社会にある問題の一つ一つをその社会に住む一人一人が自分のこととして考え、共に越えようとする社会を創る一員でありたい。

● 開発教育指導者研修(実践編)第3回での報告

<現地研修報告>

- ◇ 同行ファシリテーター挨拶の後、①パラグアイの概要、②訪問先の紹介、③学校教育の現状と教材体験、④パラグアイの文化について、⑤研修を通して印象に残っていることについて、現地の写真および音楽と共に、現地で撮影した動画やクイズも交えて紹介した。



● 開発教育・国際理解教育実践報告フォーラム 2020 に向けた準備

- ◇ 「開発教育・国際理解教育実践報告フォーラム 2020」で行う現地研修報告の内容検討会を、次の日程で行った。

第1回：2019年10月19(土) 10:00~12:00

第2回：2019年12月15(日) 10:00~12:00

● 開発教育・国際理解教育実践報告フォーラム 2020 での報告

<現地研修報告>

- ◇ 同行ファシリテーター挨拶の後、次の流れで、現地の写真と音楽、動画と共に研修報告を行った。

- ① パラグアイクイズ
- ② 各訪問先の紹介、現地教材の紹介、印象に残っていること
- ③ 本研修の目的と現地研修で得た学び、気づき、自分自身の変化



<ポスターセッション(実践報告)>

- ◇ 実践のねらいとプログラムをまとめた「実践報告ポスター」と実践の教材、成果、写真などをもとに、フォーラム参加者へ42分間(14分×3セッション)の報告を行った。



V. パラグアイ実践報告書

パラグアイ実践報告書の内容一覧

No.	名前	対象	時間数	タイトル
1	青山将太郎	小学校2年生 (21名)	9時間	残さず食べよう ～ぼく・わたしができること～
2	金尾亜生子	小学校 帰国児童4～6年生 (27名)	5時間	日本も世界もみんなアミーゴ
3	狩山智美	小学校6年生 (68名)	15時間	世界を見よう。知ろう。考えよう！
4	佐々木恵	小学校4年生 (32名)	4時間	みんなが住みたい！と思う世界に
5	柴田英子	小学校6年生 (77名)	15時間	We are all one!! ～SDGs への取り組みを通して～
6	長谷川義洋	特別支援学級 小学校2・3・4・6年生 (6名)	6時間	世界の国々について知ろう
7	宮嶋いずみ	小学校6年生 (35名)	8時間	世界のこと、みんなで一緒に考えよう！
8	村瀬泰広	小学校6年生 (19名)	9時間	結集せよ！ ～日本の未来を支える頭脳～
9	湯浅郁也	中学3年生 (80名) 高校2年生 (80名)	3時間	遠そうで近いパラグアイ
10	横井美月	高校1年生 (317名)	3時間	世界のつながり、ありがとう！

残さず食べよう ～ぼく・わたしができること～

学校名	愛知県岡崎市立六ツ美中部小学校		授業者氏名	青山 将太郎
対象学年 (人数)	小学校2年生(21名)		実践年月 (時数)	2019年 9月～11月 (9時間)
担当教科等	全科			
単元名 (活動名)	残さず食べよう			
実践する 教科・領域	生活科・特活			
学習領域	A 多文化社会 … 文化理解 () / 文化交流 () / 多文化共生 () B グローバル社会 … 相互依存 () / 情報化 () C 地球的課題 … 人権 () / 環境 (○) / 平和 () / 開発 () D 未来への選択 … 歴史認識 () / 市民意識 () / 社会参加 ()			
単元目標	・自分と世界の繋がりを感じ、外国に興味をもつ児童を育成する。 ・日本が食品ロスを多くしている現状を知り、食品ロスを減らすために自分たちにできることはないかを考え、行動する児童を育成する。			
単元の 評価規準	知識および技能	・外国から多くの食べ物が日本に来ていることを知る。 ・食品ロスの意味や現状について理解することができる。		
	思考力、判断力、 表現力等	・調べ学習を通して、多くの外国の食品が日本に来ていることを理解した上で、日本が食品ロスをたくさんしていることを知り、自分たちにできることはないかを考えることができる。		
	学びに向かう力、 人間性等	・食品ロスの問題を自分事として捉え、家庭や学校で食品ロスを減らすことができるよう、取り組もうとすることができる。		
単元設定の 理由・意義 (児童生徒 観、指導観、 教材観から)	・小学2年生にとって国際理解教育は、児童の周りに外国人がいない限り、普段の生活をする中でなかなか必要性を感じにくい内容だと思う。児童がTVのニュースやバラエティー番組を見て、外国のことを知ったとしても、それで児童の価値観が揺さぶられるのは稀であろう。 ・それでも、今回教師海外研修に行かせてもらい、国際理解教育をしてみたいという思いを強くもった。「児童が実感を伴いつつ、必要感を感じる教材」を大事にしたいと考え、「食」をテーマにすることにした。今回の単元計画には含んでいないが、児童がさらに「食」について考えられるように、算数科では、買い物体験を行ったり、学芸会では給食をテーマにした劇を行ったりした。 ・今回の実践を通して、「自分たちは世界中から支えられている。だからこそ、世界に起こっている問題をぼくたちが解決していかなければならない」と児童たちが感じられるよう願いを込め、この単元を設定した。			

[単元計画 (全10時間)]

時	ねらい	学習活動	資料など
1	パラグアイの文化や習慣を知り、日本と似ているところや違うところに気づく活動を通して、外国に興味をもつ	①パラグアイについての PowerPoint を見たり、クイズに答えたりする。 ②日本とパラグアイの似ているところや違うところを見つける。	・パラグアイについての PowerPoint ・パラグアイの国旗 ・テレレなどのパラグアイの民芸品
2 本時	外国から食べ物が来ていることを買い物体験から想起し、外国産の食べ物を多く輸入していることを知る。	①カレーの材料を買いに行ったときに、外国産の食べ物があったことを想起する。 ②世界地図やチラシを見て、どの国からどんな食べ物が来ているのかを調べる。 ③調べた食べ物を付箋に書き、黒板に掲示した大きな世界地図に貼る。 ④特に心に残った食べ物を全体で発表する。	・児童が買い物をしているときの写真 ・世界地図(大) ・チラシ(40枚程度) ＜各班に用意する＞ ・付箋 (赤・青・黄・緑) ・世界地図(小)
3	自分の家ではどんな外国産の食べ物を買っているのか調べる活動や発表する活動を通して、自分が外国産の食べ物を食べている実感をもつ。	①事前に、家庭学習でどんな外国産の食べ物を買っているのかを調べる。(買った食品や買い物について行って見つけた食品でもよいこととする。) ①調べたものをグループで共有する。	・家庭学習で使ったワークシート ・世界地図
4	食品ロスをたくさんしている日本の現状を知る。	①NHK for school「どうする？食べ物もったいない」を視聴する。 ②自分の生活を振り返り、六ツ美中部小学校ではどれだけ食品ロスをしているか調べるために、栄養教諭に質問する内容を考える。	・NHK for school「どうする？食べ物もったいない」
5	栄養教諭に質問する活動を通して、六ツ美中部小学校の現状を知る。	①質問内容を確認する。 ②栄養教諭に質問する。 ③六ツ美中部小学校で食品ロスを減らすためには、どうすればいいか考える。	・栄養教諭に来てもらう
6	他県の小学生の取り組みを知り、自分たちにできることがないかを考える。	①NHK for school「こうする！食品ロスをなくそう」を視聴する。 ②食品ロスを減らすために自分たちにできることを考え、話し合う。	NHK for school「こうする！食品ロスをなくそう」
7	発表の流れを考える。	①全校集会を開くことを確認した後、どんなことを全校に伝えたいか考える。 ②考えを共有し、4つの項目に絞る。 ③グループ分けを行い、どのように発表したいかを考え、話し合う。	
8, 9	発表の準備をする。	①テーマに沿って、効果的な発表をするために資料作りを行う。 ②発表をする際に、必要な資料を集める。 ③発表の練習を行う。	＜準備しておく物＞ ・画用紙、・写真 ・PowerPoint ＜調べ方＞ ・栄養教諭に質問 ・家で調べる
朝会	全校集会を開き、食品ロスを減らすためにできる活動について発表する。	①全校に自分たちが学習したことや伝えたいことを発表する。	・発表に使うもの

[本時の展開（2時間目）]

ねらい	・日本が世界中から食べ物を多く輸入していることに気づく。		
過程・時	教師の働きかけ・発問および学習活動	指導上の留意点(支援)	資料
2	1. 児童が買い物をしているときの写真を見て、外国から食べ物が来ていることに気づく。 ・フィリピンから来ているバナナが売っていたよ。 ・オーストラリアから肉が来ているってTVのCMで言っていたよ。	・児童たちが知っている食べ物をできるだけ多く取り上げる。	買い物をしているときの写真 あんかけ焼きそばの写真 食材のイラストと自給率のグラフ
5	2. 教師が作ったあんかけ焼きそばの写真を見て、どんな野菜が使われているかを考え、その食料の自給率を知る。 ・使った野菜は、もやし、ピーマン、キャベツ、玉ねぎの4種類。 ・日本で作られるよりも、外国から来ているものの方が多いな	・具体的な数字は伝えず、視覚的に分かるように、グラフで紹介する。	世界地図(大) チラシ(40枚程度) <各班に用意> 付箋 (赤・青・黄・緑) 世界地図(小)
18	3. ほかにどんな食べ物が外国から来ているか興味をもち、世界地図やチラシを見て、どの国からどんな食べ物が来ているのかを調べる。 ・台湾ってどこにあるんだろう。 ・ニュージーランドからキウイが来ているね。 ・このチラシでもフィリピンから来ているバナナがあるよ。 ・エクアドルからもバナナが来ているんだ。 ・韓国からは、パプリカが来ているんだね。	・教師がやり方を実際に見せ、どこを見るのが児童が分かるように支援する。 ・チラシは各班に2枚ずつ配付し、終わったら新しいチラシと交換することとする。 ・国名と県名の区別がつかない児童もいるため、机間指導をして確認する。	
10	4. 調べた食べ物を付箋に書き、黒板に掲示した大きな世界地図に貼る。 ・こんな遠い国からも食べ物が来ているんだね。 ・アメリカからは、肉がたくさん来ているんだね。 ・やっぱり、フィリピンから来ているバナナが多いなあ。 ・大きい国からたくさん来ているってわけじゃなくて、小さい国からもたくさん来ているんだね。 ・日本には世界中から、食べ物が来ているんだ。	・肉類は赤色、魚類は青色、野菜果物類は黄色、その他は緑色の付箋に書くように指示をする。 ・貼り終わった後、黒板の前に児童を集め、世界地図を見て気づいたことはあるか尋ねる。	
3	5. 特に心に残った食べ物を全体で発表する。 ・どのチラシを見ても、フィリピンのバナナが書いてあったから、バナナが気になりました。 ・わたしが心に残った食べ物は、タピオカが好きだから、台湾から来ているタピオカです。		
7	6. 今日の授業で思ったことを振り返りとして書く。 <div style="border: 1px solid black; padding: 5px; margin-top: 10px;">世界中から、こんなに食べ物が日本に来ているなんて、びっくりしました。遠い国からも食べ物が来ていることが分かりました。</div>	・振り返りシートに書くよう指示をする。	
評価規準に基づく本時の評価	・世界のいろいろな国から、食べ物が来ていることに気づくことができるか。 ・国ごとに輸入している食べ物の違いに気づき、その国の特徴に気づくことができるか。		

[総括・まとめ]

学習方法および外部との連携	<ul style="list-style-type: none"> ・第5時に、栄養教諭に来てもらって授業を行った。事前に質問内容を伝えることで詳しく調べてきてもらったり、曖昧な質問の意図を明確にしたりすることができた。質問の際に、給食センターで働いている人の気持ちについて話してもらうことで、自分たちの生活を支えてもらっていることに気づくことができた。 ・単元の後半は、「児童たちがどうしたいか」を特に大事にし、授業を行った。「こんなことを伝えたい」という強い思いがあっても、表現の仕方に迷う児童が多いため、表現方法を個別指導で複数提案した。
学校内外で国際理解教育・授業実践を広める取り組み	<ul style="list-style-type: none"> ・校内の取り組みとして、全校集会を開き、学級の児童たちがこれまでの学習について、全校児童・教員に呼びかける活動を行った。 ・第1時を参観授業の日に行き、保護者にパラグアイの文化や風習を知ってもらった。
苦労した点	<ul style="list-style-type: none"> ・始めに計画したときには、集会を開く予定は無かったし、これまで全校の前で発表する経験が児童たちに無かったこともあり、集会の準備には戸惑った。 ・2年生では、重さに対しての単位や量感の理解が無かったため、理解しやすそうな単位に変換することに苦労した。
改善点	<ul style="list-style-type: none"> ・第2時で世界地図を配付したが、2年生にとって情報量が過多だったように感じた。紙面で配付するのではなく、タブレットにデータとして渡すことで、アップにしたり、自分が見やすいように調整したりできるよう改善した方がいいと感じる。 ・2年生でなく、5年生でこの実践を行うと社会科の食料自給率とも関連付けられ、より効果的になるのではないかと感じた。
成果が出た点	<ul style="list-style-type: none"> ・学校内だけでなく、家庭でも外国や食品ロスの話が出ていると懇談会で保護者から聞いた。児童の価値観が変容し、生活の仕方が変わったこと。 ・実践を通して、質問をして調べたり、全校集会を開く活動をしたりすることで、調べ方を学んだり、相手に分かりやすく伝える力を伸ばすことができたりしたこと。
学びの軌跡 (児童生徒の反応、感想文、作文、ノートなど)	<p>○第2時の振り返り</p> <ul style="list-style-type: none"> ・日本は色々な国から食料が送られていることが分かった。ノルウェーという国も初めて知った。カナダさんからたくさん肉が来ていました。僕は世界旅行に行ったことが無いけど、大人になったら世界旅行に行ってみたいと思いました。 <p>○第4時の振り返り</p> <ul style="list-style-type: none"> ・世界中から、たくさん食べ物があるのにあんなにすてているのはなんでだろうと思いました。家に帰ったら、冷蔵庫の中をお母さんと見ようと思います。
授業者による自由記述	<ul style="list-style-type: none"> ・低学年は特に、価値観が変わりやすい時期だと思うので、開発教育を進めるには適しているなと感じた一方で、まだ児童の意識が発達段階的に自分の身の回りから一歩外に出ないので、難しいなとも感じた。考える範囲を広げすぎると、児童の実感も伴いにくいので、児童の実態に合わせて慎重に考慮するべきだと考える。 ・「全校集会を開きたい」と話し合いから出てきたのは、自分の想像を児童が越えていった瞬間だった。児童が危機感を持って学習に取り組むことができたからこそ、表出した姿だと考える。
単元構想・実施における参考資料等	<ul style="list-style-type: none"> ・なし

[学びの軌跡 (児童生徒の反応、感想文、作文、ノートなど)]



▲ 第2時の授業の様子



▲ 第2時の授業の様子



▲ 全校集会で使った資料の一部

これまでのにこしたきゅう食のりょう(1日あたり)			
4月	おちゃわん	83	はい分
5月	おちゃわん	93	はい分
6月	おちゃわん	116	はい分
7月	おちゃわん	115	はい分
9月	おちゃわん	108	はい分

▲ 全校集会で使った資料の一部



▲ 全校集会の様子



▲ 全校集会の様子

日本も世界もみんなアミーゴ

学校名	愛知教育大学附属名古屋小学校		授業者氏名	金尾 亜生子
対象学年 (人数)	小学校帰国児童4～6年生(27名)		実践年月 (時数)	2019年 11月 (5時間)
担当教科等	外国語			
単元名 (活動名)	日本と世界の違いやつながりについて知り、共に生きていくために大切なことを考えよう。			
実践する 教科・領域	総合的な学習の時間			
学習領域	<p>A 多文化社会 … 文化理解 (○) / 文化交流 () / 多文化共生 (○)</p> <p>B グローバル社会 … 相互依存 (○) / 情報化 ()</p> <p>C 地球的課題 … 人権 () / 環境 () / 平和 () / 開発 ()</p> <p>D 未来への選択 … 歴史認識 () / 市民意識 () / 社会参加 (○)</p>			
単元目標	<ul style="list-style-type: none"> ・パラグアイと日本の文化や課題について知り、共通点や相違点に気づく。 ・パラグアイと日本の違いについて考え、大切なことは何か共に確認する。 ・外国や人とのつながりについて気づき、大切なことは何か共に確認する。 			
単元の 評価規準	知識および技能	<ul style="list-style-type: none"> ・日本と世界の文化や課題について知り、共通点や相違点に気づく。 ・日本と世界との違いやつながりについて知る。 		
	思考力、判断力、 表現力等	<ul style="list-style-type: none"> ・日本と世界との違いを知り、多様性について考えることができる。 ・違いを受け入れ、共に生きていくために大切なことを考えることができる。 		
	学びに向かう力、 人間性等	<ul style="list-style-type: none"> ・日本と世界との違いやお互いの考え方の違いを受け入れ、相手の立場や考え方を理解しようとする。 		
単元設定の 理由・意義 (児童生徒 観、指導観、 教材観から)	<ul style="list-style-type: none"> ・本学級の児童は、帰国子女であり、海外で長期間生活してきているため、日本の生活に適應することを目的に編入してきている。そのため、さまざまな文化のもと生活しており、日本の生活や文化に慣れていない児童もいる。 ・さまざまな生活環境で育ってきた児童がお互いの考え方を受け入れ、相手の立場や考え方を理解できるようにするために、本単元を設定した。パラグアイという国を通して、児童が日本との違いを知り、多様性について考えることで、違いを受け入れ、共に生きていくために大切なことを考える機会とした。多くの活動を参加型にすることで、協働的に学習し、お互いの考えを共有できるようにした。 ・始めは、パラグアイという国を通して、写真や資料を使ってクイズをしたり、共通点や相違点を探ったりした。その後は多様性について考えるために自分の生活を想像した上で、派生図を使って多くの意見を出したり、対比表を使ってメリット、デメリットを考えたりした。その後、自分事として、共に生きていくために大切なことを考えた。 			

[単元計画 (全5時間)]

時	ねらい	学習活動	資料など
1	パラグアイについて知る。	<ol style="list-style-type: none"> ① グループ決め ② 最近日本を感じたことについてグループの人に話す。【アイスブレイキング】 ③ 「パラグアイ」と聞いてイメージすることを書き、グループで共有する。 ④ グループでパラグアイクイズをする。 ⑤ パラグアイの写真を見て、どんな様子か想像する。 【フォトランゲージ】 ⑥ 今日知ったパラグアイについてワークシートに書き、グループの人と共有する。 	パワーポイント パラグアイの写真
2	日本とパラグアイのつながりを知る。	<ol style="list-style-type: none"> ① グループ決め ② 身近にある外国のものについてグループの人に話す。【アイスブレイキング】 ③ 前回の振り返りをし、印象に残っていることをグループの人に話す。 ④ 日本と外国とのつながりについて考える。【クイズ】 ⑤ 日本とパラグアイのつながりについて考える。 【フォトランゲージ】 ⑥ 写真を見て、日本のものとパラグアイのものに分け、2つの国のつながりについて考える。 ⑦ 日本と世界とのつながりについてワークシートに書き、グループの人と共有する。 	『Find the Link どうなってるの？世界と日本 第二版』 パワーポイント パラグアイの写真
3	日本とパラグアイの共通点と相違点を考える。	<ol style="list-style-type: none"> ① グループ決め ② 日本に帰ってきて驚いたことについてグループの人に話す。【アイスブレイキング】 ③ 前回の振り返りをし、印象に残っていることをグループの人に話す。 ④ 5枚の資料を1人1枚担当し、グループのメンバーに内容を簡潔に説明する。 ⑤ 資料や今までの学習から、日本にしかないもの、パラグアイにしかないもの、共通してあるものに分けて表を作る。【対比表】 ⑥ 日本とパラグアイの共通点、相違点から考えたことをワークシートに書き、グループの人と共有する。 	パラグアイについての資料
4 本時	多様性のない社会について考える。	<ol style="list-style-type: none"> ① 仲間さがしをする。【アイスブレイキング】 (題:「目玉焼きにかけるもの」など) ② グループ決め ③ グループの共通点を探す。【アイスブレイキング】 ④ 前回の振り返りをし、印象に残っていることをグループの人に話す。 ⑤ この社会(学校)がみんな自分と同じ考えの人たちだったらどうするか考える。【派生図】 ⑥ みんな自分と同じ考えの人たちのいる社会のメリットとデメリットを考える。【対比表】 	
5	共に生きていくために大切なことを考える。	<ol style="list-style-type: none"> ① グループ決め ② 最近許せないと思ったこと【アイスブレイキング】 ③ 違いを受け入れることのよさを考える。【リスト】 ④ 自分にできることは何か考える。【ビンゴ】 ⑤ 違いを受け入れ、共に生きていくために大切なことを考え、自分にできることをビンゴシートに書く。 ⑥ 今回の授業で考えたことをワークシートに書き、グループの人と共有する。 	

[本時の展開 (4時間目)]

ねらい	・多様性のない社会について考える。		
過程・時	教師の働きかけ・発問および学習活動	指導上の留意点(支援)	資料
導入 5分	1 仲間さがしをする。【アイスブレイキング】 ・「目玉焼きに何をかける?」「キャベツの千切りに何をかける?」「サンドイッチの具材は何が好き?」というお題を聞いて、仲間さがしをする。	・普段の生活を思い出し、身近なところでも自分と相手が違う考えをもっていることを意識する。	
展開 5分	2 グループ決め ・ばらばらになっているハートのカードのくじを引いて、つなぎ合わせてグループを作る。一部同じになれない人もいるが、あとで同じ色のグループに入る。どんな気持ちだったか感想を言う。	・事前に柄のついたハートと無地のハートを準備し、無地のカードの人はグループが作れないようにする。 ・グループができた人、できなかった人それぞれの感想を聞き、共有するようにする。	・ハートのカードのくじ(柄、無地)
5分	3 グループの共通点をさがす。【アイスブレイキング】 ・同じグループになった人同士の共通点をさがす。	・性別、年齢、外見、趣味等何でもよいことを伝える。	
5分	4 前回の振り返りをし、印象に残っていることをグループの人に話す。	・日本とパラグアイの共通点・相違点について思い出すように声をかける。	・ワークシート
15分	5 この社会(学校)がみんな自分と同じ考えの人たちだったらどうするか考える。【派生図】 (1) A3の紙の真ん中に「みんな自分と同じ考えの人たちのいる社会だったら」と書き、派生図を作る。 (2) 表を回し読みをしながら、「いいね!」と思ったところに★印をうつ。	・全体の場で例を示す。 ・グループの人と声を出しながらお互いにペンで書くように指示する。	
まとめ 10分	6 みんな自分と同じ考えの人たちのいる社会のメリットとデメリットを考える。【対比表】 (1) A3の紙を使い、メリットとデメリットを対比表にする。 (2) 全体の場で共有する。	・派生図や他のグループの意見を参考に、メリット、デメリットについて考えるように指示する。	
評価規準に基づく 本時の評価	<ul style="list-style-type: none"> ・仲間さがしのアイスブレイキングを通して、身近な違いを知り、受け入れることができた。 ・「みんな自分と同じ考えの人たちのいる社会」について考えることで、多様性のメリット、デメリットを考えることができ、自分の考えをもつことができた。 ・人それぞれ違う考えをもっているから社会が成り立っていることに気付き、違いを受け入れることの大切さを知ることができた。 		

〔総括・まとめ〕

学習方法および外部との連携	<ul style="list-style-type: none"> ・毎時間グループを作ること、多くの児童と関わることができた。 ・パワーポイントや写真を使うことで、聞くだけでなく、目で見て学習に取り組むことができ、積極的に参加することができた。 ・参加型の活動を取り入れることで、他の児童との関わりが増え、多くの意見を取り入れることができた。
学校内外で国際理解教育・授業実践を広める取り組み	<ul style="list-style-type: none"> ・4年生から6年生までの帰国学級合同で授業を行ったため、他の帰国学級の担任教員に授業を参観してもらった。 ・一般学級の児童へも一部同じ形で授業を行ったり、話をしたりした。
苦労した点	<ul style="list-style-type: none"> ・十分な時間を確保することが難しかった。 ・ねらいを達成するための流れのある授業展開にするのに苦労した。 ・児童の興味を持続させるために、さまざまな写真や資料を用意したり、参加型の活動を多く取り入れたりと、常に活動があるように心がけた。
改善点	<ul style="list-style-type: none"> ・1回のプログラムを45分の授業時間で行おうとすると時間が足りなくなることが多かったので、前回の振り返りや本時の振り返りまでしっかり行うには2時間続きの授業が望ましいと思った。 ・プログラムの最後に自分の生活に生かせるようにできることを考えたが、それが実際に実践できているか、確認をるところまでできるとよいと思った。
成果が出た点	<ul style="list-style-type: none"> ・パラグアイという国を通して、世界と日本の違いやつながりについて興味をもったり、理解したりすることができた。 ・違いを受け入れることのよさや自分にできることを考えたこと、参加型の活動を多く行ったことで、児童は人との関わり方について意識するようになった。
学びの軌跡 (児童生徒の反応、感想文、作文、ノートなど)	<p><各回の感想></p> <ul style="list-style-type: none"> ・あまり南米のことは知らなかったけれど、この時間を通して、伝統や地域のこと、学校など、いろいろなことを一気に知ることができてとても物知りになった気分になった。(第1回) ・1つの国だけど、場所によって環境が全然違う。(第1回) ・日本や世界はお互いに頼り合って共に助け合っているんだなと思った。パラグアイも日本と強いつながりがあったてすごいと思った。(第2回) ・パラグアイに日本人学校があることに驚いた。パラグアイと日本の間に友好関係があることを知らなかった。知らなかったことを知ることができたから楽しかった。(第2回) ・共通点も全く違うところも多くあってすごいと思った。(第3回) ・日本とパラグアイは国同士遠いのにつながっていることを感じた。(第3回) ・似ているところがたくさんあって、たとえ離れていても、文化は似ていることが少しうれしかった。また、パラグアイの文化も日本にあつたらいいなと思った。(第3回) <p><第5回 自分にできることビンゴの内容></p> <ul style="list-style-type: none"> ・周りの意見も自分の意見も全て一度聞いてから結論を出す。 ・協力しながらよりよいものを作る。 ・周りの考えを受け入れる(認める)。 ・両方の考えを組み合わせられるか考える。
授業者による自由記述	<ul style="list-style-type: none"> ・教師海外研修に参加したことで、パラグアイの現状を実際に知ることができ、教材となる材料をたくさん持ち帰ることができた。今回の実践は小学生向けに違いを受け入れる多様性受容をテーマに行ったが、パラグアイから見えた人権や環境などの課題をテーマにプログラムを組み立てることもできると感じた。今回の実践だけに終わらず、今後もパラグアイを通して実践が続けられると良いと思った。
単元構想・実施における参考資料等	<ul style="list-style-type: none"> ・『Find the Link どうなってるの？世界と日本 第二版』JICA/2017年

★自分にできることを9つビンゴシートに書きましょう。

優しくする 人がいなくても助かる。	人助け こまごまでも、助け合う。	協力 おたがいに助け合う。
愛国心 日本を信じる、国を大切に。	平等 差別をしない。	挑戦 あきらめない。
友情 人付き合いを大切に。	健康 112まで電話に120まで。	守る 約束を守る。

▲ 第5時 自分にできることビンゴ

★自分にできることを9つビンゴシートに書きましょう。

悪口を言わぬ、いい心 めを作らぬ。	正直になる 自然体である。	気遣い 気遣い。
人の悪い所ばかり見 なく、いい所を見つ める。	いろいろな人の考えを 受け入れる。	やさしい 自然を大切に。
信頼する	笑顔でいる	助けず、助け合う、協力 する

▲ 第5時 自分にできることビンゴ

★自分にできることを9つビンゴシートに書きましょう。

人に気を遣い空気を 読む。	周りの人の考えを 受け入れる(認める)	正直になる
話し合いを積極 的にする	差別をなくす。	悪口を言わない
両方の考えを あわせられるが考え	他人が不快に ならないようにする	やさしくする。

▲ 第5時 自分にできることビンゴ

★自分にできることを9つビンゴシートに書きましょう。

ほかの人を見ただけ に、勝手に 行動や思い、気持ち を伝えます。	周りの意見も自分の 意見も全て一度聞いて から結論を出す。	こまごまの人を見たら、 助けかける
相手の気持ちも 考えて行動する	協力しながら よいものを作る。	先は考えてから 行動する

▲ 第5時 自分にできることビンゴ

世界を見よう。知ろう。考えよう！

学校名	名古屋市立鳥羽見小学校		授業者氏名	狩山 智美
対象学年 (人数)	小学校6年生(68名)		実践年月 (時数)	2019年7月～2020年1月 (15時間)
担当教科等	小学校全科			
単元名 (活動名)	世界を見よう。知ろう。考えよう！			
実践する 教科・領域	総合的な学習			
学習領域	<p>A 多文化社会 … 文化理解 (○) / 文化交流 () / 多文化共生 ()</p> <p>B グローバル社会 … 相互依存 (○) / 情報化 ()</p> <p>C 地球的課題 … 人権 () / 環境 (○) / 平和 () / 開発 ()</p> <p>D 未来への選択 … 歴史認識 () / 市民意識 (○) / 社会参加 ()</p>			
単元目標	<ul style="list-style-type: none"> ・世界には異なる文化や考え方があることを知り、日本を見つめ直すことを通して、自分の生活を支える先人の努力に気づき、社会の一員として行動しようとする意識を高める。 ・世界と日本の食を通したつながりについて知り、自分の衣食住を支える世界の人々の存在や今日の課題に気づき、解決に向け、世界中の人々と助け合おうとする心情を育む。 			
単元の 評価規準	知識および技能	・世界と日本が抱える食料生産における課題を知り、互いに影響を与え合っていることを理解する。		
	思考力、判断力、 表現力等	・食料生産における世界と日本の課題を解決するために、自分にできることを考える。		
	学びに向かう力、 人間性等	・世界は小さな努力と進歩の積み重ねで少しずつ良くなっていることに気づき、地球に生きる人間として、行動しようとする意識をもつ。		
単元設定の 理由・意義 (児童生徒 観、指導観、 教材観から)	<ul style="list-style-type: none"> ・本校の6年生68名は、比較的穏やかな集団で、与えられた課題に対して真面目に取り組む児童が多い。しかし、自信がないためか、責任ある立場に立ち、行動することへの苦手意識が強く、自ら課題を見付け、解決の方法を追求することや、解決に向けて行動することに課題がある。また、世界に対してはテレビやインターネットのニュースで見聞きする程度で、「言葉は聞いたことはあるが具体的なことは知らない」という児童が多い。外国は「遠いどこかの国」という意識が強く、世界の課題に対して自分事として捉えることが難しいのが現状である。 ・本単元では、世界を知ること・世界から見た日本を知ることを通して、多様な文化に触れるとともに、先人の実績により、日本が世界から評価されている点についても気づけるようにする。自分の生きる日本という国に誇りをもつと共に、日本の抱える課題について児童にとって身近な「食」をテーマに考えることで、日本は世界の国々に支えられているという実感ももたせたい。学習を通し、世界は多くの国々が相互に依存しながら成り立っていることへの気づき、世界という大きな社会の一員としての意識の高まりをねらう。 			

[単元計画（全15時間）]

時	ねらい	学習活動	資料など
1	世界の実態を知り、多様性に気づく。	<ul style="list-style-type: none"> ・ワークショップ「世界がもし34人の村だったら」を行い、「言語」「宗教」「年齢」など様々な切り口で世界を見る。 ・気づいたことを発表し、共有する。 ・学習の振り返りをする。 	
2	世界の食文化や生活様式の違いを知り、貧富の格差に気づく。	<ul style="list-style-type: none"> ・6つの国の1週間分の食料を撮影した写真を見て、国当てクイズをする。 ・似ている点、違う点を見付ける。 ・気づいたことを発表し、共有する。 ・学習の振り返りをする。 	写真「地球の食卓—世界24か国の家族のごはん」
3	パラグアイと日本の文化を比較し、相違点と類似点を見付ける。	<ul style="list-style-type: none"> ・パラグアイの街並み、食事、学校、人々の様子などの写真を見て、日本と比較する。 ・気づいたことを発表し、共有する。 ・学習の振り返りをする。 	パラグアイの写真
4	パラグアイで日本人が信頼されていることを知り、先人の努力に気づく。	<ul style="list-style-type: none"> ・パラグアイで働く日本人、日系人のインタビュー動画を見る。 ・日本人が世界から信頼されていることを知る。 ・日本人が信頼される理由を考える。 ・現在の豊かで信頼される日本をつくってくれた祖父母に向けて感謝の手紙を書く。(敬老の日の取り組み) 	インタビュー動画 パラグアイの写真
5	世界は少しずつ良くなっていることを知り、それは小さな進歩の積み重ねの成果であること、しかしまだ課題は解決されていないことに気づく。	<ul style="list-style-type: none"> ・これからの世界についてのクイズをする。 ・「トイレ」「ベッド」「おもちゃ」等の資料から国当てゲームをする。 ・気づいたことを発表し、共有する。 ・事実について確認する。 ・国際支援の実例を資料で見る。 ・学習の振り返りをする。 	ドル・ストリートの写真
6	日本の食は、諸外国に依存していることに気づく。	<ul style="list-style-type: none"> ・食に対する願いを書く。 ・「いただきます」は誰に言っているかを考える。 ・「ALL MADE IN JAPANの食卓」の動画を見る。 ・お好み焼き・ラーメンの原材料がどこから来ているか考える。 ・学習の振り返りをする。 	JICA資料「どうなってるの？世界と日本」
7・8	日本の食に関する課題を知り、その原因を考える。	<ul style="list-style-type: none"> ・「食品ロス」「フード・マイレージ」「自給率の低下」をテーマにしたストーリーを読む。 ・原因・問題だと思ふところに線を引く。 ・気づいたこと、考えたことを共有する。 ・このまま課題を放置するとどうなるかを考える。 ・学習の振り返りをする。 	JICA 資料「国際理解教育実践資料集」 朝日新聞「地球教室2019基礎編」
9・10 本時	世界の食に関する課題を知り、その原因を考える。	<ul style="list-style-type: none"> ・「パラグアイのごま残留農薬問題」「飢餓」「児童労働問題」をテーマにしたストーリーを読む。 ・原因だと思ふところに線を引く。 ・気づいたこと、考えたことを共有する。 ・課題に対して世界ではどのような支援がなされているのかを知る。 ・学習の振り返りをする。 	JICA 資料「世界の食料」 ストーリー
11～ 15	課題解決のために自分にできることを考える。	<ul style="list-style-type: none"> ・「食品ロスチーム」「フードマイレージチーム」「自給率チーム」「飢餓チーム」「児童労働チーム」に分かれて、課題解決のためのプロジェクトを作る。 ・自分たちのプロジェクトを実行する。 ・プロジェクトの振り返りをし、今後も個人でできることを考え、行動宣言をする。 	

[本時の展開 (9・10時間目)]

ねらい	<ul style="list-style-type: none"> ・世界の食に対する課題を知る。 ・原因に自分たちの生活が関わっていることに気づく。 ・世界をよくするための方法を知り、行動しようとする。 		
過程・時	教師の働きかけ・発問および学習活動	指導上の留意点(支援)	資料
導入 10分	1 前時の振り返り 日本の食に関する課題について、「知ったこと」「気づいたこと」「考えたこと」を共有する。	・派生図を掲示し、食に対する課題を放置した場合、「環境問題」や「生命」に関わってくることを確認する。	
35分	2 世界の「食」の課題について知る。 (1) パラグアイのごま残留農薬問題 (2) 世界では9人に1人が飢餓状態 (3) カカオ農園で起こる児童労働問題 ストーリーを読み、「課題」「原因」と思う箇所に下線を引き、共有する。	・「かわいそう」「ひどい」だけで終わらないよう、「農薬の検査なしで輸入した食物を安心して食べられるか」「児童労働をさせている親は悪人なのか」と問い掛け、世界の課題は多面的に捉えていく必要があることに気づく。	ストーリー
20分	3 世界の「食」の課題に対する大人の行動を知る。 (1) JICA の INOPAL プロジェクト (2) NGO「JIFH」の取り組み (3) フェアトレード商品の紹介 (4) その他 企業の取り組み 自分でも「協力できる」と思ったら手を挙げる。	・「かわいそうだから、支援してあげる」ではなく国際協力が日本にとってもよい効果があることを押さえる。 ・自分にもできることを考えるように促し、行動化への意欲を高める。	写真 フェアトレード商品
15分	4 SDGsについて知る。 なぜ、様々な企業が国際協力を行っているのかを選択式クイズで考える。	・行政や NGO だけでなく、企業も取り組んでいる点を押さえ、児童にとってなじみのある企業も国際協力をしていること、その企業を利用することで間接的に国際協力をしていることに気づく。	
10分	5 世界をよくするために、今の自分にできることを考えるプロジェクトを立ち上げることを知る。	・卒業を前に、学校内で取り組める「世界をよくするためのプロジェクト」を立ち上げ、実行することを伝え、児童の意欲を高める。	
評価規準に基づく 本時の評価	<ul style="list-style-type: none"> ・写真や図を取り入れたストーリーは、分かりやすく、児童にとってインパクトが強かったようで、「かわいそうだ」「ひどい」と憤りの声が聞かれた。しかし、「残留農薬の検査がされない食品を、私たちは買うだろうか」「この子の親は児童労働を望んでいるのだろうか」など違う視点を与えることで、誰かが悪者なわけではないこと、世界の課題は複雑であり、自分たちの生活がその一因になっていたり、影響を与えたりしていることに気づくことができた。 ・企業の取り組みの例として、児童にとって身近な企業や商品を紹介することで、「自分にも協力できそうだ」「国際協力は、特別な人だけが取り組むものではないんだ」と児童の意欲を高めることができた。 ・児童の危機感を煽るのではなく、「大人が努力して、少しずつ良くなってきた世界をもっと良くするために、今の自分にできることを考えよう」という趣旨でプロジェクトにつなげた。次時では、児童がアイデアを出し合い、前向きな雰囲気の中でプロジェクトを企画する姿が見られた。 		

〔総括・まとめ〕

学習方法および外部との連携	<ul style="list-style-type: none"> ・ブレインストーミング、派生図等の手法を取り入れ、児童が話し合いながら考えを広げたり深めたりし、その中で気づきが生まれるようにした。 ・児童はとても素直であるが故に、ダイレクトに情報を受け取る。ストーリーを読む際に、課題に対して一面的な捉え方にならないよう、教師から、様々な立場の考えや視点を与え、多面的に課題に向き合えるようにした。
学校内外で国際理解教育・授業実践を広める取り組み	<ul style="list-style-type: none"> ・現職教育の一環として、教師海外研修の報告を1時間ほど行った。 ・授業公開をし、若手教員に対しアクティビティの手法や資料の入手方法、国際理解教育の授業の進め方について指導助言をした。 ・児童のプロジェクトを通して、他学年や他教員へもSDGsについて理解と浸透を図った。 ・授業参観で、SDGsに関する授業を行い、保護者へ知らせるとともに児童のプロジェクトの様子を紹介した。 ・児童のプロジェクトについて、児童が作成したチラシや手紙を活用して家庭や地域へも知らせ、参加や実践をお願いした。
苦勞した点	<ul style="list-style-type: none"> ・正確で、できるだけ新しいデータを集めることが困難であった。 ・小学校の児童が世界の課題を自分事として捉えるのは、やはり難しいと感じた。児童ができるだけ自分とのつながりを意識できるようにストーリーには組み込んだが、気づきにはかなりの個人差がある。グループ内で意見を共有することでフォローした。
改善点	<ul style="list-style-type: none"> ・年間を通しての実践ができるとよかった。3学期に集中的に行ったため、卒業前のタイミングを児童の意欲付けに生かすことはできたが、長いスパンで取り組めると、より学校や地域への波及効果が狙えたと思う。 ・始めからSDGsについて取り入れながら実践をしていれば、児童が課題を捉えるときにSDGsとつなげて考えやすく、またその必要性も理解しやすかったと考える。
成果が出た点	<ul style="list-style-type: none"> ・「食」「環境」「国際協力」などの視点は他教科の学習や食育につながる部分も多く、社会、理科、保健等の教科や給食指導でも本実践の学びが生かされた。 ・体験やグループワークなどの学習を通して、「ただ知っている」だけでなく、経験に基づいた納得と実感のある知識としての定着を図ることができた。 ・学年合同で実践を進め、学級の垣根を越えて、共に学び合うことで、学習の幅が広がるだけでなく、集団力も高めることができた。
学びの軌跡 (児童生徒の反応、感想文、作文、ノートなど)	<ul style="list-style-type: none"> ・パラグアイの人達が日本人を信頼してくれていると知って、うれしかった。 ・日本人が作り始めた大豆で、パラグアイは今生産量が世界第4位！ ・いつか、パラグアイに行き行って日系人の人に会ってみたい。お肉が食べたい。 ・世界では意外といろいろな国が力を合わせているんだなと思った。 ・世界は自分の知らない問題の方が多かったし、日本でも問題があって、一つでも減らしたいなと思った。
授業者による自由記述	<ul style="list-style-type: none"> ・児童は目をキラキラと輝かせながら、パラグアイの写真を見たりパラグアイで活躍する方々のお話を聞いたりしていた。新しい世界と出会う期待、純粋な喜びは、本研修を通して、私自身も感じることができ、大変貴重な機会をいただいたと感謝している。 ・パラグアイで教えていただいたことは本当にたくさんあるのだが、今年の実践では全てを取り扱い切れなかった。今回の研修で得られた経験と学びを、さらにブラッシュアップさせ、来年度以降も実践に生かしていきたい。
単元構想・実施における参考資料等	<ul style="list-style-type: none"> ・『世界の食料』『どうなってるの？世界と日本』『国際理解教育実践資料集』JICA ・『地球教室2019基礎編』朝日新聞 ・『地球の食卓 世界24カ国の家族のごはん』ピーター・メンゼル ・『FACTFULNESS-10の思い込みを乗り越え、データを基に世界を正しく見る習慣-』ハウス・ロスリング ・『ドル・ストリート』(http://www.gapminder.org/dollar-street/matrix)

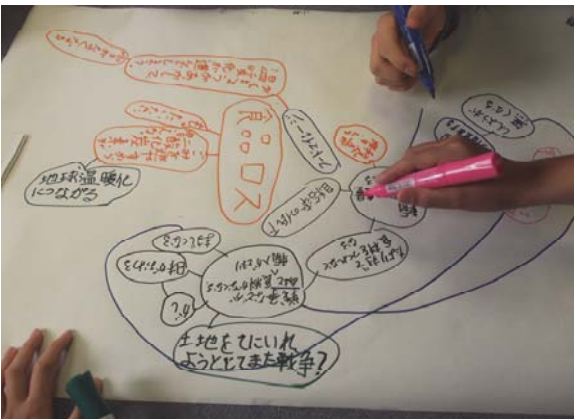
[学びの軌跡 (児童生徒の反応、感想文、作文、ノートなど)]



▲ パラグアイってどんな国？



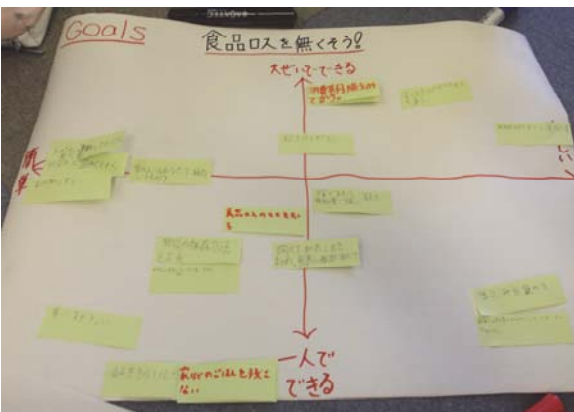
▲ これはどこの国？



▲ 日本の「食」の課題、そのままにすると、どうなる？



▲ これならできそう？国際協力



▲ 今の自分にできることを考えよう！



▲ プロジェクト会議

Project (プロジェクト名)	フードマイレージを減らすぞ！
Team (活動期間)	2/5 (水) ~ 2/28 (金) この期間内にプロジェクトを実行！
Plan (計画) (いつ・どこで・何を・どのように)	<p>フードマイレージを減らすために、50歳以上の高齢者に野菜を届ける。防犯パトロールの時にヒラギリ (地域の人) をしるめる。全クラスにも配布を各自。門の前で宣伝(晴れの日) 休まず。</p>
一人ですぐにできること	<p>自分自身で野菜の量を減らす。野菜の量を減らす。野菜の量を減らす。野菜の量を減らす。</p>
家でできること	<p>ポスターの最後にはおさらいを出す。</p>

▲ 児童が考えたプロジェクト

自分が知っていると思っていることでも、世界で考えると全然知らなくてそれ以上の問題があった。
その問題を自分達かどう解決するのか世界をよくする
かぎになると思う。

世界には、貧しく暮らしている所や、苦かほけしいという事
分かりました。でも、国同士助け合いをしてより良い国にしようと
する事が分かると、自分から国のために出来る事をしたい
思いました。

▲ 児童の感想

みんなが住みたい！と思う世界に

学校名	三重県桑名市立星見ヶ丘小学校	授業者氏名	佐々木 恵
対象学年 (人数)	小学校4年生(32名)	実践年月 (時数)	2019年 12月～ 2020年 1月 (4時間)
担当教科等	全教科		
単元名 (活動名)	総合的な学習「世界のごみ問題について考えよう」(環境)		
実践する 教科・領域	総合的な学習		
学習領域	<p>A 多文化社会 … 文化理解 (○) / 文化交流 () / 多文化共生 ()</p> <p>B グローバル社会 … 相互依存 () / 情報化 ()</p> <p>C 地球的課題 … 人権 () / 環境 (○) / 平和 () / 開発 ()</p> <p>D 未来への選択 … 歴史認識 () / 市民意識 () / 社会参加 (○)</p>		
単元目標	<ul style="list-style-type: none"> ・日本とパラグアイを例に、ごみ問題は世界の問題であること、ごみ問題解決に向けて様々な努力が行われていることに気づく。 ・自分たちの生活を振り返り、ごみ問題解決に向けてできることを考え伝え合う。 		
単元の 評価規準	知識および技能	<ul style="list-style-type: none"> ・ごみ問題は、世界共通の課題であり、そこに自分も関わっていることに気づき、自分事として考えることができる。 	
	思考力、判断力、 表現力等	<ul style="list-style-type: none"> ・パラグアイや日本の活動から、ごみを減らすための具体的な行動を考えることができる。 	
	学びに向かう力、 人間性等	<ul style="list-style-type: none"> ・話し合いや書く活動に進んで取り組み、自分の思いを伝え、友だちの考えを受け入れることができる。 	
単元設定の 理由・意義 (児童生徒 観、指導観、 教材観から)	<ul style="list-style-type: none"> ・本学級の児童は、動物や自然を大切にしたい気持ちを持ち、学級で育てていたヘチマや花などの世話を一生懸命している。しかし食べ物や物に対しては、関心が薄い児童が多い。そこで、ごみ問題について考え、自分たちの生活を見直すきっかけをつくっていききたい。 ・本実践では、海外研修で体験したことを導入で子どもたちに伝えていき、世界と自分とのかかわりを実感できるようにしていく。パラグアイのカテウラ地区を扱う時は、子どもたちがカテウラ地区に対して消極的なイメージをもたないよう、音楽団の活躍を初めに紹介し、現実について伝える。日本が抱えているごみ問題・解決に向けての努力について考える時は、クイズを使って楽しみながら学べるようにしていく。 ・本時では、カテウラ地区のリサイクル・オーケストラの努力について扱う。子どもたちにとって、変えたいところがたくさんあるカテウラの人々が、力を合わせて明るく生きていくすばらしさを子どもたちに味わわせたい。そこから、どんな未来にしたいか・そこに向かってできることを考え、自分たちも世界に関わりできることがあることを感じさせたい。 		

[単元計画 (全 4 時間)]

時	ねらい	学習活動	資料など
1	日本とパラグアイ、世界では、ごみ問題が課題となっていることを知る。	<ul style="list-style-type: none"> ・国のいい所見つけた！(日本とパラグアイ) パラグアイと日本のいいところを交流する。 ・どちらの国でも困っていることは…「ごみ問題」 共通課題の一つとして「ごみ問題」があることを知る。 ・日本では、どれぐらいごみが出ているの？【クイズ】 ・私たちの今日の給食の残飯は、Og！ ・このままごみが増え続けると…どうなる？【派生図】 ごみが増えるとどうなるのか、考える。 ・今日の振り返り 	<ul style="list-style-type: none"> ・日本・パラグアイの写真 ・日本・パラグアイのごみの写真 ・給食の残飯の写真
2	カテウラ音楽団の活動を知り、彼らが生活している環境の現実を知る。そこから、自分たちが変えたいと思うことを話し合う。	<ul style="list-style-type: none"> ・この写真の、ここが好き！ パラグアイの写真を見て、いいなと思った所を交流する。 ・カテウラ音楽団って？ カテウラ音楽団の演奏を聴き、感想を交流する。 ・カテウラ地区の現実 写真を紹介しながら、どんなところなのかを知る。 ・変えたい所は、どこかな？ カテウラ地区の変えたいところを交流する。 ・今日の振り返り 	<ul style="list-style-type: none"> ・パラグアイの写真 ・カテウラ音楽団の映像 ・カテウラ地区の写真
3	日本が抱えているごみ問題を知り、今行われている・これから行われる取り組みを学ぶ。そこから、自分にできることを考える。	<ul style="list-style-type: none"> ・こんな町に住みたい！ ・日本のごみ問題って？(クイズ) 「食品ロス」「最終処分場の寿命」について ・こんな取り組みをしている！(フォトランゲージ) 「ネスレ キットカット」「日清カップヌードル」 「農林水産省」「SDGs」 ・わたしたち・ぼくたちにできることって何？ (今日の振り返り) 	<ul style="list-style-type: none"> 「ネスレ キットカット」「日清カップヌードル」 「農林水産省」 「SDGs」
4 本時 授業 参観	カテウラ音楽団を作った背景を知り、創立者や地域の人の想いに寄り添う。そこから、どんな未来にしたいか・そこに向かってできることを考える。	<ul style="list-style-type: none"> ・カテウラ音楽団は、こうしてできた！ 絵本の読み聞かせをし、感想を交流する。 ・ぼくたち・わたしたちの未来願望図 こんな世界になったらいいな！ ・できることを考えよう！ 自分で お家の人と一緒に 大人になったら 	<ul style="list-style-type: none"> ・絵本 「スラムにひびくバイオリンーゴミを楽器に変えたりサイクル・オーケストラ」

[本時の展開 (4時間目)]

ねらい	・カテウラ音楽団を作った背景を知り、創作者や地域の人の想いに寄り添うことができる。そこから、どんな未来にしたいか・そこに向かってできることを考えることができる。		
過程・時	教師の働きかけ・発問および学習活動	指導上の留意点(支援)	資料
5	○ 今までの学習の振り返りを行う。	絵本を読む前に、今までどのような学習をしたのか、振り返りの時間をとる。	
20	○ 「スラムにひびくバイオリン」の絵本を読む。 絵本を読む前に、読んだ後に感想を聞くことを伝える。 ・話を聞いて、どう思いましたか。 子どもたちの感想を、気持ち別にグループに分けて板書をしていく。 (例) 「いいな」「すごい」「おどろき」など	絵本の絵が見やすいように、プロジェクターで絵を映して読み聞かせを行う。 ・途中で、班で回し読みをして、考えるヒントを友だちからもらえる時間をとる。	・絵本 「スラムにひびくバイオリンーゴミを楽器に変えたりサイクル・オーケストラ」
15	○ ぼくたち・わたしたちの未来願望図を作ろう！ ・こんな世界になったらいいな、こんな世界になってほしくないな、を書き、そこに向かうため・向かわないためにできることを考える。	・途中で、班で回し読みをして、考えるヒントを友だちからもらえる時間をとる。	
5	○ できることを考えよう！ ・「自分で」「お家の人と」「大人になったら」の3つの項目に分けて考える。		
評価規準に基づく 本時の評価	<p>「知識・技能」 ごみ問題について、今どんな課題があるのかを振り返ることができた。 「スラムのひびくバイオリン」の絵本から、素晴らしいところを見つけることができた。</p> <p>「思考力・判断力・表現力」 「ぼくたち・わたしたちの未来願望図」では、自分の願う世界・願わない世界に向けた行動を考えることができた。 「できることを考えよう！」では、具体的に自分ができることを考えることができた。</p> <p>「学びに向かう力・人間性」 「ぼくたち・わたしたちの未来願望図」「できることを考えよう！」での回し読みで、友だちの考えのよいことを認め、自分の思いも伝えることができる。</p>		

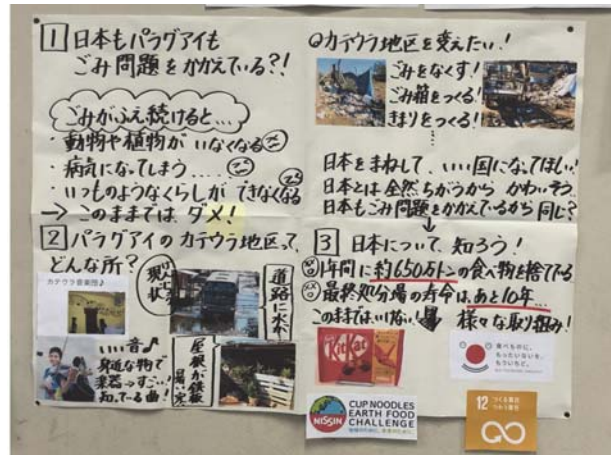
〔総括・まとめ〕

学習方法および外部との連携	<ul style="list-style-type: none"> ・子どもたちが楽しみながら学習できるよう、クイズを頻繁に活用した。その他にも、派生図やフォトランゲージなど様々な手法を取り入れ、子どもたちが主体的に学べるように工夫した。
学校内外で国際理解教育・授業実践を広める取り組み	<ul style="list-style-type: none"> ・総合の授業内容を学年で統一することにより、同じ学年で同じ内容の指導ができるようにしている。 ・授業参観で、国際理解教育の授業を行うことにより、保護者にも今の世界の問題について知って、考えていただく機会をもつ。
苦労した点	<ul style="list-style-type: none"> ・現地研修で一番心の残ったカテウラ地区の様子を扱うことを決め、授業を考えていたが、どのように子どもたちにカテウラ地区の現実を伝えていくのかに悩んだ。今回の研修で学んだ「肯定的に出会う」ということを念頭に置いて、研修中の参加者の発言等を振り返り、自分の普段の言葉遣い等も見直ししながら前向きな授業の組み立てを行うことができた。
改善点	<ul style="list-style-type: none"> ・今回の実践では、総合的な学習の4時間しか割り当てられず、じっくりと子どもたちに考えさせたり、考えを交流させたりする時間が取れなかった。年間計画を見直し、より深く考えさせる授業の組み方を考えていきたい。
成果が出た点	<ul style="list-style-type: none"> ・社会科の学習で「ごみ」について学んでいたため、社会科の内容とつながりをもたせながら、学習を進めることができた。また今ある課題を扱ったことにより、授業以外でも「ごみ問題」を意識する児童が増え、「給食の残飯ゼロを目指そう！」や「ものは大切に使おう！」などと子どもたち同士で声をかけるようになった。
学びの軌跡 (児童生徒の反応、感想文、作文、ノートなど)	<ol style="list-style-type: none"> ① このままごみが増え続けると未来がごみでいっぱいになってしまう 食料が買えないし、病気になって死んでしまう ② 日本のまねをして、いい国になってほしいな 日本とは全然ちがう生活でかわいそう ③ 日本もよくないなあ もっとぼくたちで、いい国にしていきたい ④ 今わたしにできることは、必要なもの以外は買わないこと ご飯を残さないようにする。
授業者による自由記述	<ul style="list-style-type: none"> ・一回目の授業から、「給食の残飯をゼロにしよう！」というクラスの雰囲気が出来てきた。1年生の時から給食が課題であった学年だったため、給食が苦手な児童が多い。苦手な児童は「自分で決めた量は食べきる」を目標に、がんばっている。 ・本校から、今年度青年海外協力隊としてエチオピアに派遣されている教員が在籍している。定期的にエチオピアの情報が通信として発信され、クラスで紹介をして通信を教室に掲示している。教室環境の工夫として、様々な国に触れる機会を大切にしている。
単元構想・実施における参考資料等	<ul style="list-style-type: none"> ・私たちが目指す世界子どものための「持続可能な開発目標」 ・「食品ロスの大研究」(PHP 研究所)

[学びの軌跡 (児童生徒の反応、感想文、作文、ノートなど)]



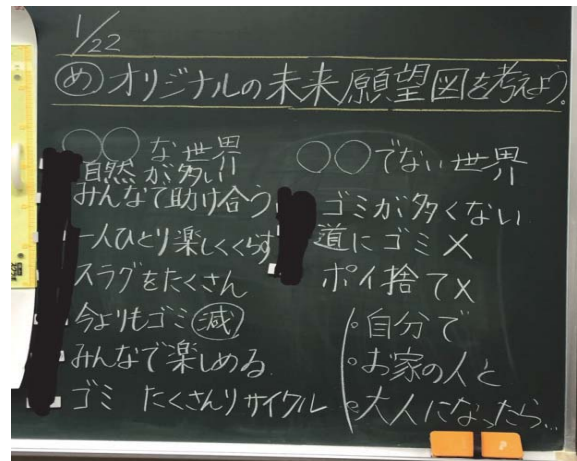
▲ リサイクル・オーケストラの楽器



▲ 学びのまとめ(第1回～第3回)



▲ 様々な取り組みの合言葉について

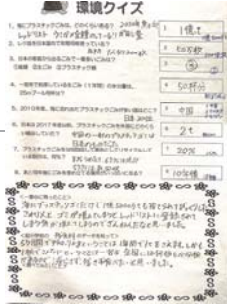
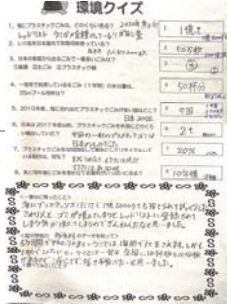


▲ 子どもたちが願う世界・願わない世界

We are all one!! ～SDGs への取り組みを通して～

学校名	愛知県一宮市立起小学校		授業者氏名	柴田 英子
対象学年 (人数)	小学校6年生(77名)		実践年月 (時数)	2019年 10月～12月 (15時間)
担当教科等	全科			
単元名 (活動名)	国際理解 We are all one!!, 未来がよりよくあるために (国語)			
実践する 教科・領域	総合的な学習の時間, 国語			
学習領域	<p>A 多文化社会 … 文化理解 () / 文化交流 () / 多文化共生 ()</p> <p>B グローバル社会 … 相互依存 () / 情報化 ()</p> <p>C 地球的課題 … 人権 (○) / 環境 (○) / 平和 (○) / 開発 ()</p> <p>D 未来への選択 … 歴史認識 () / 市民意識 () / 社会参加 ()</p>			
単元目標	<ul style="list-style-type: none"> ・世界の課題を自分の問題として捉えることができるようになる。 ・自分の意見を互いに伝え合い、正解だけではなく、最善解を考えようとする。 ・世界の課題を主体的に解決しようとする姿勢を養う。 			
単元の 評価規準	知識および技能	・世界の課題について知り、児童自身も関わっていることに気づき、自分の問題として捉えることができるようになる。		
	思考力、判断力、 表現力等	・自分が考えたことを互いに伝え合い、世界の課題解決のために何をすることがよいか、最善解を考えることができる。		
	学びに向かう力、 人間性等	・世界の課題を主体的に解決しようと、他の児童と協力して計画を立て実践することができる。		
単元設定の 理由・意義 (児童生徒 観、指導観、 教材観から)	<p>・誰一人取り残さない社会の実現(SDGs)の考えを元に、国際理解教育に取り組むことは学校教育において必要不可欠であると考えている。現在の国際理解教育の状況は、各教科、道徳、特別活動などのいずれを問わず推進されるべきものであるにも関わらず、異文化について知る段階で留まり、単に知識理解に終わっている場合が多い。そのため、体験的な学習や課題学習などをふんだんに取り入れることによって国際理解教育で育まれる「実践的な態度や資質、能力」の育成を図りたい。</p> <p>・本学級の児童は、グループ活動やペア活動を授業中に取り入れても、自分の考えを伝えたり、友達の意見を聞き自分の考えを深めたりする自主的な姿はあまり見られない。事前アンケート(学びの軌跡ページ参照)からは、国際協調の意識が希薄であることが分かった。</p> <p>・昨年度の国際理解教育では、6年生を対象に「世界がもし100人の村だったら」を用いて授業実践を取り組んだ。課題としては、その場限りの学習で終わってしまい児童の行動の変容に繋げることができなかったことがある。そこで今年度は、誰一人取り残さない社会の実現(SDGs)の考えを元に、児童の行動の変化に繋がるような授業展開を実践していきたい。今年愛知県は、SDGs未来都市として指定され、様々な企業の取り組みが見られるようになった。このSDGsというより具体的な目標を取り入れることにより、世界の様々な課題について学び、児童の興味を高め、具体的な行動の変容とつなげたい。</p>			

【単元計画（全15時間）】

時	ねらい	学習活動	資料など
1	・環境状況を知り、環境問題を自分の問題だと捉えられるようになる。	①環境クイズに取り組み、ごみの現状を知る。 クイズ後にワークシートの裏面にある環境(プラスチックごみや絶滅危惧種など)についての解説を読む。 解説を読んで一番自分が心に残ったことに線を引き、グループで共有する。 ②起小学校の残食料について知る。 最初に残食料の表の数値のみ見せ、何の表かを考える。感想をワークシートに記入し、共有する。	環境クイズ (ワークシート) パワーポイント 残食料データ 
2	・環境を守るために自分には何が出来るかを考えて行動できるようにになる。	①ゴミ問題が解決されずに、このまま進んでしまった未来を想像する。書き出した意見の中で最悪の帰結に○をつける。【ブレインストーミング】 ②理想の世界と自分ができることについて考える。 企業の環境保全の取り組みを知る。 ワークシート左半分に理想の未来について書き、右側半分に自分ができることについて書く。	
3 本時	・世界の貧困状況や世界の子どもの様子を知り、自分たちの住む日本も貧困の構想に加担していることに気づく。	①世界の子どもの写真を見て、絶対的貧困の様子について知る。【フォトランゲージ】 ②負の連鎖カードを使って貧困のイメージをより具体的にし、貧困の構想に気づく。 ③貧困から脱却した音楽団について知る。 初めは、カテウラ音楽団の演奏を音のみで聴き、想像する。その後映像ありで聴き、カテウラ音楽団の背景を知る。	貧困クイズ (パワーポイント) パラグアイカテウラ地区や日系農家の写真 Save the children 写真 負の連鎖カード/JICA
4	・貧困という課題について自分たちができることは何かを考え行動できるようにになる。	①カテウラ音楽団の絵本の読み聞かせを聴く。環境に恵まれなくても、身近な物を最大限に活用し、生きる姿を見て感じたことを話し合う。 ②自分が貧困解決のためにできることについて考える。【ブレインストーミング】	絵本
5	・ちがいのちがいについて気づき、あると危険な違いこそが人権侵害であることに気づく。 ・世界の人権侵害の例を知り、人権侵害は、身近な問題であることに気づく。	①パラグアイと日本の違いについて知り、文化の違いに気づく。 ②日本の社会にある違いについて、あってよい違いとあると危険な違いについて分ける。あると危険な違いこそが、人権侵害につながることに気づく。 ④世界の人権侵害の例を知る。【フォトランゲージ】	パラグアイの写真 (パワーポイント) ちがいのちがいについての資料 Save the children 写真
6	・人権が守られていない原因を考え、人々の意識によるものだと気づき、人権が守られる社会をつくらうとする行動意欲を高める。	①人権侵害が起きる理由について考える。【ブレインストーミング】 ②他のグループの意見を見て回り、自分のグループに無かった意見に☆マークをつける。【ランキング】 ③人権が守られる理想の世界を考える。	
7~13	・世界の課題を解決するためには、何が出来るか最善解を考え、実践に移す。	①よりよい未来になるために、自分の考えを書き、互いに考えを深める。(国語の授業) ②学習発表会に向けて発表する内容を考える。自分たちが大切だと思うことを多くの人に理解してもらうために伝える方法や内容を考える。	今まで使ったワークシート
14	・本当の豊かさについて考え、自分を見つめなおす。 ・日本人のよさについて実感する。	①パラグアイの日系社会について学び、豊かさの意味について自分の生活を振り返りながら考える。 ②パラグアイで活躍する日本人の活動について知る。 ③豊かさについて考える。	パラグアイの写真 (パワーポイント)
15	・国際理解について自分で価値づけすることで、国際協調の気持ちを持続する。	①今までの学習を通して、国際理解を学び大切だと思うことを考える。【ブレインストーミング】 ②自分にとっての国際理解とは何かを定義する。	フィリピンの写真 (パワーポイント)

[本時の展開（3時間目）]

ねらい	・世界の貧困状況や世界の子どもたちの様子を知り、自分たちの住む日本も貧困の構想に加担していることに気づき、国際協調への意識を高める。		
過程・時	教師の働きかけ・発問および学習活動	指導上の留意点(支援)	資料
導入 3分 展開 12分	1. 貧困クイズに取り組む。 2. 世界の子ども達の様子を知る。 (1) グループに分かれ、3枚の世界の子どもたちの写真から、写真の児童が何をしているか、その子どもの生活状況について予想し話し合う。 (2) 写真の裏にある説明を読み、ワークシートにどんな気持ちになったか、何を思ったかを記入。 (3) グループ内で感想を共有し、クラス全体で写真の説明をし、感想を伝え合う。	写真を通して児童自ら貧困の現状について理解できるようにする。 各グループに別々の写真を配付。 このワークシートで書いた内容が、国語の単元の意見 or 根拠となる出来事に繋がる。	スライド11枚 パラグアイのカテウラ地区や日系農家の写真 写真 (Save the children)
10分	3. 絶対的貧困の構想の原因を知り、自分たちもその構想に関わっていることに気づく。 (1) 貧困の構想・原因を理解するために、貧困の連鎖カードを並べる。貧困には、様々な背景・様子があることに気づく。	絶対的貧困に陥ると外部からの助けがないと中々貧困の連鎖から抜け出すことは難しいことを理解する。	貧困連鎖カード
15分	4. カテウラ音楽団の活躍について知る。 (1) カテウラ音楽団の演奏を聴く。(映像なし・曲のみ) どんな音楽団か想像する。 ごみで作られた楽器を見る。 (2) カテウラ音楽団の活動について知り、曲を映像ありで聴く。 ごみで楽器を作り、寝る間を惜しんでお金を得るために働き、そのような状況でも音楽を続けたいと頑張っている姿を見ていく人の姿を見る。 (3) 環境に恵まれなくても、身近なものを最大限に活用し生きる姿を見て感じたことを話し合う。	パラグアイの貧困地区から脱却できた好事例を知ること、自身の生き方の見直しや、貧困の解決の手立てに繋げる。 ゴミから楽器が生まれたように、身近なものを利用するという考えをもとに貧困の解決策について考える。	パラグアイのカテウラ音楽団の動画
まとめ 5分	5. 行動につなげる。 (1) 貧困のために自分たちができることを考える。		
評価規準に基づく 本時の評価	フォトランゲージという手法を用いた結果、衝撃を受けた写真はそれぞれ違うけれども、20人を超える児童が、ワークシートにどうにかしたいという気持ちの欄に○をつけていた。どうにかしたいという欄に○をつけなかった児童の中には、腹が立つという欄に○をつけた児童が2人、理由として何もできない自分に腹が立つと書いていた。気持ちを書く欄に募金だけでもしたいと書いた児童がいた。また、貧困の連鎖カードを用いることで、児童の中で貧困というイメージがより具体的になり、何とかしたいという言葉が出てきた。このことから、自分と年齢が近い子どもの写真や現状を提示することは、児童の国際協調への意識を高めることができたといえる。		

〔総括・まとめ〕

学習方法および外部との連携	<ul style="list-style-type: none"> ・参加型学習活動を基にした意見交流では、発言が苦手な児童でも自分の考えを示すことができていた。児童に付箋を渡すと、たくさん意見を出そうとする姿勢が、特に見られた。 ・人権をテーマにした学習では、聴覚障がい者の方に授業を見ていただき、児童に向けてお話をしていただいた。 ・国際理解教育ファシリテーターの方に、異文化交流のために大切なことは何か、参加型で授業を2時間していただいた。児童は、異なる国同士の人になりきることで、文化の違いから生まれる気持ちを体験することができていた。
学校内外で国際理解教育・授業実践を広める取り組み	<ul style="list-style-type: none"> ・校内の職員全員に指導案を配付し、来年度は4年生～6年生で系統的に国際理解の人権環境貧困について学ぶことができるように提案した。 ・一宮市国際理解部に実践報告書の提出、一宮市研究論文として実践報告をした。
苦勞した点	<ul style="list-style-type: none"> ・個人のまとめとして、人権が守られる理想の世界を考えた。事前に人権が守られない理由を考えたので、今まで考えてきたその反対が、人権が守られる理想の世界になるので、すぐに書けるかと思っていたが、児童の手が止まってしまった。児童の反応が自分の予想と異なるものが返ってきたとき、児童の実態に合わせて臨機応変に授業展開をすべきであった。
改善点	<ul style="list-style-type: none"> ・人権の学習では、時間も限られた中であつたため、教師主導型となつてしまい、児童の対話的な様子が見られなかった。自分の授業のねらいを達成することに意識を向けすぎてしまったことが反省点である。道徳と関連付けて、国際理解で人権の学習をする際に、その内容に合わせた道徳の題材を選び、児童が話し合う時間を確保していきたい。 ・国際理解の学習を通して、児童主体的なユニセフ募金とペットボトルキャップ回収の活動に繋げることができたが、時間が経つにつれ、活動の本来の趣旨が児童の中で薄れてしまい、国際協調の気持ちを継続させることが難しかった。児童自ら取り組んだ活動を、全校に伝えることで、国際協調の気持ちを高めたい。
成果が出た点	<ul style="list-style-type: none"> ・アンケートを見比べると、他国で困っている人を助けたいと思う気持ちが、「思う」「どちらかといえばそう思う」が合計100%になった。児童の他国を助けたいという国際協調という感心を高めることができた。また、「世界のために自分がしていることはありますか」という質問に「思う」「どちらかといえばそう思う」と答えた児童は、56%から75%になった。参加型学習を通して、ペットボトルキャップ回収などの具体的な行動の変容におおよそつなげられた。
学びの軌跡 (児童生徒の反応、感想文、作文、ノートなど)	<p>【児童の変容】※○(「貧困の連鎖カード」並べ変え直後の感想)→(「議論」後の感想)</p> <ul style="list-style-type: none"> ・○ありえない。この負の連鎖が続くと思うと、未来が心配。何とかしたい。 →自分と同じくらいの年の子が学校に行けていないなんて不安でいっぱい。少しでも字の読み書きができるように本などを寄付したい。 ・○1つの問題が起きると、全てが繋がってしまい、最後は悲しい結果になる。 →本当に私達は楽に生きさせてもらっている。少しでも良い生活ができるよう募金をしたい。
授業者による自由記述	<ul style="list-style-type: none"> ・授業時間数が限られている状況で、国際理解教育に時間を十分確保するのは厳しいかもしれない。しかし、学校の行事や学習内容を国際理解という視点で見直すと、深く関わりあっている内容が多いと分かった。来年度は、年度初めにSDGsという視点からカリキュラムを見て、その学年に合わせた国際理解教育を実施したい。
単元構想・実施における参考資料等	<ul style="list-style-type: none"> ・ちがいのとびら/発行大阪府府民文化部人権室 ・国際理解教育実践資料集/JICA ・プラスチックを取り巻く国内外の状況/環境省

【学びの軌跡（児童生徒の反応、感想文、作文、ノートなど）】

理想の世界	自分ができること
①おちついた生活	①食べ物をすきらい無しにのこさずたべる。
②キレイでよこれていぬい	②自分たちで環境をよくする
③人がいえる	③自然をたいせつにする。
④食べ物がある。	④お金をあたくかいせすたいせにする。
⑤家にすめる	
⑥死なない	

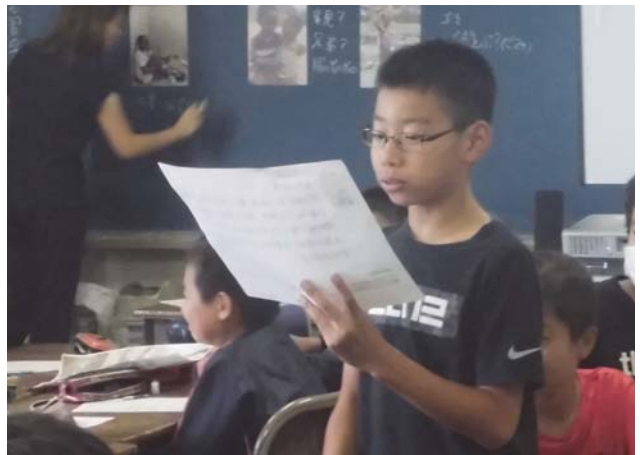
▲ 第1時 環境クイズ後ワークシート



▲ 第2時 ゴミ問題がこのまま進んでしまったら？
【ブレンストーミング】



▲ 第3時 貧困【フォトランゲージ】



▲ 第3時 貧困【フォトランゲージ】

見た写真→ 6

かなしい	ふしぎだな	苦しい(つらい)	うれしい
おどろいた	よかった	不安だな	納得できない
腹がたつ	どうにもできない	どうにかしたい	(かわいそう)

<理由>

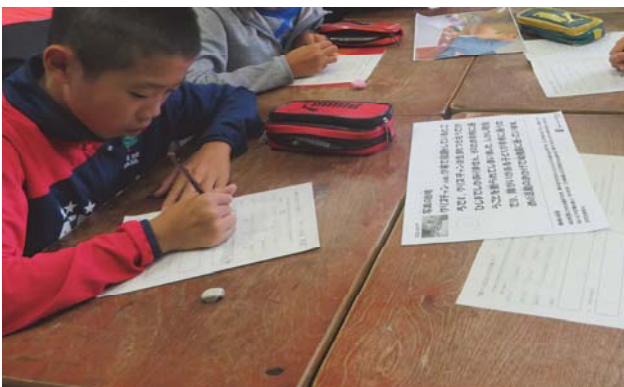
同じ年なのにこんなに成長の差がはげしく、とても大変そう、かわいそうと思った。同じ年→びっくりした。
3人に1の子が栄養不足

2. 負の連鎖から何を感じたか？感じたことを書こう

▲ 第3時 フォトランゲージ後 ワークシート



▲ 第3時 貧困 負の連鎖カード



▲ 第5時 人権 フォトランゲージ

2. 人権が守られる理想の世界♪

- みんなお金があり、自由にできる。
- 一人一人が差別もなく平等になれる。
- いじめをなくす。 → 思いやりのある行動
- 食料が十分にとれる → 世界の関係
- 世界の人口のふつづを同じにする。 → 自由が多い国が集まって輸入をする
- 差別が○ → 差別がある人は差別があたります
- 差別が× → 食料が十分にあたえられていない国へ

↑ 不自由だからと決めつけない

▲ 第6時 人権 人権が守られる理想の世界

<人権が守られる理想の世界♪>

・全ての人が相手の気持ちを考え、いいか悪いかを判断し、考えて行動する。戦争は自分の国を守ろうとする人が大半だと思うが、自分の国の人権を守ろうとするかわりに、相手の国の人権を否定してしまう事があると思う。自分の国の人権を守ったとしても、相手の国の人権も守らないと本当に人権を守ったといえない。ほくは、そんなことが起きない世界が理想の世界だと考える。そしてこれは、自分たちが実現しないとイケないことだと思う。

・「小さな世界」の曲の歌詞のように、手を取り合い笑ったり泣いたりするのも一緒にやれるような世界。私が大人になったら貧困で苦しんでいる人々がいる国に行ってみたい。その国の人々のことを色々な人に教えてあげて、少しの人でもいいから、その人たちを助けてあげよう守ってあげようと思う人と貧困で苦しんでいる人達のところにアンパンマンになったつもりで助けに行き守ってあげられる世界。

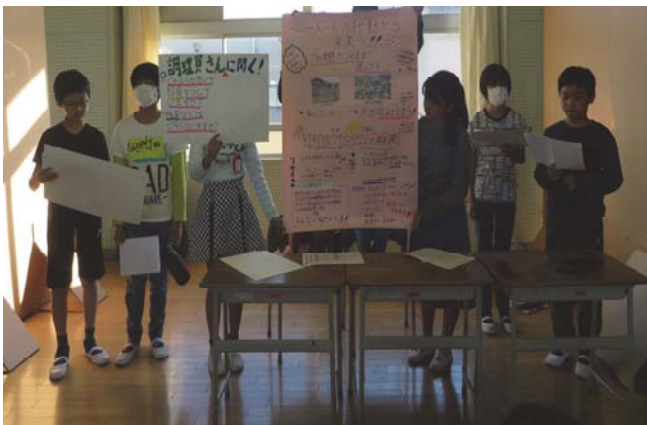
▲ 第6時 人権と自分の関心のあるテーマについて、考えを深めていった児童のワークシート



▲ 第8時 国語の授業 未来がよりよくあるために



▲ 調理員さんにインタビュー



▲ 学習発表会の練習



▲ 第15時国際理解を学び大切なことは？
【ブレンストーミング】



▲ 人権週間で全校に向けて発表



▲ ペットボトルキャップ回収活動の様子

世界の国々について知ろう

学校名	愛知県名古屋市立山田小学校		授業者氏名	長谷川 義洋
対象学年 (人数)	特別支援学級: 小学2・3・4・6年生(6名)		実践年月 (時数)	2019年10月～12月 (6時間)
担当教科等	全科			
単元名 (活動名)	世界の国々について知ろう			
実践する 教科・領域	道徳科・図画工作科・学級活動			
学習領域	A 多文化社会 … 文化理解 (○) / 文化交流 () / 多文化共生 () B グローバル社会 … 相互依存 (○) / 情報化 () C 地球的課題 … 人権 () / 環境 () / 平和 (○) / 開発 () D 未来への選択 … 歴史認識 () / 市民意識 (○) / 社会参加 ()			
単元目標	・世界のことをもっと知りたいという思いをもつことができる。 ・世界の国旗や国歌を大切にしようとする思いをもつことができる。 ・SDGsについて知ることができる。			
単元の 評価規準	知識および技能	・SDGsについて知ることができる。(学級活動) ・世界の国と日本を比べて互いの良さに気付くことができる。(学級活動)		
	思考力、判断力、 表現力等	・世界のそれぞれの国旗の意味について考えることができる。(道徳科) ・パラグアイの国土を塗り絵と版画で表現することができる。(図画工作科)		
	学びに向かう力、 人間性等	・自分の好きな国旗を選び、国旗の意味を調べることができる。(学級活動) ・SDGsについて知り、自分でできることを考えることができる。(学級活動)		
単元設定の 理由・意義 (児童生徒 観、指導観、 教材観から)	・本学級は、2年生2名・3年生2名・4年生1名・6年生1名の計6名のクラスで構成されている。子どもによっては、学習する教科と学習しない教科があるため、複数の教科で実践した。 ・各教科において、子ども一人一人の目標が異なるため、上記に記載した単元での目標は、一部のみを抜粋した。 ・指導にあたっては、パラグアイに行った経験を活かし、写真や動画を活用してどの子どもにとっても分かりやすい内容となるようにした。			

[単元計画 (全7時間)]

時	ねらい	学習活動	資料など
1	パラグアイについて関心をもつことができる。(図画工作科)	1 日本全土の地図を見せる。 2 パラグアイ全土の地図を見せる。 3 パラグアイの国土を画用紙に印刷したものを配り、塗り絵をする。	・日本全土の形がわかる地図 ・パラグアイ全土の形がわかる地図
2	パラグアイについて関心をもつことができる。(図画工作科)	1 パラグアイの国土の形に画用紙を切り抜き、版を作る。 2 版を紙に貼り付け、インクをつける。 3 できた版画を色画用紙に貼る。	
3	パラグアイについて知ることができる。(学級活動)	1 パワーポイントのスライドを見ながら、パラグアイの国の概要を知る。【クイズ形式】 2 パラグアイの写真と日本の写真を9枚ずつ見せ、どちらの国の写真か考える。【フォトランゲージ】 3 パラグアイの写真を使って、ビンゴゲームをする。【ビンゴ】 4 ニヤンドウティの本物をコースターにして、マテ茶を飲む。	・世界地図 ・パラグアイの国旗 ・パラグアイの写真と動画(パワーポイント) ・マテ茶
4	世界の国々について知ることができる。(学級活動)	1 パラグアイ以外の国について知る。 2 自分が好きな国旗を選ぶ。 3 コンピュータを使って、自分が選んだ国旗の国について概要を調べる。	・世界地図 ・パラグアイの国旗 ・国旗がわかる本
5 本時	世界のどの国にも国旗や国歌があることや、込められている意味を知ることを通して、国旗や国歌を大切にしようとする心情を育てる。(道徳科)	1 世界のどこの国の国旗か考える。 2 ペアで国旗と国旗の意味を考える。 3 パラグアイの国歌を聞く。 4 日本の国歌を聞く。(日本の入学式の場面) 5 入学式・卒業式で国歌や国旗があることを確認する。	・国旗を印刷したもの ・国旗と国旗の意味を考えるワークシート ・パラグアイと日本の国歌を歌っている動画
6	SDGsについて知ることができる。(学級活動)	1 SDGsについて知る。 2 SDGsゲームをする。 3 本の読み聞かせを行う。	・パワーポイント ・SDGsのアイコンをラミネートしたカード
7	SDGsについて日本の現状を捉え、自分ができることを見つけることができる。(学級活動)	1 SDGsについて、今の日本の現状について知る。 2 自分でできることについて考える。	・パワーポイント

[本時の展開（5時間目）]

ねらい	・世界のどの国にも国旗や国歌があることや、込められている意味を知ることを通して、国旗や国歌を大切にしようとする心情を育てる。		
過程・時	教師の働きかけ・発問および学習活動	指導上の留意点(支援)	資料
2分	1 学習のめあてを知る。 <div style="border: 1px solid black; padding: 5px; margin-top: 10px;">学習のめあて: 世界の国の国旗と国歌について考えよう。</div>	・学習のめあてを板書し、みんなで確認する。	
5分	2 世界の国旗クイズをする。 <div style="border: 1px solid black; padding: 5px; margin-top: 10px;">発問: どの国の旗でしょう。</div> ・日本 ・パラグアイ ・インド ・ドイツ ・アメリカ ・アイルランド ・フィリピン ・イタリア ・ニュージーランド	・9つの国の国旗を A4 サイズの紙にカラー印刷をして、どの国の国旗かを答える。	国旗 (A4 サイズに印刷したもの)
10分	3 それぞれの国旗には、意味や思いがあることを知る。 <個別のワークシート> A 児: 国旗を見て、国名を書かせる。 B 児: T2支援のもと、国旗と国旗のマッチングを行う。 C 児と D 児: ペアで国旗の意味を考える。 E 児と F 児: ペアで国旗の意味を考える。		個別のワークシート
5分	4 パラグアイの国歌を聞く。 <div style="border: 1px solid black; padding: 5px; margin-top: 10px;">発問: パラグアイだけじゃなくて、日本にも国歌があることを知っていますか。</div>	・パラグアイに国歌があることを確認する。	動画
10分	5 日本の国歌「君が代」について知る。	・日本人も国旗と国歌を大切にしている大切な行事では掲げたり、歌ったりすることを伝える。	君が代の歌詞
5分	6 入学式の国歌を歌っている場面を動画で見る。 <div style="border: 1px solid black; padding: 5px; margin-top: 10px;">発問: どのように国歌を歌うといいかな。</div>		入学式の動画
5分	7 日本の国歌「君が代」を歌う。	・国旗や国歌を大切にすることの気持ちの表し方として、姿勢を正すことを伝える。	国歌の CD
3分	8 学習のまとめをする。		
評価規準に基づく本時の評価	A 児・・・国旗を見て、教師の声掛けのもと国名を書くことができる。【ワークシート】 B 児・・・世界の国旗を見て、マッチングができる。【ワークシート】 C 児・D 児・E 児・F 児・・・国旗と国旗に込められた意味を考えることができる。【ワークシート】 個別にワークシートを作成し、それぞれ取り組んだ。		

〔総括・まとめ〕

学習方法および外部との連携	<ul style="list-style-type: none"> ・本学級には、異学年の子どもがいるため、どの子どもも理解できるように配慮した。個別のワークシートを作成したり、視覚で捉えることが容易にできるようにパワーポイントやカラー印刷した写真を活用したりするように心がけた。 ・学習者にとって参加型の授業になるように、活動したり、対話したりするアクティビティを入れるようにした。
学校内外で国際理解教育・授業実践を広める取り組み	<ul style="list-style-type: none"> ・本学級で本時に実践した内容は、授業参観の日に行い、保護者の方にも見ていただいた。授業の最後には、子どもと一緒にマテ茶を飲んでいただいた。 ・5年生が総合の学習で「国際理解教育」を行っているので、教師海外研修で学んだこととSDGsについて参加型の授業を実践した。 ・ワールドクラブ(4年生～6年生)の子どもたちに、参加型の授業を行った。 ・図画工作科で作った作品(パラグアイの国土を版画で表現したもの)を下駄箱の掲示板に掲示した。 ・JICA 中部「開発教育・国際理解教育実践フォーラム2020」に参加し、参加者に実践の報告を行った。
苦労した点	<ul style="list-style-type: none"> ・異学年の子どもがいるため、一斉に授業を進めることがなかなか難しいことがあった。T2の先生がいないとなかなか参加型の授業を行うのが難しかった。 ・子どもによって教科内容が異なるため、1つの教科で実践を進めていくことが難しかった。
改善点	<ul style="list-style-type: none"> ・パワーポイントや写真、動画など視覚で捉えられる教材がないとなかなか難しいのでパソコンやプロジェクターは必須だと感じた。 ・参加型の授業を行うときは、参加者の実態をしっかりと把握しておく必要があった。特に、ペアで活動するときやグループで活動する時の人間関係を配慮しておく必要があるときがある。
成果が出た点	<ul style="list-style-type: none"> ・本学級の子どもにとっては、パラグアイやSDGsの話や授業がとても新鮮だったようで、意欲的に参加してくれた。世界のことに興味・関心をもってくれた。 ・いろいろな人や国、食べ物があることを知り、日本の良さや課題に気づくことができた。 ・自分も授業をすることで、新たな発見がたくさんあり、授業を重ねるごとに学びを深めることができた。また、普段関わることのない子どもたちと関わることができた。
学びの軌跡 (児童生徒の反応、感想文、作文、ノートなど)	<ul style="list-style-type: none"> ・世界には、日本以外にたくさんの国があることを知った。また、国旗や国歌があることも知った。世界には、いろいろな人がいて、いろいろなやり方がある、新たな発見があった。 ・実際にマテ茶を飲み、笑顔で感想を伝え合うことができた。五感を使った授業は、特に子どもたちの反応が良かった。 ・SDGsを知ったことで、SDGsのマークを見つけると教えてくれた。また、学校生活のあらゆる場面でSDGsを意識した発言が出るようになった。
授業者による自由記述	<ul style="list-style-type: none"> ・五感で感じた教師海外研修は、本当に有意義な時間を過ごすことができた。いざ授業をすると、伝えたいことが多すぎて、情報を精選することが難しかった。紙面だけでは、なかなか伝わらないが、教師海外研修を通してたくさんの人と出会い、刺激をもらった。研修の中で揺さぶられた気持ちを大切にしていきたい。違いを認め合い、誰もが楽しい学校生活を送ることができるように教師として頑張っていきたい。人と人とのつながりを大切にしていきたい。SDGsの目標を2030年までに達成することができるように、自分自身も行動していきたい。
単元構想・実施における参考資料等	<ul style="list-style-type: none"> ・「共につくる 私たちの未来」JICA 地球ひろば ・「国際理解教育 実践資料集」JICA 地球ひろば ・私たちが目指す世界子どものための「持続可能な開発目標」

[学びの軌跡 (児童生徒の反応、感想文、作文、ノートなど)]



▲ パラグアイの国土を塗り絵しているところ



▲ パラグアイの国土(貼り絵)を掲示した



▲ 授業参観でパラグアイの動画を見ているところ



▲ 授業参観での板書



▲ パラグアイの写真でBINGOをしているところ



▲ SDGsゲームをしているところ

世界のこと、みんなで一緒に考えよう！

学校名	名古屋市立稲葉地小学校	授業者氏名	宮嶋 いずみ
対象学年 (人数)	小学校6年生(35名)	実践年月 (時数)	2019年 11月～2020年1月 (8時間)
担当教科等	全科		
単元名 (活動名)	世界の中の日本		
実践する 教科・領域	社会科、総合的な学習		
学習領域	<p>A 多文化社会 … 文化理解 (○) / 文化交流 () / 多文化共生 (○)</p> <p>B グローバル社会 … 相互依存 () / 情報化 ()</p> <p>C 地球的課題 … 人権 (○) / 環境 (○) / 平和 () / 開発 ()</p> <p>D 未来への選択 … 歴史認識 () / 市民意識 () / 社会参加 (○)</p>		
単元目標	<ul style="list-style-type: none"> ・異文化理解を通して多様性のよさに気づき、認め合うことができる。 ・食を通して日本と世界のつながりに気づき、よりよいつながりを築くために大切なことを考える。 ・世界の課題は私たちの課題でもあることを SDGsを通して気づき、自分にできることを考える。 		
単元の 評価規準	知識および技能	<ul style="list-style-type: none"> ・世界には、様々な環境で生活をする子どもたちがいることを知る。 ・SDGsの内容を理解し、問題と関連づけることができる。 	
	思考力、判断力、 表現力等	<ul style="list-style-type: none"> ・世界の問題について考え、解決のための取り組みについて考えることができる。 ・日本の社会や、自分の問題を理解し、解決のための取り組みについて考えることができる。 	
	学びに向かう力、 人間性等	<ul style="list-style-type: none"> ・世界や社会の問題について関心を持ち、自分にできることを考えて取り組むことができる。 	
単元設定の 理由・意義 (児童生徒 観、指導観、 教材観から)	<p>本学級の児童は、互いのことを理解し、声を掛けたり、意見を交換したりすることができる児童が多い。しかし、自分と異なる意見をもつ児童に対して、抵抗をもつ児童もいる。世界についての知識は少ないが、外国語の授業を通して外国のことを知り、興味をもつ児童も多い。</p> <p>そこで、「共生」をテーマに、パラグアイでの研修で学んだことを切り口にし、パラグアイと日本の「共通点」や「違い」について気づけるようにしたい。「違いがあることは良いことだ。」と気づくことにより、人とのつながりを考え、よりよい関係を築こうとする態度を育てることができる。また、パラグアイの貧困や環境の問題から、世界に目を向けさせたい。自分たちの生活は世界の国々とつながっていることに気づき、世界で起きている問題を自分のこととして捉えられるようにしたい。地球規模での共生を SDGsの項目と関連させ、みんなでよりよい社会を作っていくために、自分自身が果たす役割を考えていく上で意義があると思う。</p>		

[単元計画（全8時間）]

時	ねらい	学習活動	資料など
1	・パラグアイについて知ることで、日本との文化の違いやつながりについて気づくことができる。	・「パラグアイってこんな国！」のスライドを見て、パラグアイについて知る。 ・パラグアイクイズを行い、日本とパラグアイの共通点と違いについて気づく。	・現地研修時の写真や動画・アンケート ・ワークシート
2	・パラグアイと日本の同一性と多様性を知り、多様性を肯定的に受け止める大切さに気づく。	・「みんな同じだったら」と考えることにより、違いがあることよさに気づく。 ・「多様性が認められない学級だったら」と考え、どのような学級が居心地がよいか考える。 ・友達とどのように関わることが大切か書き出し、発表する。	・ワークシート
3	・日本の食料自給率について知る。 ・日本と世界とのつながりは、「よいつながり」と「悪いつながり」があることを知る。	・「つながりカード」を使って、日本が食料を通してつながっている国について知る。 ・つながりには、「よいつながり」と「悪いつながり」があることを知る。 ・よりよいつながりを築くために、自分たちにできることを考える。スーパーに売っている商品に「つながりマーク」が付いていることを伝え、できることの一つとして紹介する。	・説明用のスライド ・つながりカード ・つながりマーク ・つながりマークの付いた商品
4	・世界には、様々な問題があることを知り、よりよい未来を作るための世界の約束、SDGsが決められたことを知る。	・資料を基に、SDGsの目標を知り、友達と感想を伝え合う。	・SDGsスタートブック
5	・世界の子どもたちの置かれている状況や、異なる環境で生活している子どもたちの状況を知る。	・世界の子どもたちのストーリーを読み、思ったことを友達と伝え合う。 ・グループの中でどのような意見が出たか、全体に発表する。	・持続可能な開発目標-SDGs-アクティビティ集
6	・世界の子どもたちの直面する社会問題を理解し、社会問題とSDGsのつながりに気づく。 ・解決のための取り組みを考える。	・前時のストーリーから読み取れる問題を、派生図に表す。 ・問題に対しての課題解決のきっかけを書き足す。 ・グループでどのような意見が出たか、模造紙を回して読み合い、いいと思った記述に星マークを付ける。 ・ストーリーから読み取れる問題で、SDGsの目標と関連のある物を選び、模造紙に貼る。 ・グループの中で話したことを発表する。 ・世界には様々な問題があり、それらを世界全体で解決していくためSDGsという目標ができたことを知る。	・持続可能な開発目標-SDGs-アクティビティ集
7	・日本の社会が抱えているこれから解決すべき課題や自分の課題を、資料や日常生活を振り返って考える。	・資料を読み、日本が抱えているこれから解決すべき課題について知る。 ・日常生活を振り返り、自分の生活での課題を考える。	・持続可能な開発目標-SDGs-アクティビティ集 ・未来の授業
8 本時	・日本の社会や自分の問題を理解し、SDGsのつながりに気づく。 ・解決のための取り組みを考える。	・前時の資料や、自分の生活の中から考えられる問題を、派生図に表す。 ・日本の社会や、日常生活で感じる問題に対しての課題解決のきっかけを書き足す。 ・グループでどのような意見が出たか、模造紙を回して読み合い、いいと思った記述に星マークを付ける。 ・SDGsの目標と関連のある物を選び、模造紙に貼る。 ・グループの中で話したことを発表する。 ・課題解決のために、自分が取り組むことを書き出し、発表する。	・持続可能な開発目標-SDGs-アクティビティ集

[本時の展開（8時間目）]

ねらい	<ul style="list-style-type: none"> ・日本の社会や、自分の生活の問題を理解し、SDGs の目標と関連付ける。 ・問題を解決するための取り組みについて考える。 ・日本の社会や世界の問題を知り、自分にできることを考える。 		
過程・時	教師の働きかけ・発問および学習活動	指導上の留意点(支援)	資料
導入 5分	<ol style="list-style-type: none"> 1. 前時の資料を読み、日本の社会が抱える問題について確認する。 <ul style="list-style-type: none"> ・日本の食料自給率、食品ロス問題、プラスチックごみ問題、自然災害、海外から多くのエネルギーを輸入していることについて確認する。 2. 本時のめあてを知る。 <div style="border: 1px solid black; padding: 2px; display: inline-block;">日本の社会や、自分の生活の問題を理解し、解決のための取り組みを考えよう。</div> 	<ul style="list-style-type: none"> ・前時の資料を基に、日本の社会の問題を簡潔に確認する。 	<ul style="list-style-type: none"> ・「未来の授業 私たちの SDGs 研究 BOOK」
展開 30分	<ol style="list-style-type: none"> 3. 日本の社会や、自分の生活から考えられる問題と課題解決を考える。 <ol style="list-style-type: none"> (1) 日本の社会や、自分の生活から考えられる問題を、グループに分かれて派生図に表す。 (2) 日本の社会や、自分の生活で感じる問題に対する課題解決のきっかけを書き足す。 (3) 派生図をグループ同士で回し、他グループでいいと思った意見に、星マークを付ける。 4. 日本や自分の課題と SDGs の目標を関連付ける。 <ul style="list-style-type: none"> ・SDGs の目標から、日本や自分たちの課題と関連しているものを選び、派生図の用紙に貼る。 	<ul style="list-style-type: none"> ・資料から読み取った日本の社会の問題だけでなく、自分の生活を振り返り、水の使い方や電気の使い方、ごみの捨て方、物の買い方など、一日の生活を朝から振り返って考えるようにする。 ・課題解決のきっかけとして、自分たちができることや、社会がこうなればいいと思ったことを書き足すようにする。 ・日本の社会の問題や自分の問題も SDGs の目標と関連していること、それは、地球全体の問題と共通していることをおさえる。 	<ul style="list-style-type: none"> ・「持続可能な開発目標-SDGs- アクティビティ集」
まとめ 10分	<ol style="list-style-type: none"> 5. 課題解決のために、自分が取り組むことを書き出し、発表する。 6. 本時の振り返りをする。 	<ul style="list-style-type: none"> ・難しいことではなく、日常的にできることを書くようにする。 ・本時で考えた取り組みを一人一人が行っていくことで、問題解決の大きな一歩になることを伝える。 	
評価規準に基づく本時の評価	<ul style="list-style-type: none"> ・SDGs の内容を理解し、日本の社会の問題や、自分たちの課題と SDGs の目標を関連付けることができる。 ・日本の社会や自分の生活の問題について考え、解決のための取り組みについて考えることができる。 ・社会や世界の問題について関心をもち、自分にできることを考えて取り組もうとする気持ちをもつことができる。 		

〔総括・まとめ〕

学習方法および外部との連携	<ul style="list-style-type: none"> 参加型手法を用い、自分たちが主体となって考えることができるようにした。グループで話し合いながら派生図や対比表を作り、児童の考えが広がるような活動を多く取り入れた。派生図や対比表を話し合いながら作ることで、視覚的にも互いの考えを理解しやすいようにした。
学校内外で国際理解教育・授業実践を広める取り組み	<ul style="list-style-type: none"> 6年生社会科「世界の中の日本」の単元で、6年生全体に「パラグアイってこんな国！」、「日本と世界の食料のつながりについて知ろう」と、SDGsの紹介を行った。
苦労した点	<ul style="list-style-type: none"> 教師海外研修で学び、児童に伝えたいと思うことがとても多かったが、それらの情報をどのように授業にするかが課題であった。ストーリーを作って伝えることが難しかったので、単元を区切って行った。 SDGsの授業では、SDGsの項目が多く、それらをどう伝えるかが課題であった。朝学習の時間に、4人グループでそれぞれ違う目標の資料を配付して読み、互いに情報を伝え合い、それぞれの項目についての情報を知るという方法を取ったが、17の項目を把握するためには時間がかかり必要であった。 持続可能な社会のために自分が行う取り組みについて書いたが、それらを実行したり、継続したりするためにはどのような手立てが効果的か苦慮した。今回は、行動をしたことを学級に貼り出した画用紙に書き込み、互いの取り組みについて知ることができるようにした。
改善点	<ul style="list-style-type: none"> SDGsの項目が多いため、ねらいに沿ったものを選択して紹介するか、時間にゆとりがあれば一つ一つ学ぶ時間を取りたいと感じた。 行動計画を立てる際に、「自分」ができることのみ書いたが、「学校で」「地域で」などに分けて考えると、より具体的に方法を書くことができるのではないかと考えた。
成果が出た点	<ul style="list-style-type: none"> 日本と世界のつながりマークを紹介したことにより、買い物に行った時や、家で食品の表示を見てマークを探し、世界とのつながりに興味をもつ姿が見られた。 世界の現状を、具体的な数字を基に知ることで、SDGsの目標についての理解が深まった。 行動計画を立て、行動したことを教室の画用紙に書き込むことにより、互いが取り組んだ行動を見ることができ、取り組みに対しての意欲がより高まった。
学びの軌跡 (児童生徒の反応、感想文、作文、ノートなど)	<ul style="list-style-type: none"> パラグアイと日本の食料自給率や、世界と日本の食べ物のつながりについて学んだことにより、給食食べ残しゼロの意識や、感謝して食べ物をいただくという気持ちが高まった。 SDGsについて学んだことにより、節電、節水、ゴミの分別についての意識が高まり、学校で実践する姿を多く見掛けた。
授業者による自由記述	<ul style="list-style-type: none"> SDGsの2つ目の目標「飢餓をゼロに」について学んだ後、「日本には食べ物がたくさんあるから、その食べ物送れないの？」と児童から質問があった。純粋な気持ちでそのように聞く児童の問い掛けに、自分の中にはっきりした答えが見付からず、どう答えればよいかとまどった。教える立場として、知識を豊富にもっておくことの大切さを痛感した。世界の現状を伝え、児童は自分にできることは何か、ということをも自然と考え、感想に残していた。国際理解の授業において、世界の現状や環境のことを小学校の段階で児童に伝えることは、とても有効だと感じた。これらの知識を持ち、今後も、世界や環境に問題意識をもち、学ぶ児童が多くいるとうれしいと感じた。
単元構想・実施における参考資料等	<ul style="list-style-type: none"> 「SDGsスタートブック」EduTownSDGs アライアンス 「持続可能な開発目標-SDGs-アクティビティ集」セーブ・ザ・チルドレン・ジャパン 「未来の授業 私たちのSDGs研究 BOOK」宣伝会議 「共につくる私たちの未来」JICA 地球ひろば

[学びの軌跡 (児童生徒の反応、感想文、作文、ノートなど)]



▲ 第1時 「パラグアイってこんな国！」 スライドで紹介



▲ 第2時 「みんな同じだったら」について考える様子



▲ 第3時 「つながりマーク」の紹介



▲ 第3時 つながりカードを使って日本と世界のつながりを考える様子

○ 自分たちにできることってなんだろう？

バナナをつつむ、はくろにバナナをつくるためには、時間もかか
ります。けれど、作っても作っても、送料はかかります。そんな
人のためにも、なにかできることか、できないで(どうか?)とかい
て、フィリピンをさせたいてす。 いいアイデアだね!

▲ 第3時 「自分たちにできること」についての記述

○ 世界と日本とのつながりについての感想 (気付いたこと、もっと知りたいと思ったこと)

自分の国の問題をなくしていくとは、相手の国の問題を
減らすことにもつながると思った。だから日本も本気で問
題をなくそうとする姿勢になた方がいいと思っ

▲ 第3時 「世界と日本のつながり」の振り返り



▲ 第4時 SDGsの資料を読み、グループで共有する様子



▲ 第5時 問題と課題解決のきっかけを派生図に書く様子



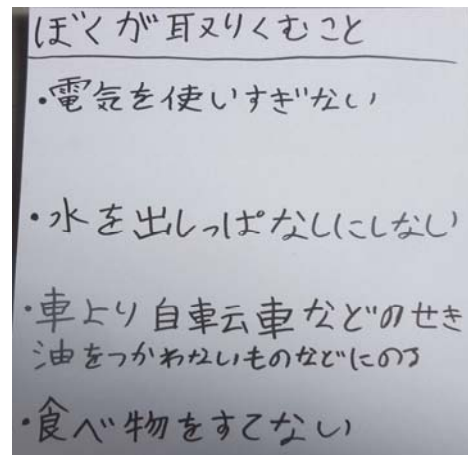
▲ 第6時 ストーリーの問題と SDGsを関連付けた派生図



▲ 第6時 派生図と SDGsの関連を考える様子



▲ 第6時 日本の社会の問題と SDGsを関連付けた派生図



▲ 第8時 自分が取り組むことを書き表す



▲ SDGs目標達成のために取り組んだことの書き込み



▲ 節電を呼びかけるポスター作り

結集せよ！～日本の未来を支える頭脳～

学校名	愛知県海部郡蟹江町立舟入小学校		授業者氏名	村瀬 泰広
対象学年 (人数)	小学校6年生(19名)		実践年月 (時数)	2019年11月～2020年1月 (9時間)
担当教科等	全科			
単元名 (活動名)	再発見！蟹江そして日本			
実践する 教科・領域	総合的な学習の時間			
学習領域	<p>A 多文化社会 … 文化理解 (○) / 文化交流 () / 多文化共生 (○)</p> <p>B グローバル社会 … 相互依存 () / 情報化 ()</p> <p>C 地球的課題 … 人権 (○) / 環境 () / 平和 () / 開発 ()</p> <p>D 未来への選択 … 歴史認識 () / 市民意識 () / 社会参加 ()</p>			
単元目標	<ul style="list-style-type: none"> ・私たちの生活が外国と深く関わっていることに気づく。 ・世界で今起きている問題について知る。 ・諸問題の解決に向けて、今の自分にできることを考える。 			
単元の 評価規準	知識および技能	・貧困、環境、食などに関する課題について、現状を理解する。		
	思考力、判断力、 表現力等	・自分たちの生活が外国と強く結びついていることに気づき、よりよい国際関係について考えることができる。		
	学びに向かう力、 人間性等	<ul style="list-style-type: none"> ・日本や外国のことに興味関心をもち、意欲的に活動することができる。 ・よりよい社会の形成のために、自分にできること、仲間とできること、国として取り組むことの3点を考え、自分にできることを取り組もうとすることができる。 		
単元設定の 理由・意義 (児童生徒 観、指導観、 教材観から)	<ul style="list-style-type: none"> ・対象児童は学年19人という少人数であるため、6年間クラス替えがなく、お互いの性格や考え方がある程度わかり合って生活している。そのため、大きなトラブルが起きにくい一方で、新しい出会いや新しい価値観に触れるといった体験が少ない。今後、さらにグローバル化が進み、固定化された人間関係の中だけで生活を完結させるのは難しい。そこで、外国のことや、自分の生活とは大きく異なる境遇についての学習を通して、自分と異なる価値観を知る機会にする。その際に、自分と異なる価値を否定的に捉えては、その先にあるものを知ることができなくなる。どんな価値観においても、肯定的に出会って、そこからさらに考えを深められるように促していく。 ・学習の中で、自分の言葉で伝え、相手の言葉を聞くという場面をしっかりと設定して、自分のことを理解してもらうことよさを実感できるようにしていきたい。そのために、参加型手法を多く取り入れるようにしていく。 			

[単元計画（全9時間）]

時	ねらい	学習活動	資料など
1	世界のおおまかな様子を、ロールプレイを通して体験する。	<ul style="list-style-type: none"> ・「世界がもし100人の村だったら」に沿って、世界のようすについて知る。 ①民族 ②言語 ③人口密度 ④識字率の問題 ⑤貧富の差の問題 	<ul style="list-style-type: none"> ・「世界がもし100人の村だったら」(開発教育協会) ・ワークシート
2	パラグアイがどんな国なのか知り、自分とは異なる文化や考え方についても前向きに受け入れる。	<ul style="list-style-type: none"> ・パラグアイの写真や映像を見て、パラグアイについて知り、外国について学ぶことへの興味を高める。 ・「スラムにひびくバイオリン」の絵本を読む。 	<ul style="list-style-type: none"> ・パワーポイント ・「スラムにひびくバイオリン」(汐文社)
3	貧困とはどういうことなのかを知り、その問題は何か考える。	<ul style="list-style-type: none"> ・自分たちが思っている貧困のイメージを出し合う。 ・ゴミ山で生活する少女の映像を見る。 ・映像を見て感じたことをもとに、貧困とはどういうことかを考える。【KJ法】 	<ul style="list-style-type: none"> ・「世界がもし100人の村だったら」DVD (ポニーキャニオン) ・ワークシート
4	貧困とはどういうことなのかを知り、その問題は何か考えて、貧困の解決には、支援や援助が必要であることに気づく。	<ul style="list-style-type: none"> ・資料から、貧困について考える。 ①プランテーション農業の実態から ②1杯のコーヒーの値段の真実 ・貧困の連鎖カードを使って、貧困を自らの力だけで断ち切ることの難しさに気付く。 	<ul style="list-style-type: none"> ・「パーム油の話-地球にやさしいって何だろう」開発教育協会 ・「おいしいコーヒーの真実」ホームページ ・貧困の連鎖カード ・ワークシート
5 本時	自分の生活を振り返って、日本と外国が深くつながっていることに気づき、良い関係を築いていくことが大切であることを理解する。	<ul style="list-style-type: none"> ・前時までの貧困についての学習を踏まえ、自分の生活が恵まれているか考える。 ・日本と外国の関係が悪くなったらどんなことが起きるかを考える。【派生図】 ・日本と外国のつながり度を考える。 	<ul style="list-style-type: none"> ・ワークシート
6	<ul style="list-style-type: none"> ・世界の抱える問題を解決するためにSDGsの17の目標があることを知る。 ・SDGsの目標から、自分にできることはないか考える。 	<ul style="list-style-type: none"> ・SDGsの17の目標を知る。 ・17の目標のうち、より大切だと思うものを話し合う。【ランキング】 ・自分がSDGsの目標達成のためにできる行動を考える。 	<ul style="list-style-type: none"> ・17の目標が書いてあるカード ・ワークシート
7	実際に行われている支援や援助を知り、相手のことを考えるという視点が必要であることに気づく。	<ul style="list-style-type: none"> ・パラグアイでJICAによって行われている取り組みを知る。 ・よりよい支援や援助とは何か考える。 	<ul style="list-style-type: none"> ・現地で撮影した写真、映像 ・ワークシート
8	世界が抱える課題の解決に向けてできることを考える。	<ul style="list-style-type: none"> ・学習を通して世界が抱える課題を解決するために、「自分にできること」「みんなとやること」「国がやること」の3つの視点からグループで考える。【行動計画づくり】 	
9	世界が抱える課題の解決に向けてできることを考え、自分にできることを取り組もうという意欲を高める。	<ul style="list-style-type: none"> ・パラグアイで活動する青年海外協力隊の方やボランティアの方からのメッセージを視聴する。 ・前時にグループで考えた課題を解決することを、自分としてどう考えるかまとめる。【行動計画づくり】 	<ul style="list-style-type: none"> ・現地で活動する方からのビデオレター ・ワークシート

[本時の展開（5時間目）]

ねらい	・日本と外国が深く関わっており、よりよい関係を築いていくことの必要性に気づくことができる。		
過程・時	教師の働きかけ・発問および学習活動	指導上の留意点(支援)	資料
導入 5分	1 アイスブレイキングをする。 「みんなの家の近くにある、スシロー、サイゼリヤ、マクドナルド、デニーズのうち、食べに行きたいお店はどこですか？」 ・4つのコーナー(テーマは、スシロー、サイゼリヤ、マクドナルド、デニーズの4つから、一番行きたいお店を選ぶ)	・学区周辺にある飲食店を提示し、普段いろいろな国の料理を食べていることに気づく。	
展開 30分	2 自分の生活は恵まれているかどうか考える。 (1) 恵まれていると考える人数を知る。 「今の自分の生活が恵まれていると思う人？」 (2) どんどこが恵まれているのかを上げる。 「具体的にどんな点で恵まれていると思いますか？」 ・ごはんが食べられる ・学校に行ける ・電気や水道が自由に使える 3 グループで、日本と外国の関係が悪くなったら起こることを考える。 「日本と外国の関係が悪化したらどうなるだろう？ 去年の社会で勉強したことを思い出してみよう。」 (1) 派生図の形で、日本と外国の関係が悪くなったら想定されることを模造紙に書き出していき。 「グループごとに模造紙に書き出してみよう。」 ・食べられないものが出てくる ・車や電車に乗れない ・生活が不便になる (2) ギャラリー方式で他のグループの意見を知る。 「ほかのグループは、どんなことが考えたのか見にいってみよう。そのとき、これが起きたら最悪だと思うものにはどくろマークをつけましょう。」 ・他のグループの模造紙を見るときに、これは最悪だと思うものにどくろマークをつける。	・今の自分の生活が恵まれていると思う児童は挙手をし、多くの児童が今の生活について恵まれていると感じていることを確認する。 ・いろいろな点から恵まれている点が出るようにする。 ・5年生時に学習した、食料や日用品だけでなく、石油や石炭、天然ガスなどほとんどが輸入されていることを思い出すようにする。 ・模造紙に書く際には必ず声に出して伝えること、出された意見については否定をせず、受け入れることを確認する。 ・どくろマークをつける数が多くなりすぎないように、派生図に書かれた量を見て適切な数を指定するようにする。	
まとめ 10分	4 まとめをする。 (1) 世界とのつながり度を考える。 「今日の学習から、日本と外国はどのくらいつながりがあると思いましたか？ 100%を最高にして考えてみましょう。」 (2) 授業の振り返りをする。	・授業を通して、日本が外国とどのくらいつながっているかを0～100%で考える。	ワークシート
評価規準に基づく 本時の評価	・自分たちの生活の多くの部分が外国からの輸入で成り立っており、外国との関係で大きな影響を受けることに気づくことができたか。		

〔総括・まとめ〕

学習方法および外部との連携	<ul style="list-style-type: none"> ・できる限り、教師が一齐指導をする時間を減らし、子どもたちが自分たちで話したり、考えたりする時間を確保できるように授業を計画した。 ・現地で実際に活動されている方からのビデオメッセージでは、自分たちが日本に住んでいて感じたり、考えたりしたことのなかったことに触れることができ、子どもたちの見方や考え方により刺激となった。
学校内外で国際理解教育・授業実践を広める取り組み	<ul style="list-style-type: none"> ・全校朝礼にて、パラグアイの概要と実際に現地を訪れて感じたことを、児童と職員の前で発表した。 ・学習発表会でパラグアイのカテウラ地区を題材にした絵本「スラムにひびくバイオリン」をもとにした劇を発表した。
苦勞した点	<ul style="list-style-type: none"> ・小学校6年生ということで、貧困や食、環境などの問題や世界の国に関する基本的な知識が不足していて、資料の内容から深く追究することが難しかった。 ・グループ学習が多くなり、グループによって考えの深まりや理解の深まりに大きな差が出ることもあり、最低限の内容を全員で共有することが難しいと思った。
改善点	<ul style="list-style-type: none"> ・実践を進める中で、1回1回の授業の間隔があいてしまうことがあり、前時の内容をしっかりと理解していない子がおり、毎回の授業で前時の内容を振り返る時間をとった。そのため、その後の活動の時間が不足気味になってしまった。限られた時間の中で、効果的な実践とするために、できるだけ実践の間隔を短くしたり、連続での授業にしたりするとよいと感じた。
成果が出た点	<ul style="list-style-type: none"> ・実践後に、外国への興味関心が高まり、話題になることが増えた。 ・自分のできることをしよう、してみたいと考えられるようになった。 ・参加型の学習を繰り返し取り入れたことで、自分と異なる考えに対しても否定をしないでまずは受け入れ、その上で自分の考えを伝えるという姿が見られるようになった。
学びの軌跡 (児童生徒の反応、感想文、作文、ノートなど)	<ul style="list-style-type: none"> ・世界を変えるためにいろいろな目標があり、実現できたらいいなと思いました。小さいことからやっていくことも世界を変えることに必要だと思った。 ・その国に、貿易ができるような環境をつくって、自分で発展していけるようなことをすると知って、その方が頼りっぱなしにならず、国にとってもいいなと思いました。 ・途上国より、日本は何でもできていると思っていたけど、実は途上国の方が進んでいるものがあったり、機械が少ない方が、やさしさや助け合いが多いのかなと思って、もっと学びたいと思った。
授業者による自由記述	<ul style="list-style-type: none"> ・外国の様子や文化について肯定的に出会うことが、子どもたちに授業をするときにとっても大切だということを実感した。教師が否定的に捉えていると、それが子どもたちにも伝わってしまう。 ・新しいことを自分たちで学び合うことを、自分が予想していた以上に楽しみながら取り組んでいたのが印象的だった。教師主導ではなく、自分たちで学び合うということが子どもたちにとって学ぶモチベーションになると改めて感じた。
単元構想・実施における参考資料等	<ul style="list-style-type: none"> ・「世界がもし100人の村だったら」(フジテレビジョン)DVD ・「世界がもし100人の村だったら」(開発教育協会) ・「スラムにひびくバイオリン」(汐文社) ・「パーム油の話-地球にやさしいって何だろう」開発教育協会 ・「おいしいコーヒーの真実」ウェブサイト ・「外務省」ウェブサイト

[学びの軌跡 (児童生徒の反応、感想文、作文、ノートなど)]



▲ 第1時の授業の様子



▲ 第5時の児童の成果物



▲ 第6時の授業の様子



▲ 第8時の児童の成果物

● 総合的学習の時間全体を振り返って (考えたこと、自分の中での変化、心に残っていること、学んだこと など)

パラグアイなどの途上国で日本人ががんばっていることを知った。パラグアイの人たちは日本人をしっかりと認めることは日本の援助や生活を手伝ってくれたからだと思う。

途上国より、日本は何でもできていると思ってるけど、実は、途上国の方が道具があるものもあり、機械が少なくていい方が、やさしさや助け合いが多いのかなと思って、もっと学びたいと思った。

▲ 児童の振り返り①

● 総合的学習の時間全体を振り返って (考えたこと、自分の中での変化、心に残っていること、学んだこと など)

日本人というのはそれだけ知っているから、日本人というのにほりを持つことができなかったから、自分もそれだけのことをしなさいといけないうえに思いました。

自分が体験をしたその一番信じてテレビなどのイメージだけで信じてしまっているから、まずは自分の目で体験で感じたいなと思いました。

自分が相手の気持ちになって考えれば人として成長できる!!

▲ 児童の振り返り②

遠そうで近いパラグアイ

学校名	名古屋大学教育学部附属中高等学校	授業者氏名	湯浅 郁也
対象学年 (人数)	中学3年生(80名)・高校2年生(80名)	実践年月 (時数)	2019年10月～2020年1月 (3時間)
担当教科等	外国語(英語)		
単元名 (活動名)	“Landfill Harmonic” 「豊かさ」について考える		
実践する 教科・領域	外国語(英語)		
学習領域	<p>A 多文化社会 … 文化理解(○) / 文化交流() / 多文化共生()</p> <p>B グローバル社会 … 相互依存() / 情報化()</p> <p>C 地球的課題 … 人権() / 環境(○) / 平和() / 開発(○)</p> <p>D 未来への選択 … 歴史認識() / 市民意識() / 社会参加()</p>		
単元目標	<ul style="list-style-type: none"> ・パラグアイの現状を知り、環境、貧困、教育など途上国が抱える諸問題に目を向ける。 ・自身の暮らす地域と貧困地域における共通点・相違点を見つける。 ・自国と他国、それぞれの視点から「豊かさ」について考える。 		
単元の 評価規準	知識および技能	・広い視野を持ち、他国の状況や異文化を正しく理解する。	
	思考力、判断力、 表現力等	・グループや全体の共有場面で出された他者からの考えをふまえて、自身の考えを再構成することができる。	
	学びに向かう力、 人間性等	・「豊かさ」についての自身の考えを論理的に展開することができる。	
単元設定の 理由・意義 (児童生徒 観、指導観、 教材観から)	<ul style="list-style-type: none"> ・SSH(スーパーサイエンスハイスクール)、SGH(スーパーグローバルハイスクール)の指定を受けた併設型中高一貫校で、生徒は暗記再生の学習のみでなく、総合学習における個別探究や生徒研究員制度をはじめとする探究的な学習活動に参加している。 ・本実践では、生徒のグローバルな課題への関心や個別に持つ問題意識を、協同的な学びの中で深めることを目指す。 ・現地研修で収集した貧困地区の事例と非定型の問いを設定し、生徒が世界の現状や課題、国際協力についての理解を深める学習活動としたい。 		

[単元計画 (全3時間)]

時	ねらい	学習活動	資料など
1	<ul style="list-style-type: none"> ・パラグアイの文化や風土について学ぶ。 ・貧困地域の現状を知る。 ・それぞれの国における「豊かさ」について考える。 	<ul style="list-style-type: none"> ① アイスブレイク 「4つのコーナー」 ②「豊かさ」とは何か？ ・アイスブレイク「4つのコーナー」を使い、「豊かさ」に関する4つの質問に各自が回答(教室の四隅へ移動する) ③パラグアイ紹介 ・現地収集の写真を使い、クイズ形式でパラグアイの人々・気候・文化を紹介 ④カテウラ地区の紹介 ・現地収集した写真を使用 	<p>「参加型アクティビティ集 コミュニケーション編」 (特定非営利活動法人 NIED・国際理解教育センター)</p>
2	<ul style="list-style-type: none"> ・カテウラ音楽団について知る。 ・貧困地区が抱える課題をSDGs と照らし合わせ考える。 	<ul style="list-style-type: none"> ①アイスブレイク 「同じところと違うところ」 ②カテウラ音楽団について ・ジグソー法を用いてグループ内で情報共有 ③カテウラと世界とのつながり ・カテウラを取り巻く問題を列挙 ・カテウラの現状と課題を SDGs 開発目標にある Economy、Society、Biosphere それぞれの観点から考える ・課題に対するアプローチを SDGs の 17 目標に○をつける。 ※複数該当可 	<ul style="list-style-type: none"> ・配付プリント プロミネンス English Communication I “Landfill Harmonic Orchestra” 東京書籍
3 本時	<ul style="list-style-type: none"> ・パラグアイと日本の共通点や相違点について考える。 ・世界における「豊かさ」とは何かについて自身の考えをまとめる。 	<ul style="list-style-type: none"> ①アイスブレイク スモールトーク「小さな幸せ」 ②パラグアイと日本における共通点や相違点 ・他国で暮らす人々と私たちの生活はどのようにつながっているか各自で考えたものを共有 ③10年後のカテウラの様子を想像してみる。 ・記入した用紙をグループ内で回し読みし共有 ・「豊かさ」についての自身の考えを英語1文で記入する。 	<p>「パラグアイの貧困」 (特定非営利活動法人ミタイ・ミタクニヤイ子ども基金ウェブサイト)</p>

[本時の展開（3時間目）]

ねらい	・日本を含む先進国のみでなく、途上国とそこに暮らす一人ひとりが持つ普遍的な価値に触れる。		
過程・時	教師の働きかけ・発問および学習活動	指導上の留意点(支援)	資料
5分	①アイスブレイク:スモールトーク 「私の見つけた“小さな幸せ”〇〇」 ※グループ(基準数4人)で共有する。	他者の考えを肯定的に受け止めることができる風土づくりに努める。	
5分	②前時に扱ったSDGs 開発目標 Economy、 Society、 Biosphere それぞれの観点から考えたカテウラ地区が抱える課題についてグループで共有する。 ・貧困問題においても経済・社会・環境など様々な切り口が存在することへの気づきを促す。 ※前時と異なるグループメンバーと共有する。	SDGs の国際目標が多様な価値を含むものであることが理解できるよう留意する。	JICA SDGs (持続可能な開発目標) シート
10分	③パラグアイと日本における共通点や相違点について考える ・カテウラで暮らす人々と私たちの生活はどのようにつながっているかを各自で考えワークシートに箇条書きで記入する。 ・パラグアイにおける貧困の問題は、日本から遠く離れた世界の問題ではないという認識を持つ。	他国における問題を我が事として捉えることができるよう留意する。	
15分	④パラグアイの貧困へのアプローチについて考える。 ・ミタイ・ミタクニヤ子ども基金の紹介 ・ウェブサイト掲載資料「エルニーニョ現象とパラグアイの貧困は関係があるのか？」を各自で読む。 ・貧困の原因となり得るものについてグループで共有する。	貧困の要因となり得るものについて、グループメンバーの多様な考えに触れるよう留意する。	藤掛洋子(2016) 「パラグアイの貧困」 『特定非営利活動法人ミタイ・ミタクニヤ子ども基金ウェブサイト』 (http://mitai-mitakunai.com/support/paraguay/povert 閲覧日 2020年1月6日)
15分	⑤「豊かさ」について考える。 ・世界における「豊かさ」とは何かについて英文1文でまとめる。 ・グループ内で回し読みをして共有する。 ※他者の記述において共感できる箇所と、疑問に思う箇所にそれぞれ波線と下線を引く。	貧困地区における今後の支援の在り方も含め、問いに対する自身の考えをまとめることができるよう留意する。	
課題	「10年後のカテウラ」をテーマにアカデミックライティングの手法に則り英作文(100語程度)に取り組む。 ※必要に応じ日本語による補足をする。		
評価規準に基づく本時の評価	<ul style="list-style-type: none"> ・「豊かさ」についての自身の考えを論理的に展開することができる。 ・グループや全体の共有の場面で出された他者からの考えをふまえて、自身の考えを再構成することができる。 		

〔総括・まとめ〕

学習方法および外部との連携	<ul style="list-style-type: none"> ・パラグアイ紹介をはじめとする教材開発は、校種を問わず他校の教員と連携し行った。 ・授業実践は汎用性の観点から3時間完了で計画及び実施した。 ・中学3年と高校2年の生徒160名を対象に教科(英語)の授業時間に行った。
学校内外で国際理解教育・授業実践を広める取り組み	<ul style="list-style-type: none"> ・開発教育指導者研修と教師海外研修の研修内容について職員会議で報告した。 ・愛知県高等学校国際教育研究協議会にて授業実践について報告した。 ・勤務校の研究発表会にて授業実践の一部を紹介した。
苦労した点	<ul style="list-style-type: none"> ・現地研修で収集した資料をもとにカテウラ地区の貧困問題に焦点を当てた授業実践を行ったが、情報が偏ったり恣意的になったりしないよう心がけた。 ・教科(英語)においての実施であったが、生徒の考えをグループで共有する活動においては母語を使用し言語運用能力(外国語)が障害とならないよう留意した。
改善点	<ul style="list-style-type: none"> ・生徒が個々に持つ考えを共有する場面では、より積極的に参加型手法を取り入れる必要があった。授業時間の制約も含め共有場面における手立てについて再考の余地がある。 ・貧困問題への多面的な解釈においては資料の不足からも課題が残る結果となった。また、対象となる生徒の発達段階に応じた問いの設定を心がけることも課題として残った。
成果が出た点	<ul style="list-style-type: none"> ・参加型手法を用いることで、普段は発言に積極的でない生徒の意見や考えを全体で共有することができた。 ・現地収集の資料を交えて途上国における課題について授業で考えたことをきっかけに、様々な国際理解推進事業への生徒の関心が高まった。
学びの軌跡 (児童生徒の反応、感想文、作文、ノートなど)	<p>問い 「カテウラの人々の生活と私たちの生活はどのようなつながりがあると考えられますか。」</p> <p>生徒の記述(抜粋)</p> <ul style="list-style-type: none"> ・日本の貧困とよばれる人々と、カテウラの貧困は境遇は違っても同じ(中3生) ・パラグアイでも都市部と郊外で貧富の差があるように、日本でも都市と地方で貧富や環境の差があると思う。(高2生) ・日本のような先進国のせいでおこった気候変動がカテウラの子どもたちにも影響を与えている。(高2生)
授業者による自由記述	<ul style="list-style-type: none"> ・本授業実践においては、異文化や異なる人々の考えを受容することのできる生徒の育成に努めた。しかし、国際理解教育の目指す「自らの考えや意見を自らが発信し、具体的に行動することのできる態度・能力の育成」する段階には至っていない。 この点においては、生徒の主体的な行動を促すためにも、生徒自身が個々に持つ関心を探的に学ぶことができる授業展開の検討が必要である。
単元構想・実施における参考資料等	<ul style="list-style-type: none"> ・特定非営利活動法人 NIED・国際理解教育センター(2018) 参加型アクティビティ集 コミュニケーション編 ・田島久歳(2011) エリア・スタディーズ 86 パラグアイを知るための50章 明石書店 ・藤掛洋子(2016) 「パラグアイの貧困:エルニーニョ現象とパラグアイの貧困は関係があるのか?」、『特定非営利活動法人ミタイ・ミタクニヤ子ども基金ウェブサイト』 (http://mitai-mitakunai.com/support/paraguay/poverty 閲覧2020年1月6日)

[学びの軌跡 (児童生徒の反応、感想文、作文、ノートなど)]



▲ パラガイの紹介(高校2年生)

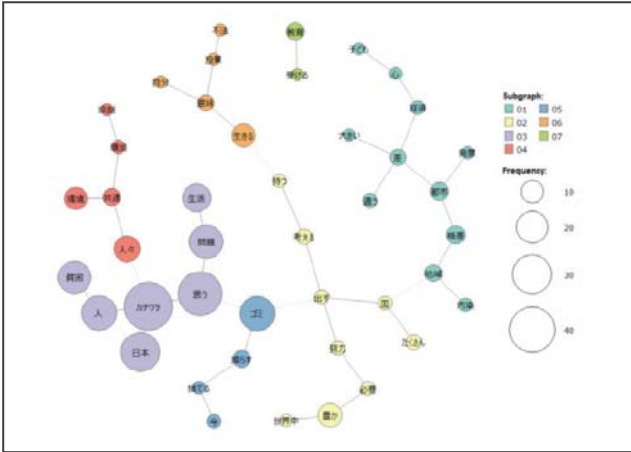
A: カテウラを取り巻く状況に関連する問題を考えてみましょう。
 ① ゴミによる劣悪な衛生環境 ⑩ 雨季学校行ITな
 ② 貧困
 ③ アルコールドラッグの蔓延 暴力
 ④ 汚染された空気
 ⑤ 住んではいけない所に住んでいよう近いため
 ⑥ 川などの環境汚染

B: Aで考えた問題に関連していると思われるSDGsの目標を番号で書きましょう。
 ① ⇒ 3, 11, 12 ⑩ 9, 11, 13
 ② ⇒ 1, 2, 10
 ③ ⇒ 3, 16
 ④ ⇒ 3
 ⑤ ⇒ 11
 ⑥ ⇒ 13, 14, 15

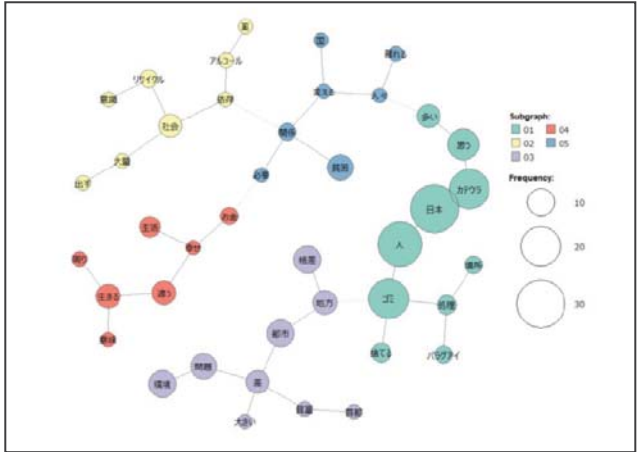
C: カテウラの人々の生活と私たちの生活はどのようなつながりがあると考えられますか。あなたの考えを日本語で書いてみましょう。

日本人は大量のゴミを出している処理施設が1か所しかないのがカテウラの問題ではないか、だからといって、貧乏、捨てることに責任がなけりたてない。日本もゴミ処理が足りた、海外に送っている現状もあるから、日本の努力先進国のようにして気候変動も、カテウラの人々にも影響を与えている。技術支援がほしいと思う。

▲ 生徒による記述(高校2年生)



▲ 計量テキスト分析結果(中学3年生)



▲ 計量テキスト分析結果(高校2年生)

世界のつながり、ありがとう！

学校名	愛知県立熱田高等学校	授業者氏名	横井 美月
対象学年 (人数)	高校1年生 (317名)	実践年月 (時数)	2019年 11月～12月 (3時間)
担当教科等	外国語 (英語)		
単元名 (活動名)	自分と世界のつながりに気づき、より良いつながりを築こう		
実践する 教科・領域	総合的な探究の時間		
学習領域	<p>A 多文化社会 … 文化理解 (○) / 文化交流 () / 多文化共生 ()</p> <p>B グローバル社会 … 相互依存 (○) / 情報化 ()</p> <p>C 地球的課題 … 人権 (○) / 環境 (○) / 平和 () / 開発 ()</p> <p>D 未来への選択 … 歴史認識 () / 市民意識 (○) / 社会参加 ()</p>		
単元目標	<ul style="list-style-type: none"> ・日本と世界の相互依存の關係に気づく。 ・国際問題の原因を考える。 ・他を認めることの大切さに気づき、より良い關係を築くにはどうすべきか共に考える。 		
単元の 評価規準	知識および技能	・日本をとりまく食や物、環境に関わる現状を正しく理解している。	
	思考力、判断力、 表現力等	<ul style="list-style-type: none"> ・グループの中で自分の考えを表現できる。 ・資料から得た情報を整理し、的確に情報共有ができる。 	
	学びに向かう力、 人間性等	<ul style="list-style-type: none"> ・世界の中の日本について多面的に知り、理解しようとすることができる。 ・活動を通じて自己の生活を振り返り、他者・他国とより良い關係を築くには自分自身がどう行動すべきか主体的に考えることができる。 	
単元設定の 理由・意義 (児童生徒 観、指導観、 教材観から)	<ul style="list-style-type: none"> ・本校は、教員の働きかけに熱心に応えようと前向きに学習に取り組む生徒が多い。しかし、学習は受験のためと考えている生徒が多く、主体的に学ぶ意欲を高めることが課題である。また、身の回りだけではなく、視野を広げ、様々な問題を多面的に捉える力を養いたい。 ・国際問題が自分の生活と密接な関わりのあるものだと気がついている生徒は少ないため、世界が相互依存の關係にあることに改めて気づいてもらいたい。また、生徒たち自身が国際問題を自分ごとと捉え、国際社会に貢献できる方法を考えられるようにしたい。 ・他国と良い關係を築くために大切にすべきことと、クラスメイトと良い關係を築くために大切にすべきことは相通ずるところがある。他者との関わり方を振り返るきっかけにもしてほしい。 		

[単元計画 (全3時間)]

時	ねらい	学習活動	資料など
1	パラグアイについて知る	<p>①同じところと違うところ【アイスブレーキング】 グループ全員の共通点をできるだけたくさん見つけて書き出す</p> <p>②パラグアイと肯定的に出会う 【フォトランゲージ】【クイズ】 パラグアイへのイメージ(偏見)に気づく</p> <p>③パラグアイと日本のつながりや同一性に気づく 【対比表】同じところ・違うところリスト</p>	<p>・パワーポイント ・現地の写真、動画 ・パラグアイ BOX ・配付プリント</p> <p>【参考】 ・「参加型アクティビティ集 コミュニケーション編」(特定非営利活動法人 NIED・国際理解教育センター)</p>
2 本時	<p>日本と世界の相互依存の関係に気づく</p> <p>様々な国際問題について知る</p>	<p>①名刺で自己紹介【アイスブレーキング】 お題:最近ハマっているお菓子、今日の朝食、通学手段と通学時間、パラグアイの授業で印象に残ったこと</p> <p>②自分の生活から日本と世界の関わりに気づく 【ブレインストーミング】 今日お世話になったものリスト(食べ物、もの)作成</p> <p>③世界と日本のつながりを知る 【つながりカード】 カードを通して日本が世界に与えている良い影響、悪い影響について実際の事例を知る</p> <p>④資料を読み、知識を深める【ジグソー法】 グループのメンバーで分担してつながりカードに関する資料を読み、知識を深める</p>	<p>・配付プリント</p> <p>【参考】 ・「日本国勢図会」「世界国勢図会」公益財団法人 矢野恒太記念会 ・JICA 資料 ・公益財団法人 愛知県国際交流協会 国際理解教育教材「わたしたちの地球と未来」 ・特定非営利活動法人 ACE ウェブサイト ・公益財団法人 世界自然保護基金ジャパン(WWF ジャパン) ウェブサイト</p>
3	<p>国際問題の原因を考える</p> <p>様々な国際問題への取り組みを知る</p> <p>他を認めることの大切さに気づき、より良い関係を築くにはどうすべきか共に考える</p>	<p>①前時の振り返り【傾聴】 ペアとなり、過去2回の授業の感想、覚えていることを30秒で伝え、聞き手はその後30秒で話し手が話したことをそのまま返す</p> <p>②良いつながりを阻むものは？【因果関係図】 良いつながりを築くために、なぜ悪いつながりができるのか原因を考える</p> <p>③良いつながりを築くために自分、学校、国ができることは？ ラベルカルタをする【カルタ】→フェアトレード、レインフォレストアライアンスなどのラベルを知る 資料を読み、事例を知る【ジグソー法】→東京オリンピック「みんなのメダルプロジェクト」、フェアトレードタウンなごや、持続可能なパーム油のための円卓会議、世界の水を守るためにできること、砂漠化対策できることリストを作る【行動計画】</p> <p>④身の回りのよいつながりとは？ 自分たちの人間関係を振り返る</p>	<p>・配付プリント</p> <p>【参考】 ・JICA 資料 ・東京オリンピック ウェブサイト ・フェアトレードタウンなごや パンフレット ・認定NPO法人 ボルネオ保全トラスト・ジャパン ウェブサイト ・国連 WFP ウェブサイト ・公益財団法人 世界自然保護基金ジャパン(WWF ジャパン) ウェブサイト ・森永製菓 ウェブサイト ・公益財団法人 ジョイセフ ウェブサイト</p>

[本時の展開 (2時間目)]

ねらい	<ul style="list-style-type: none"> ・日本と世界の相互依存の関係に気づく ・様々な国際問題について知る 								
過程・時	教師の働きかけ・発問および学習活動	指導上の留意点(支援)	資料						
導入 8分 展開 32分 まとめ 10分	1. 名刺で自己紹介 お題:「最近ハマっているお菓子」「今日の朝食」 「通学手段と通学時間」 「パラグアイの授業で印象に残ったこと」 2. 自分の生活から日本と世界の関わり気づく お世話になったものリスト作成 →今日起きてから総合の時間までに自分と関わりのあったものを書き出す。(食とモノに分ける) ・書き出したものがどこから来ているか話し合う。 ・JICA 資料「どうなってるの?世界と日本」、地理や家庭科の教科書などから何がどこから輸入されているかを知る。 <table border="1" style="width: 100%; margin: 10px 0;"> <tr> <th colspan="2" style="text-align: center;">今日お世話になったものリスト</th> </tr> <tr> <th style="width: 50%;">食べ物</th> <th style="width: 50%;">モノ</th> </tr> <tr> <td style="height: 40px;"></td> <td></td> </tr> </table> 3. 世界と日本のつながりを知る つながりカード →日本が世界に与えている良い影響、悪い影響について実際の事例を知る。 ・10か国(1か国あたり3枚で1セット)のつながりカードを各グループに配付する。 ・内容を読み、どの国と日本との関係かを考えて並べる。 ・正解の表を配付し、内容を確認する。 4. 資料を通して世界と日本のつながりを学ぶ グループのメンバーで分担してつながりカードに関係する資料を読み、知識を深める。 ・1人ずつ自分の読んだ資料を要約し、グループで共有する。(1人2分程度)	今日お世話になったものリスト		食べ物	モノ			・前時の振り返りをする。 ・本時の②の内容にスムーズに入れるよう自分の生活を思い返す。 ・なかなかお世話になったものを思い出せない場合は「今日の朝食は?」「今何を着ている?」など支援をする。 ・つながりには良いもの(日本が国際的に社会貢献しているもの)と悪いもの(利益を求めることによって様々な環境に影響を与えているもの)があることに生徒たち自身で気がつけるように、特に発問はせず、カードの内容についてグループで話し合いをする。 ・4種類の資料をグループ内で重ならないようにして1人1枚ずつ配付する。 ・各自、共有したい!と思ったところに線を引ながら読むよう促す。	・配付プリント 【参考】 ・「日本国勢図会」「世界国勢図会」公益財団法人 矢野恒太記念会 ・JICA 資料 ・公益財団法人 愛知県国際交流協会 国際理解教育教材「わたしたちの地球と未来」 ・特定非営利活動法人 ACE ウェブサイト ・公益財団法人 世界自然保護基金ジャパン(WWF ジャパン) ウェブサイト
今日お世話になったものリスト									
食べ物	モノ								
評価規準に基づく本時の評価	<ul style="list-style-type: none"> ・自分自身の生活を振り返ることや資料を読むことを通して、日本をとりまく食や物、環境に関わる現状を正しく理解している。また、自分の考えや資料から学んだ情報をグループで積極的に共有できる。 ・世界の中の日本について様々な立場から多面的な視点で捉え、理解しようとする事ができる。 								

〔総括・まとめ〕

学習方法および外部との連携	<ul style="list-style-type: none"> ・つながりカードやラベルカルタなど説明が簡単で、生徒たちの理解を深めることのできるカードゲームは生徒たちが意欲的に学びに向かう姿勢を作ることができた。
学校内外で国際理解教育・授業実践を広める取り組み	<ul style="list-style-type: none"> ・今回の授業の1時間目は体育館で320人に対して行ったが、残り2時間は各教室にて各学級担任が指導案に沿ってそれぞれ授業を行った。また今回の3時間の授業全てを校内への公開授業とした。 ・本校文化祭にて ESS 部による発表を行った。JICA 民族衣装体験、生徒による世界クイズ、パラグアイ・バングラデシュ・オーストラリアの学校比較展示等を実施した。 ・愛知県高等学校国際教育研究協議会 (AKK) 2019 年度研究大会の分科会において、JICA 主催海外研修報告者による報告を行った。
苦勞した点	<ul style="list-style-type: none"> ・学年の教員全員で授業実践を行ったため、1 時間目以外の授業では現地研修で訪問したパラグアイの色を出すことが難しかった。しかし、生徒たちはパラグアイだけではなく多くの国について知ることができ、有意義であった。 ・全教員にとって分かりやすい資料作成をすることや、簡単な説明で取り組める活動を考えることに苦勞した。その中で、情報を選別し、活動を簡略化することによって生徒にとっての分かりやすさにもつながった部分もある。 ・「つながり」という大きな枠組みの中で授業を行ったため、生徒たちの思考が広がりすぎたり、想像以上に狭くなってしまったりした。生徒たちのレベルに合った適度な範囲を指定することに難しさを感じた。
改善点	<ul style="list-style-type: none"> ・全体的に時間に無理のある授業構成となってしまった。2、3時間目に行った授業を3時間に分けて行うことができると、生徒たち自身の考えを深めることができる。 ・2、3時間目に資料を読む活動を入れたが、じっくり読み込む時間を取ることができなかった。資料を読む場合、その量や難易度、その他の活動の時間とのバランスをしっかりと考えると効果的であろう。
成果が出た点	<ul style="list-style-type: none"> ・学年の生徒全員を対象に授業をすることができたため、多くの生徒と国際問題についてじっくりと考えることができた。 ・授業での活動は、「自分たちの生活を振り返ること」「自分たちの生活と国際問題が密着していること」「身の回りで国際支援が行われていること」など、生徒たちが自分自身の生活と密着したところにつながりがあると気づくことができるよう工夫した。活動を通して、国際問題を自分ごととして捉えられるようになった。
学びの軌跡 (児童生徒の反応、感想文、作文、ノートなど)	<ul style="list-style-type: none"> ・授業の前後でパラグアイへの考えが変わった。最初は開発途上国や貧困な国かなと思っていただけ、全然違って偏見だったと思った。イメージだけで国を見るのではなく、実際に見て、聞くことが大切だと思った。 ・日本とパラグアイで国が違っても同じところがたくさんあった。「共通」を見つけるって良いなと思った。 ・今まで外国には興味がなかったけど、今の私たちは外国の人たちがいるからこそ、幸せに不自由なく暮らせていると思ったので、もっと関心を持っていこうと思った。 ・今まで名前も知らなかった国々を知って、その国を少し身近に感じるようになった。世界のことを知ってつながることは楽しいし、大切だと思った。
授業者による自由記述	<ul style="list-style-type: none"> ・日本と世界の身近な相互依存の関係に気がつき始めると、生徒たちは意欲的に活動に取り組み、資料を熱心に読んでいた。高校生は少し難しい資料にも興味を持って読むので、興味関心を高められる資料作りの重要性を改めて感じた。 ・本校の総合的な探究の時間の中で、学年全体で国際理解教育に取り組んだのは初めてだった。準備には時間を要したが、簡単、かつ、一度作ってしまえば何度も使える教材作りを心がければ、長く続けられる授業になるだろう。また、多くの教員が携わることは、より専門的な知識を含んだ教科横断型な授業ができる点でも生徒たちの深い学びにつながる。
単元構想・実施における参考資料等	<ul style="list-style-type: none"> ・『国際理解教育実践資料集～世界を知ろう！考えよう！～』『どうなってるの？世界と日本』『砂漠化する惑星』『世界の水事情』JICA 地球ひろば ・『参加型アクティビティ集 コミュニケーション編』特定非営利活動法人 NIED・国際理解教育センター

[学びの軌跡 (児童生徒の反応、感想文、作文、ノートなど)]



▲ 第1時 パラグアイと肯定的に出会う



▲ 第2時 つながりカード



▲ 第3時 なぜ悪いつながりができるのか



▲ 第3時 ラベルカルタ

自分	学校	社会
<ul style="list-style-type: none"> こうきょうこうかでお金のことを考える 募金 プラスチックを減らす (Reduce) リサイクル (Recycle) 3R つねにものを大切に使う のこりにくはん 2つか3つ品を量り しんしやわー再利用 (Reuse) 使うものを大切に使う 	<ul style="list-style-type: none"> 環境の保護 お金のやりとり 各は防犯でローコスト LEDのライト 世界のことはよく学ぶ 2つか3つ品を量り 7か7さ 学生運動 お金のことをよく考える お金のことをよく考える お金のことをよく考える お金のことをよく考える 	<ul style="list-style-type: none"> 食料自給率を上げた 輸入に頼らない お金のことをよく考える お金のことをよく考える お金のことをよく考える お金のことをよく考える お金のことをよく考える お金のことをよく考える お金のことをよく考える お金のことをよく考える

▲ 第3時 できることリスト

自分	学校	社会
<ul style="list-style-type: none"> 人と思いやる バエ持つ 募金 チョコレート たくさん食べる マークを迷目して買物する 家族に話す 	<ul style="list-style-type: none"> ばきん 購買でマークのついた商品を買う ポスターの作り 連と作る 	<ul style="list-style-type: none"> ボランティア フェアトレード RSPOマークを世界に広める リセット Twitter 井乃アット 井乃アット 井乃アット 井乃アット 井乃アット

▲ 第3時 できることリスト

◎3回の授業を通して

今までは新しさがなかった国の、人や生活について学び、他の国について知りたかった。発展途上国であるRSPOの国の問題に目を向け、個人の責任を分かち、世界や地球の国産品のマークのついた商品を買って、できる限り助けたいと思った。日本は他の国に大きく負って成り立っている。互いに助け合えるように努力することが大切だと思った。

◎3回の授業を通して

・はじめで知ったことがたくさんあった。
 ・紙にかいてみると、なるほどと思えることがたくさんあった。知ってよかったなと思った。
 ・知ったことを伝えることも大切なことだ。家族に伝えてあげたいと思った。
 ・世界の問題は自分たちも関係していることを忘れてはいけないと思った。

▲ 第3時 振り返りシート

IX. 研修全体のふりかえり・評価

● 研修受講者アンケート結果から

1. 研修の満足度について

研修受講者10人中8人が、5段階評価の最上である「とても満足できた」に回答しており、全体として満足度の高い研修であったことがわかる。

【設問1】

設問1；研修は、あなたの期待（あるいは目標達成の支援）を満足させるものでしたか。

No.	選択肢	回答者数	割合
1	とても満足できた	8	80%
2	満足できた	1	10%
3	ある程度満足できた	1	10%
4	あまり満足できなかった＋満足できなかった	0	0%
	全体（無回答1名除く）	10	100%

2. 開発教育・国際理解教育の実践について

（1）実践時間及び前年度からの変化

研修受講者の一人平均実践時間は12.2時間であった。最短3時間から最長20時間まで多様な実績が行われている（P.30の実践報告以外の実践を含む）。【設問2】

実践時間の前年度からの変化では、研修受講者の全員が「前年度よりも増加した」としている。【設問3】その理由の主なものは以下のとおりであり、研修に参加して関心が高まり、海外研修の経験を生徒に還元したいと思ったり、授業展開や参加型学習法を学ぶことができたことが要因であったといえる。

設問2；開発教育・国際理解教育の延べ実践時間

No.	選択肢	回答者数	割合
1	1～4時間	1	10%
2	5～9時間	3	30%
3	10～14時間	2	20%
4	15～19時間	2	20%
5	20時間以上	2	20%
	合計実践時間数	122	時間
	1人当たり平均実践時間	12.2	時間／人

設問3；前年度に比べた実践時間の変化

No.	選択肢	回答者数	割合
1	前年度より増加した	10	100%
2	前年度と変わらない	0	0%
3	前年度より減少した	0	0%
	全体	10	100%

<実践時間が増えた理由（主なもの）>

- ◇ パラグアイ現地研修に参加して、意欲が高まったから。
- ◇ 海外研修での経験を授業に取り入れてみたい、生徒に還元したいと思ったから。
- ◇ 研修を受けて、授業展開や参加型学習法を学ぶことができたから。
- ◇ 海外研修で得たことをもとに、カリキュラムを再考したため。
- ◇ 学校全体で総合的な学習の時間の見直しを行い、国際理解教育へ力を入れるようになったため。

(2) 実践内容の深まりについて

研修受講者のうち9人が「とても深まった」または「深まった」としている。【設問4】

その理由の主なものは以下のとおりであり、研修に参加して関心が高まったり、開発教育・国際理解教育の手法がわかったりしたことが要因であったといえる。

<実践内容が深まった理由（主なもの）>

- ◇ 研修を通して自分自身に世界のこと、人権や環境問題のことについての知識が増えたから。
- ◇ ねらいを明確に持ち、参加型学習の方法を知って、児童に体験型の授業展開ができたため。
- ◇ 研修を通して、他の受講者の実践や方法を共有できたから。
- ◇ 研修を通して、世界を身近に感じてもらえるような授業の作り方を学ぶことができたから。
- ◇ ワークショップ型の研修を体験的に学ぶことができ、生徒の視点を踏まえて授業実践ができたから。
- ◇ 多くのことを学ぶ、伝えたいという思いが高まったから。

設問4；前年度に比べて本年度の実践内容はどうようになったと思いますか。

No.	選択肢	回答者数	割合
1	とても深まった	4	40%
2	深まった	5	50%
3	ある程度深まった	1	10%
4	あまり深まらなかった+深まらなかった	0	0%
	全体	10	100%

3. 学習者のより良い変化について

研修の学びを活かして学校で当該教育の授業実践を行った結果、学習者により良い変化があったかとの設問に対し、「変化があった」7人、「ある程度変化があった」3人となっており、研修受講者全員が、一定程度の学習者のより良い変化を感じ取っていることがわかる。【設問5】。

設問5；開発教育・国際理解教育の実践により学習者により良い変化がありましたか。

No.	選択肢	回答者数	割合
1	とても変化があった	0	0%
2	変化があった	7	70%
3	ある程度は変化があった	3	30%
4	あまり変化はなかった+変化はなかった	0	0%
	全体	10	100%

より良い変化の内容として多かったのは、「開発途上国や国際協力に関する話題に興味や関心を持つようになった」が8人、「自分と他者・地域・世界のつながりを意識するようになった」が7人「自分に出来る国際協力への取組みに関心を持つようになった」が5人などとなっており、開発途上国や国際協力に対する関心、世界とのつながり意識に関して、より良い変化があったと感じたことがわかる【設問6】。

設問6；学習者にどのようなより良い変化がありましたか。（複数回答）

No.	選択肢	回答者数	割合
1	開発途上国や国際協力に関する話題に興味や関心を持つようになった	8	80%
2	自分と他者・地域・世界のつながりを意識するようになった	7	70%
3	自分に出来る国際協力への取組みに関心を持つようになった	5	50%
4	自分とは異なる他者への共感、周りに対する思いやりの気持ちが育った	4	40%
5	自分の生活を振り返り、世界の人権や環境を大切にすることを意識が高まった	4	40%
6	学ぶことを楽しむようになり、主体的または継続的な学びに取り組む意欲が育った	4	40%
7	話す・聴く能力と態度が向上し、良好な人間関係を築くことにつながった	3	30%
8	自らの生き方や共生について考えるようになった	1	10%
9	その他	0	0%
	全体	8	100%

4. 研修内容への評価

(1) 事前研修

「事前研修」で行った教材収集についてのシート作成や準備検討は、現地研修での学びに役立ったかどうかの評価を聞いた。受講者のうち7人が「とても役立った」、2人が「役立った」としている。一方、1人は「あまり役立たなかった」としている【設問7】。

評価の理由を含めて、事前研修のよかったこと及びより良くするための提案は以下のとおりである。

設問7：「事前研修」で教材収集についてのシート作成や準備検討は、現地研修での学びに役立ちましたか。

No.	選択肢	回答者数	割合
1	とても役立った	7	70%
2	役立った	2	20%
3	ある程度は役立った	0	0%
4	あまり役立たなかった	1	10%
5	役立たなかった	0	0%
	全体	10	100%

<よかったこと>

- ◇パラグアイについての知識がなかったが、概要を知ったことで実践できそうなイメージを持てた。
- ◇事前に学ぶことで、何を準備して臨む必要があるかがわかった。
- ◇共に研修に臨む先生方と渡航前に知り合うことができる貴重な機会となった。
- ◇仲間同士の関係性を築くことができた。
- ◇現地で見えてくる視点や事前知識が無い状態では学びの質が変わると思う。事前研修で学んだことや計画したことは大変役立った。
- ◇準備を行うことによって目的を意識して研修を行うことができた。
- ◇教材収集の作成時間があつたおかげで、自分自身の学びたい内容が明確になり、そのねらいをもって参加することで、寄り多くの学びを得ることができた。
- ◇自分一人で準備すると視野が狭くなる。今回のように受講者同士で話し合う時間があるのはよい。
- ◇研修で何を準備していくとより内容の深まるものになるかイメージがつきにくかったが、過去の研修から用意しておいた方がよい物、情報などを教えてもらい、研修先でよりよい学びが得られるための準備ができたと思う。
- ◇事前準備によって10人の共通理解ができたように思う。
- ◇準備検討を行う目的のみでなく、お互いを知る良い機会となっている。
- ◇メンバーが効率よく教材収集するためには必要。
- ◇訪問先での限られた時間で何をみて、聞いてくるべきなのか考えることができ、研修をより充実したものにできた。

<より良くするための提案>

- ◇自分が予め考えていた実践の内容とパラグアイで学んだことにずれがあつたため戸惑つた。実践内容を考えずに海外へ行くのもありかなと思つた。
- ◇教材収集シートは、現地のイメージがない中で制作するのは難しかった。収集内容の計画は必要だと思つたが、あまり決めすぎなくてもよいと思つた。
- ◇シートの作成や準備検討は、研修の中でなるべく完結できるといいなと思つた。家に持ち帰ってメンバーとメールなどで情報を補完しあふことは、難しいこともあつた。

- ◇教材収集のための観点を明確にできて良かったが、はっきりとテーマ分けできない内容・重複する内容等もあり、時間をかけて詳細を検討するより、リストアップ形式だけでもよいかもしいない。
- ◇実際に現地での研修の中で、聞きたい内容などに变化もあるため、そこに囚われすぎなくても良いと感じた。そのため、詳細な質問というよりは大きな分類くらいの把握でも良いと考える。

(2) 事後研修

事後研修の重要なポイントである「ねらいを達成するための実践プログラムの作成・評価」に対する受講者の評価を聞いた。受講者のうち7人が「とても役立つ」、2人が「役立つ」としている。一方、1人は「あまり役立たなかった」としている【設問8】。

評価の理由を含めて、事後研修のよかったこと及びより良くするための提案は以下のとおりである。

設問8：「事後研修」で、授業実践プログラムの作成・評価を行ったことは実践に役立ちましたか。

No.	選択肢	回答者数	割合
1	とても役立つ	7	70%
2	役立つ	2	20%
3	ある程度は役立つ	0	0%
4	あまり役立たなかった	1	10%
5	役立たなかった	0	0%
	全体	10	100%

<よかったこと>

- ◇親身にプログラムについて相談にのってもらい、よりよいプログラムを作ることができた。
- ◇ここでプログラムを作ったことで、実践がすぐにできた。
- ◇生み出す苦しみはあったが、この研修で作ったプログラムが実践のたたき台となった。
- ◇受講者同士で授業の検討を行うことができ、様々なアドバイスを伝え合い深めることができた。
- ◇事後研修があったおかげで、自分が悩んでつまずいたときもアドバイスをもらいながらプログラムを最後まで考えぬくことができた。
- ◇事後研修で考えた計画をもとに、授業を進めていくことができた。
- ◇他のメンバーからアドバイスをもらい、授業案を改良・改善することができた。
- ◇現地研修の情報量がとても多くどのように教材にすればよいかイメージしにくかったところ、事後研修で JICA や NIED からアドバイスをもらい、本当に役立った。
- ◇海外研修で得たものをどうやって授業に落とし込むか、どのように有効に活用するかが悩ましかったが、それに対していろいろなアドバイスがもらえて参考になった。
- ◇校種は異なるものの、目指す方向性を同じくすることを互いに認識することができた。

<より良くするための提案>

- ◇実践内容がすでに決まっていた自分にとってはあまり役に立たなかったが、実践内容が決まっていない人には必要性があると思う。
- ◇事後ではなく事前研修でプログラム作成の練習をしておけると、より教師海外研修での教材収集が明確になるかと思った。
- ◇第3回の指導者研修の内容と重なるところがあるので、なるべく重複することは確認に留め、事後研修ですべきことにフォーカスできるといい。

5. 教師海外研修の良かったところ、より良くするための提案

「教師海外研修の良かったところ」と「より良くするための提案」の主な回答は以下のとおり。

<良かったところ>

- ◇メンバーに恵まれとても有意義な時間を過ごし貴重な体験ができた。
- ◇教育に直結するような未知の刺激が受けられる教師海外研修のよさを体感できた。
- ◇すべてよかった。教育関係の他、多くの観点で訪問先が選ばれており多くを知り考えることができた。
- ◇時々のふりかえりワークショップのおかげで学びを深めることができた。
- ◇移住地区を訪れるなど、日系社会について実際に学ぶことができた。
- ◇事前研修・事後研修が充実していた。
- ◇教師海外研修の過年度受講者方とも事前と事後に交流でき情報共有や情報交換ができたこと。
- ◇現地で活躍する日本人の活動場所を多く訪れ、貧困、環境、文化、歴史など、多くのことを学んだ。
- ◇日々これほど多くの活動内容を通して学ばせてもらったことで、教師としての引き出しが増えた。
- ◇1年間を振りかえると、多くの休日が研修となり忙しかった(家族のサポートがなければ不可能)が、実際の現場に行くということは、本当にかげがえのない経験だと思うし、一生の財産になった。
- ◇様々な制約があると思うが、一人でも多くの仲間がこの研修に参加し、経験を共有できればと思う。
- ◇教師海外研修をきっかけに、次年度以降も継続的に実践を続けていく新たな手立ての検討ができた。
- ◇学校や病院や農家など多岐に渡る場所を訪問し、様々な角度からパラグアイを知ることができた。
- ◇マナビノオトは帰ってきた今、現地研修を振りかえるにはなくてはならないものになった。
- ◇研修中は毎晩まとめを書くことが大変な時もあったが、やったからこそ価値のあるものになった。
- ◇指導者研修実践編と海外研修と組み合わせ受講したことによって、よりよい実践ができた。
- ◇JICA 及び研修スタッフの素晴らしいサポートのおかげでとても有意義な研修となった。

<より良くするための提案>

- ◇体力が持たないときもあったため、適宜休憩を挟み1日の研修は予定の時間内で収まるといい。
- ◇事前研修(自宅に持ち帰っての研修に向けての準備)を頑張りすぎてしまわないように注意する。
- ◇事前研修の時期は、メンバーとの関係がまだできていない時でついつい頑張り過ぎてしまう。
- ◇1つひとつの訪問先での時間がもう少し長いとより深めることができると思う。

2019年度 教師海外研修報告書

発 行 2020年3月
発 行 者 独立行政法人国際協力機構 中部センター（JICA 中部）
〒453-0872 名古屋市中村区平池町4丁目60-7
Tel：052-533-0220（代表） Fax：052-564-3751
<http://www.jica.go.jp/chubu/>

